

博多 37

—博多遺跡群第65次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集



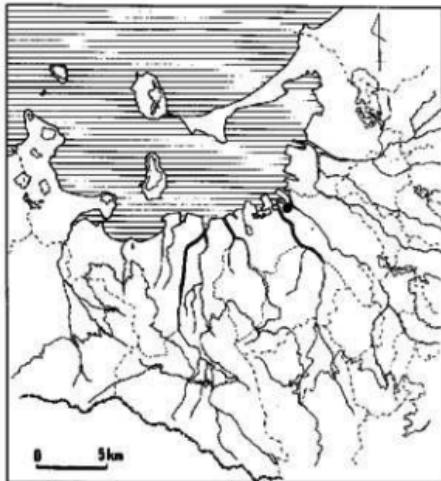
1993

福岡市教育委員会

博 多 37

—博多遺跡群第65次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集



遺跡略号 HKT-65

遺跡調査番号 9017

1993

福岡市教育委員会



序

古くから大陸文化流入の門戸として栄えた国際都市「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに70次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書はビル建設に伴って実施された第65次調査の概要を報告するものです。第65次調査は博多浜の中でも南端に近い祇園地区にあたり、古墳時代初頭の製鉄遺構、奈良時代の建物群、国際貿易都市「博多」が繁栄を示す平安時代末から鎌倉時代の遺構、遺物が検出されるなど多大な成果をえることができました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた株式会社東急建設関係各位に対し、心から感謝を表する次第です。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　言

1. 本書は柳東急建設によるビル建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成2年度に発掘調査を実施した博多遺跡群第65次調査の報告である。
2. 本書に掲載した造構の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の小畠弘己（現福岡市埋蔵文化財センター）、佐藤一郎の他、仁田坂聰が、撮影は小畠、佐藤があたった。
3. 本書に掲載した遺物の実測は小畠、佐藤、上塘貴代子、吉田雅子が、撮影は小畠、佐藤があたった。
4. 製図はIV-1・4を小畠、IV-2の造構を藤村佳公恵、遺物を佐藤、IV-3の造構を藤村、遺物を佐藤、小畠が行った。
5. 本書の執筆はI、IV-1・4を小畠、IV-5を本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）、他を佐藤が行い、編集は小畠、佐藤が行った。
6. 本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

目 次

序	
I はじめに	
1 調査の経緯	1
2 調査の組織と構成	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 発掘調査の概要	4
IV 造構と遺物	
1 古墳時代の造構と遺物	6
2 古代の造構と遺物	18
3 中世の造構と遺物	24
4 その他の遺物	93
5 博多遺跡第65次出土土器に付着した赤色顔料について	99
Vまとめ	101

表 目 次

第1表 出土土器計測表 (1)	85
第2表 出土土器計測表 (2)	86
第3表 出土土器計測表 (3)	87

挿図目次

第1図 博多遺跡群発掘調査地域図	3
第2図 博多遺跡群第65次調査地域周辺図	4
第3図 博多遺跡群第65次調査造構配置図	折り込み
第4図 調査区中央畦土層断面図	5
第5図 704号溝土層断面図(1/40)	6
第6図 704号溝出土遺物実測図(1/4)	7

第7図	731号掘立柱建物実測図(1/60)	8
第8図	703・727号住居址実測図(1/50)	9
第9図	703・727号住居址出土遺物実測図(1/4)	10
第10図	730号方形周溝墓および出土遺物・729号土壤実測図(1/50・1/4)	12
第11図	706号土壤実測図(1/20)	13
第12図	706号土壤出土遺物実測図(1/4)	15
第13図	706号土壤出土輪羽口・碗形浮窓実測図(1/4)	16
第14図	各遺構・包含層出土遺物実測図(1/4)	17
第15図	707号掘立柱建物実測図(1/60)	19
第16図	739号掘立柱建物実測図(1/60)	20
第17図	700号井戸実測図(1/40)	21
第18図	707号掘立柱建物・700号井戸出土遺物実測図(1/3)	22
第19図	各遺構・包含層出土遺物実測図(1/3)	23
第20図	003号溝実測図・上層断面図(1/40)	折り込み
第21図	004・009・010号井戸実測図(1/40)	25
第22図	006・007・008号井戸実測図(1/40)	26
第23図	012・013号井戸実測図(1/40)	27
第24図	014・025・026・029・031号井戸実測図(1/40)	28
第25図	020・048・049号井戸実測図(1/40)	30
第26図	037・107号井戸実測図(1/40)	32
第27図	200・301号井戸実測図(1/40)	33
第28図	400号井戸実測図(1/40)	35
第29図	527・528号井戸実測図(1/40)	36
第30図	529・532号井戸実測図(1/40)	37
第31図	595・663・664号井戸実測図(1/40)	38
第32図	816・842号井戸実測図(1/40)	39
第33図	890・893号井戸実測図(1/40)	40
第34図	001・017・018・019・032・033号土壤実測図(1/40)	42
第35図	101・104号土壤実測図(1/40)	43
第36図	034・844・030・596・479・845・300号土壤実測図(1/40)	45
第37図	386・399・476・578・590・483・551・818号土壤実測図(1/40)	46
第38図	244・597・810号井戸実測図(1/40)	47
第39図	478号木棺墓・486号土壤墓実測図(1/20)	48

第40図	溝出土遺物実測図(1/3)	50
第41図	井戸出土遺物実測図(1)(1/3)	51
第42図	井戸出土遺物実測図(2)(1/3)	53
第43図	井戸出土遺物実測図(3)(1/3)	55
第44図	井戸出土遺物実測図(4)(1/3)	56
第45図	井戸出土遺物実測図(5)(1/3)	57
第46図	井戸出土遺物実測図(6)(1/3)	59
第47図	井戸出土遺物実測図(7)(1/3)	60
第48図	井戸出土遺物実測図(8)(1/3)	61
第49図	土壤出土遺物実測図(1)(1/3)	63
第50図	土壤出土遺物実測図(2)(1/3)	65
第51図	土壤出土遺物実測図(3)(1/3)	67
第52図	土壤出土遺物実測図(4)(1/3)	69
第53図	土壤出土遺物実測図(5)(1/3)	71
第54図	土壤出土遺物実測図(6)(1/3)	72
第55図	土壤出土遺物実測図(7)(1/3)	73
第56図	土壤出土遺物実測図(8)(1/3)	75
第57図	土壤出土遺物実測図(9)(1/3)	77
第58図	土壤出土遺物実測図(10)(1/3)	79
第59図	土壤出土遺物実測図(11)(1/3)	81
第60図	土壤出土遺物実測図(12)(1/3)	82
第61図	土壤出土遺物実測図(13)(1/3)	83
第62図	土壤出土遺物実測図(14)(1/3)	84
第63図	花卉文軒丸瓦実測図(1/4)	90
第64図	押圧波状文軒平瓦実測図(1/4)	91
第65図	平瓦実測図(1/4)	92
第66図	金属器実測図(1/2)	93
第67図	ガラス製品実測図(1/1)	94
第68図	鹿角製鍼形実測図(1/2)	95
第69図	土製品・石製品実測図(1/3)	96
第70図	出土銅錢拓影(2/3)	98
第71図	漆膜実測図(1/2)	98
第72図	井戸の分布(1/500)	102

図版目次

- | | | |
|------|--|--|
| 図版1 | 1. I区全景（東から）
3. I区南半（北から） | 2. I区北半（東から）
4. I区南半（東から） |
| 図版2 | 1. II区I面全景（東から）
3. II区II面全景（東から） | 2. II区柱穴群（東から）
4. II区III面全景（東から） |
| 図版3 | 1. II区V面全景（東から）
3. II区V面北半（西から） | 2. II区V面全景（西から）
4. II区南側V面（東から） |
| 図版4 | 1. III区II面全景（西から）
3. III区IV面全景（西から） | 2. III区III面全景（西から）
4. III区北側III面（西から） |
| 図版5 | 1. 704号溝土層（北から）
3. 703号堅穴住居遺物出土状況（東から）
4. 727号堅穴住居（東から） | 2. 703号堅穴住居（北から） |
| 図版6 | 1. 730号方形周溝墓（北から）
3. 706号土壙
4. 706号上層挽形浮輪羽口出土状況（西から） | 2. 769号遺構（西から） |
| 図版7 | 1. 706号土壤土師器出土状況（北から）
2. 706号上層土師器出土状況（西から）
3. 706号土壤完掘状況（西から） | 4. 731号掘立柱建物（北から） |
| 図版8 | 1. 707号掘立柱建物（南から）
3. 739号掘立柱建物（北から） | 2. 707号掘立柱建物（西から）
4. 707号井戸（西から） |
| 図版9 | 1. 243号遺構（南から）
3. 003号溝（北から）
5. 003号溝土層（北から） | 2. 243号遺構（北から）
4. II区土層（北から）
6. 003号溝（北から） |
| 図版10 | 1. 004号井戸（西から）
3. 006・007・008号井戸（西から）
4. 006・007号井戸（北東から）
5. 008号井戸枠（南から） | 2. 004号井戸枠（北西から）
6. 009号井戸（南東から） |
| 図版11 | 1. 009号井戸枠（南から）
3. 010号井戸枠（南から）
4. 012・013・014・015号井戸（北から）
5. 012号井戸枠（北西から） | 2. 010号井戸（東から）
6. 013・048号井戸枠（南から） |
| 図版12 | 1. 014号井戸枠（西から） | 2. 015号井戸枠（西から） |

3. 020号井戸（東から） 4. 020・049号井戸枠（南から）
5. 025・026・028・029・030・031号井戸（北西から）
6. 025号井戸（北東から）
- 岡版13 1. 025号井戸枠（北東から） 2. 027号井戸枠（南から）
3. 029号井戸枠（北東から）
4. 029号井戸枠遺物出土状況（北から）
5. 031号井戸枠（北から） 6. 037号井戸（西から）
- 岡版14 1. 037号井戸枠（西から） 2. 107号井戸枠（西から）
3. 200号井戸（北から） 4. 200号井戸枠（西から）
5. 202号井戸（北から） 6. 301号井戸（北から）
- 岡版15 1. 301号井戸枠（東から） 2. 400号井戸（北から）
3. 400号井戸枠（北から）
4. 527・528・529・621号井戸（西から）
5. 529号井戸枠（東から）
6. 527・528・529・621号井戸枠（西から）
- 岡版16 1. 527号井戸枠（南から） 2. 532号井戸（北から）
3. 595号井戸（東から） 4. 595号井戸枠（南から）
5. 621号井戸土層（西から） 6. 621号井戸枠（西から）
- 岡版17 1. 644号井戸（北から） 2. 660号井戸（南から）
3. 663号井戸（北から） 4. 663号井戸枠（北から）
5. 664号井戸枠（北から） 6. 842・859号井戸（南から）
- 岡版18 1. 001号土壤（南から） 2. 017号土壤（南から）
3. 018号土壤（南から） 4. 019号土壤（南から）
5. 021・022・023・024土壤（北東から）
- 岡版19 1. 033・034・035・036号土壤（東南から）
2. 244号土壤（南から）
3. 102号土壤土層（北から） 4. 302号土壤土層（北から）
- 岡版20 1. 486号土壤墓（北から） 2. 597号土壤（東から）
3. 478号木棺墓・597号土壤（北から）
4. 810号土壤（南から）
- 岡版21 古墳時代の出土遺物(1)
- 岡版22 古墳時代の出土遺物(2)
- 岡版23 溝・井戸(1)出土遺物

- 図版24 井戸(2)・土塙(1)出土遺物
- 図版25 土塙(2)出土遺物
- 図版26 土塙(3)出土遺物
- 図版27 土塙(4)出土遺物・墨書き陶磁器
- 図版28 花卉文軒丸瓦・押圧波状文軒平瓦(1)
- 図版29 押圧波状文軒平瓦(2)・平瓦
- 図版30 その他の遺物

第一章 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯

さる1988年3月22日、東急建設株式会社は、福岡市博多区紙園町161-1地内において、ビルの建設にあたり、当該地における埋蔵文化財の有無の照会を行った。これを受け、埋蔵文化財課は、この地点が博多遺跡群に入り、隣接する地点でも数次にわたる調査が行われ、古墳時代から中世にかけての重要な遺構や遺物が検出されているという成果をもとに、申請者に対して、事前の調査が必要であるとの解答を述べた。この結果、双方で協議を行い、1990年7月から同年12月にかけて発掘調査を行うこととした。

なお、発掘調査に際して、東急建設株式会社が調査地の養生や地山掘削などの設営を担当した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査依託 東急建設株式会社

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査総括 文化部埋蔵文化財課 課長 柳田純孝（前任）
第一係長 柳沢一男（前任）

調査担当 第一係 小畠弘己（前任）・佐藤一郎

事務担当 第一係 松延好文（前任）

調査作業 出雲義住、上野龍夫、上野ミヤ子、内山和子、大村芳雄、小笠原浦太、奥田弘子、海雲賢司、金子元、久良木シズエ、佐々木幸子、仁田坂聰、浜地富男、福沢山次郎、船越恒人、松永武士、三浦力、光安利津江、村上エミカ、村上エミ子、脇坂レイコ

整理作業 相川和子、青木春香、今井民代、上塘貴代子、久家小百合、下河純子、田中依里、田中ヤス子、中原尚美、中溝知佐子、藤野邦子、藤村佳公恵、星子輝美、吉田雅子

第二章 遺跡の位置と環境

今回の調査区域は博多浜の南端近くの祇園地区に位置し、周辺域は地下鉄建設に伴う発掘調査以降、特にメインストリートである大博通り、團体道路をはさんでビル建設に伴う発掘調査が進み、博多遺跡群の中でも遺跡の消長を追うことができる。占墳時代初頭の造構は博多遺跡群の中でも最も集中する地域であり、畿内・山陰系の外来系土師器の出土も目を見張るものがある。奈良時代の造構は博多浜全域ではほぼ平均してみられるが、後世の造構によって破壊されるため井戸のような深く掘り込まれた造構がそのほとんどであるが、祇園地区においては都市化の開始が博多浜の北部、中央部より遅く平安時代は12世紀前半まで造構が疎らで、その間に堆積した風成砂、包含層にも保護され、12世紀中頃以降の造構による破壊も井戸等の深く掘り込まれた造構を除いて受けとおらず、後世の井戸もそう密集したものではなく、奈良時代以前の造構の残存は概ね良好である。当調査区域から西へ約300mの第63次調査区域では奈良時代から平安時代にかけての竪穴式住居、柱穴、木棺墓が検出されている。平安時代に入ると、先述のとおり12世紀中頃まで造構が疎らで、博多浜の北部、中央部でみられるような11世紀後半から12世紀前半にかけての造構の密集はみられず、都市化の開始は12世紀中頃まで下がる。1151年、菅崎・博多で仁平の大追捕が行われる。大宰府目代らに率いられた大宰府檢非違別當安清・同執行代監種平・季実ら五百余騎の軍勢が菅崎・博多を襲撃し、宋人王界の後家をはじめとする千六百家の資材を略奪するなどの事件である。日宋貿易をめぐる大宰府と菅崎宮との複雑な争いである。この事件でもわかるように、博多には多くの宋人が居留していた。12世紀中頃から後半にかけては平氏が榮華をきわめた時代であり、平清盛が大宰大式に任せられる1158年前後から平氏と対外貿易港博多との密接な関係が始まり、日宋貿易の物資流通経路として、兵庫の大輪田泊の修築、瀬戸内航路の整備を進めていく。中山平次郎氏は鴻臚館と同様に和歌から対外貿易港「袖の湊」を博多郡に比定し、清盛によってほぼ同時期に築かれたとされたが、現在までのところ考古学的調査によって確認されてはいない。1166年には清盛の異母弟頼盛が大宰大式に任せられ自ら任地に下り、有力寺社、莊園を支配下におさめていく。1133年に鳥羽院領肥前國神崎庄に宋船が来航した際、清盛の父忠盛は院下文を院宣と偽り大宰府の検問を拒み、私貿易を行った。もっとも、筑後川を廻上して現在の佐賀県神崎郡にまで宋船が着岸したとは考えにくい。何らかの拠点となる施設が博多に置かれていたのかもしれない。12世紀末から13世紀初頃にかけて、榮西によって日本最古の禅寺である聖福寺、1242年には、宋商謝国明の援助のもと円爾によって承天寺が開山された。日宋貿易の展開は単に物資の往来のみならず、文化、宗教にまで及んでいる。



第1図 博多遺跡群発掘調査地域図

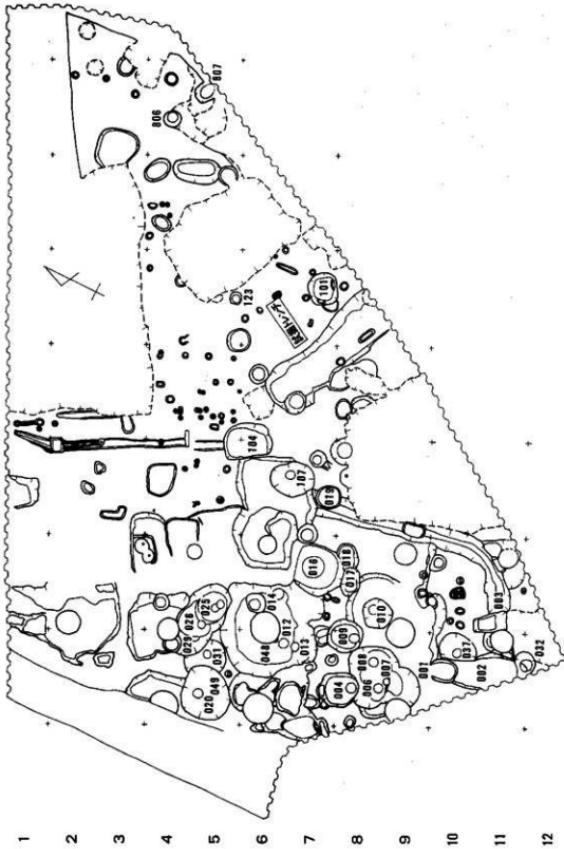
第三章 発掘調査の概要

調査区は排水溝を調査区域内で確保しなくてはならないために、西から3区分しI・II・III区と称し、打つ手替えをして調査を行った。7月に先ずI区から調査に入ったが、基礎杭及び搅乱を除去した段階で基盤の黄白色砂に至り、12世紀後半から近世・近代の井戸、土壌、12世紀後半の構を検出した。8月に入ってII区に入った。後世の搅乱はI区ほどには至らず、都合5面の造構面を設定した。1層一暗青灰色土(粗砂を多く含む)上面で造構の検出にかかったが、この時点では現代の搅乱、遡っても19世紀末の造構を検出したにすぎない。このため、F～H～1～5区を中心として2層一明黄褐色土上面まで掘り下げ、第I面とし造構検出を行った。II～K～6～9区ではこの2層一明黄褐色上層が明確でないが、標高(4.6m)では同じ



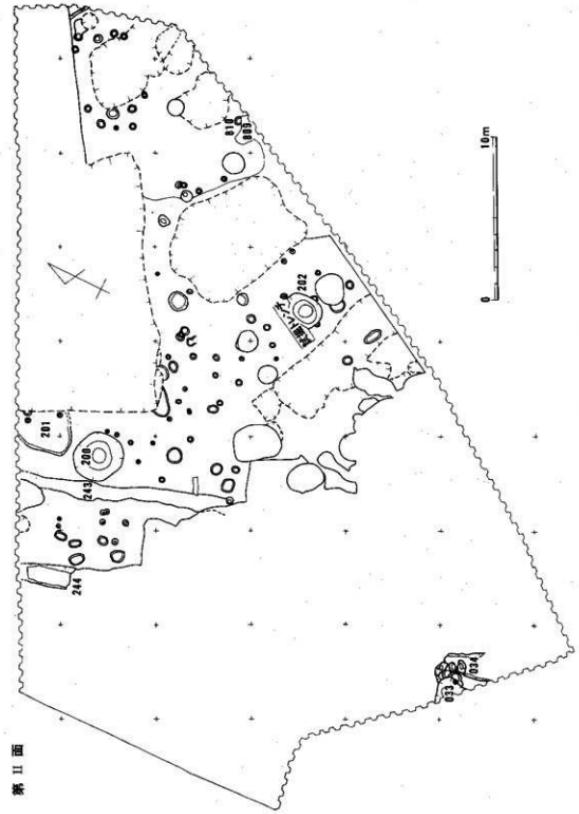
第2図 博多遺跡群第65次調査地域周辺図

第一面

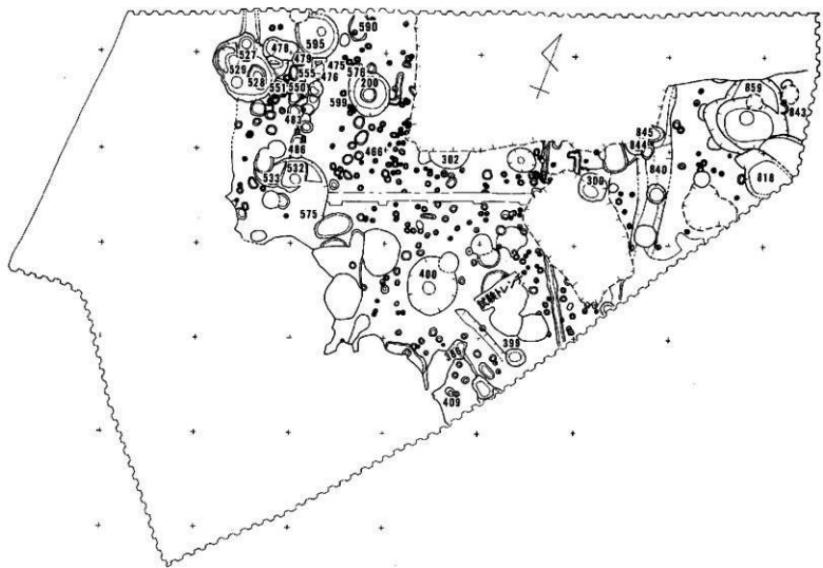


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q

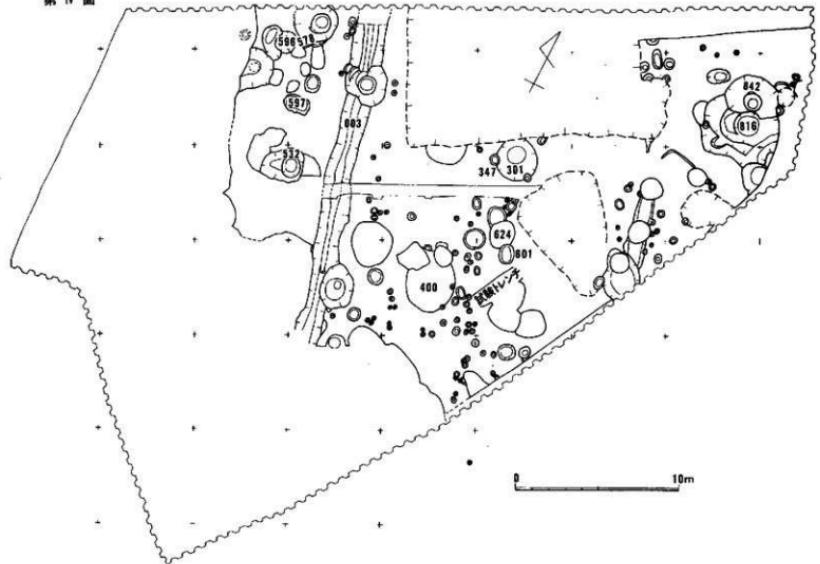
第3図 博多造跡群第65次調査遺構配図



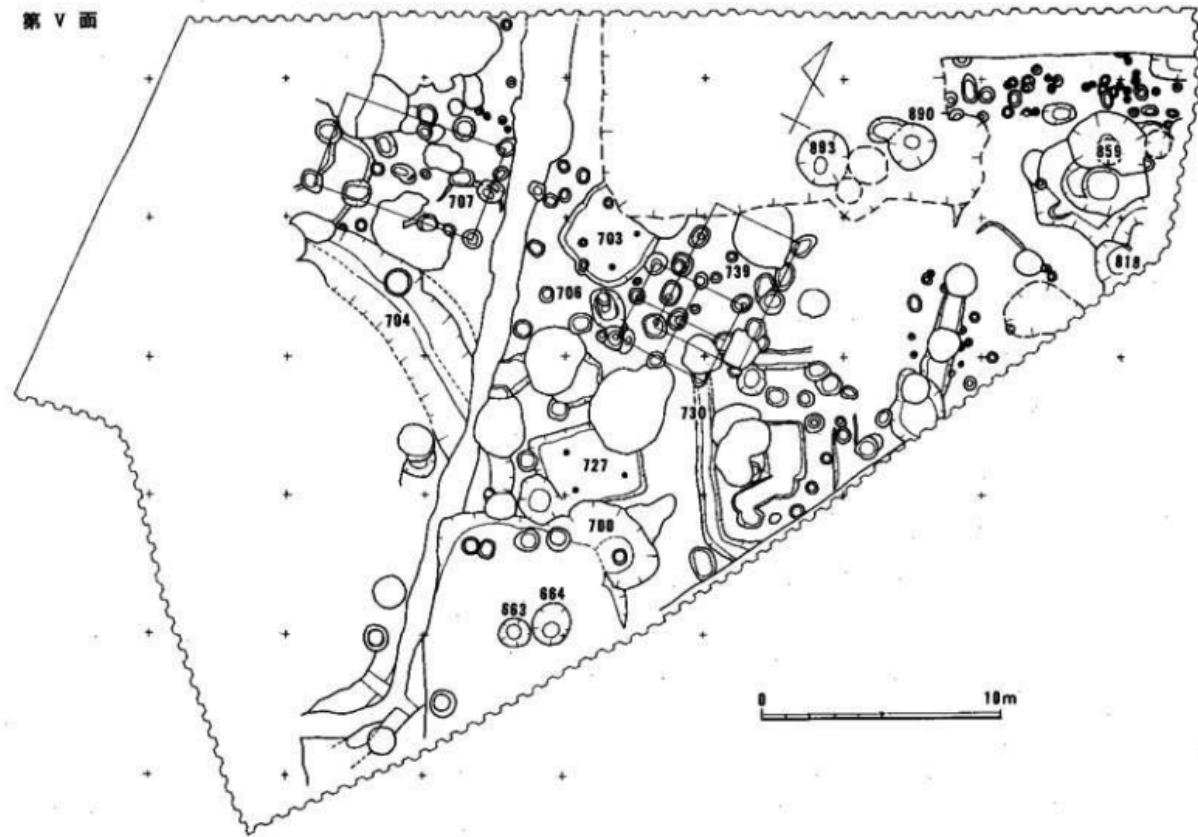
第三面

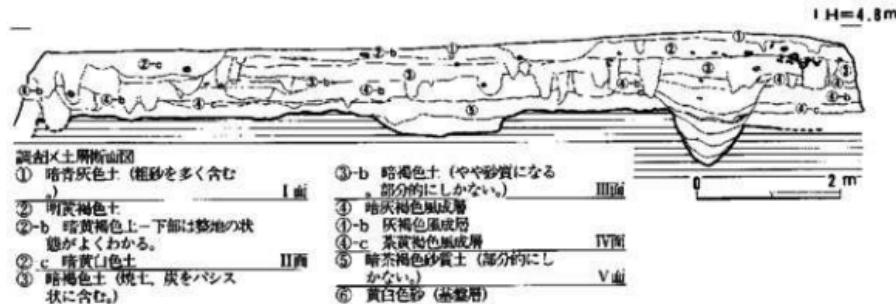


第四面



第V面





第4図 調査区中央土層断面図

くした。また部分的にK-6・7区付近では、標高が低くなり3層-焼土塊、炭をバシス状に含む暗褐色土（もしくは焼土を含む遺構か。）の上面まで下がっている。この結果、F-H-1～5区を中心とし近世から中世のピットが検出され、H-J-6・8区に点在するピットは覆土に焼土を含むものもあり、時期的に遡る可能性もある。第II面は3層上面の標高4.2～4.3m付近、13世紀後半を中心とする時期の土壌、井戸、ピット群を検出した。第III面は4層-暗灰褐色風成砂上面の標高4.0m付近に設定し、覆土に焼土塊、炭を含む12世紀後半から13世紀初頭にかけての遺構が多数検出された。第IV面は5層-暗茶褐色砂質土上面の標高3.5～3.7m付近に設定したが、5層から掘り込まれた遺構は部分的にしかみられず、上面で検出できなかった4層掘り込みの遺構を少なからず検出した。第V面は5層-基盤の黄白色砂上面で、標高3.3～3.4mを測る。部分的に奈良時代の掘立柱建物の基礎地業と考えられる暗黒～茶褐色砂質土がみられる。奈良時代の掘立柱建物、井戸、暗茶褐色砂質土の覆土上の古墳時代初頭の竪穴式住居跡、掘立柱建物、楕円形溝・鋪石口を発見した土壌を検出した。11月に入りてIII区の調査に入り、II区と同様の層位を設定したが古墳、奈良時代の遺構は認められなかった。

第四章 検出遺構と遺物

1. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構はおもに第5面およびその下面で検出した。基盤の黄色砂層に切り込んだ遺構群である。その種類には、溝、掘立柱建物、住居、墓、生産関連遺構などがある。

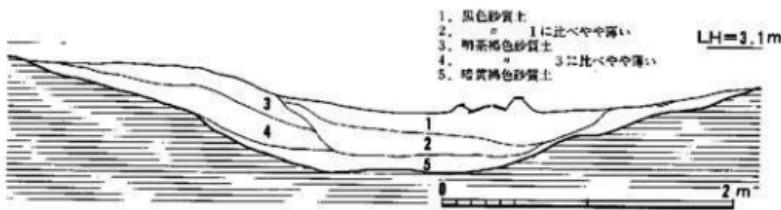
1) 溝

第704号溝〔第3・5図、図版5〕

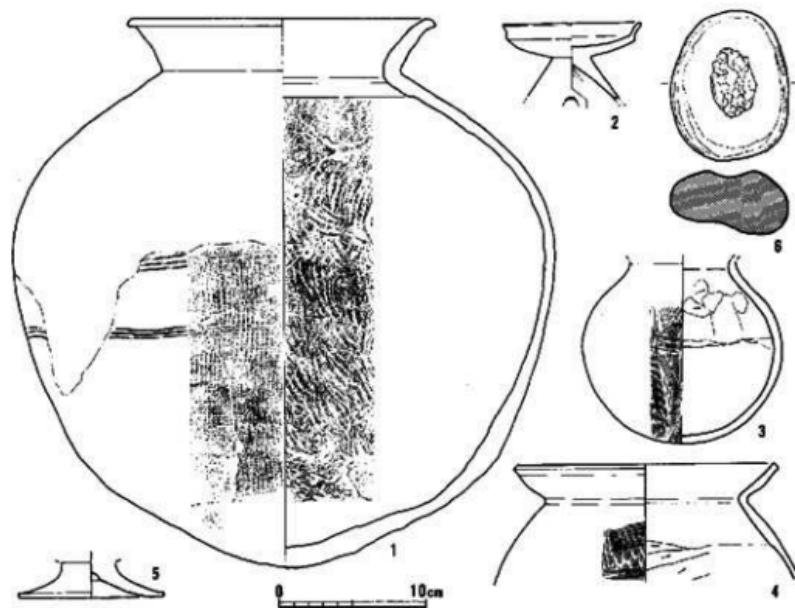
I区とII区の境付近のD-4区からD-11区にかけて巡る弧状の溝である。幅5m、深さ0.8mほどの浅い溝で、立ち上がりは極めて緩やかである。土層の堆積状況は、残りの良いところで観察すると、大きく3層に分けられ、上から黒色砂質土、茶褐色砂質土、暗黃褐色砂質土である。中下層はそれぞれ色の濃さから2枚と3枚に分けられ、第5図の1・2層と3~5層が、これにあたる。含まれる遺物はさほど多くないが、上層と中層の間から須恵器甕と馬の頭の骨が出土している。これ以外の遺物は下層を中心とした古墳時代前期の土師器が主体で、土層の堆積状況からみても、この須恵器が廃棄された時点では前期の溝がまだ凹地を呈していた可能性が高い。現存部分から復元すると、直徑30mほどの規模になるが、溝の性格については不明である。

出土遺物〔第6図、図版21〕

1は馬の骨と一緒に出土した上述の須恵器の変形土器である。外面は肩から胴部にかけて自然釉がかかる。それ以外の部分には縱方向のタタキ痕跡と内面には青海波の叩きの痕跡が認められる。焼き歪みが激しい。約半分が残る。器高38cm、口径21cm、最大幅37cmである。1~5は土師器である。2は器台である。3は丸底盤の胴部である。4は変形土器の口縁部の破片である。5は脚台付鉢の脚部である。6は凹石で変斑鰐岩製と思われる。



第5図 704号溝土層断面図



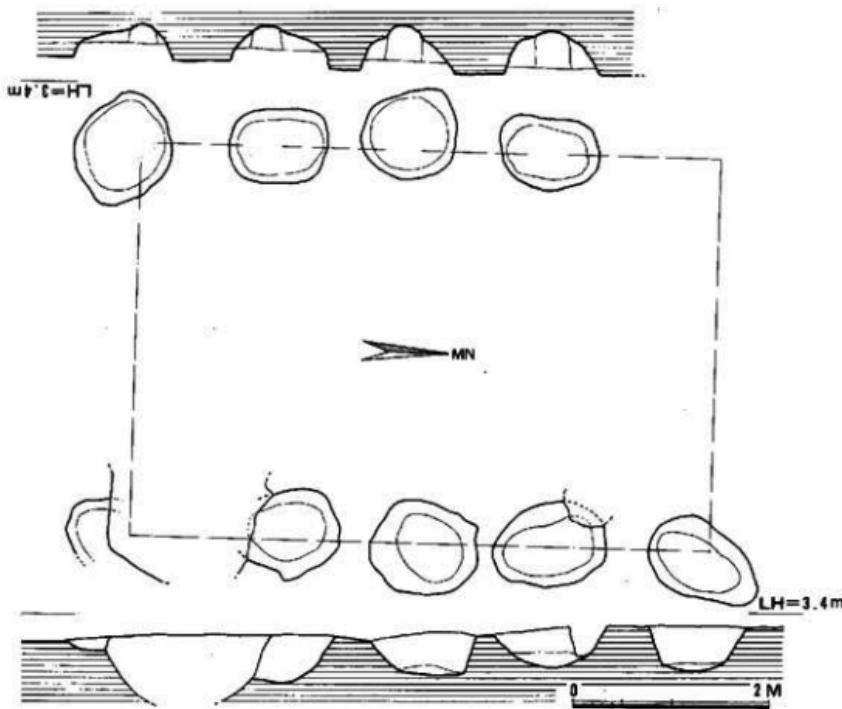
第6図 第704号溝出土遺物実測図(1/4)

2) 挖立柱建物

第731号掘立柱建物 [第7図、図版7]

V面のI~K-4~6区で検出した建物跡である。直径1mほどの大きな柱穴をもち、桁行4間、棟行1間の長方形プランである。建物の規模は、 6×4 mである。西側の4個の柱穴には直径30~40cmの柱痕跡が認められた。方位はほぼ磁北と同じである。柱痕跡のスパンは1.2~1.5mと、ばらつきがある。

出土遺物には、古式土師器の小片のみが含まれていた。覆土は灰褐色砂質土で、古代の掘立柱建物より、濃い色合いを示す。奈良時代の第739号掘立柱建物と一部重複する部分がある。また、建物の方向は古代の建物と同じであるが、棟の柱の間が4mと広く、古代建物と異なることや、桁行の柱のスパンも古代建物と異なることから古墳時代に属するものと考えた。しかし、方形周溝墓などの切り合いもみられ、住居とも近接することなどから、これらと同時期に併設されたものではないようである。



第7図 第731号柱立柱遺物実測図(1/60)

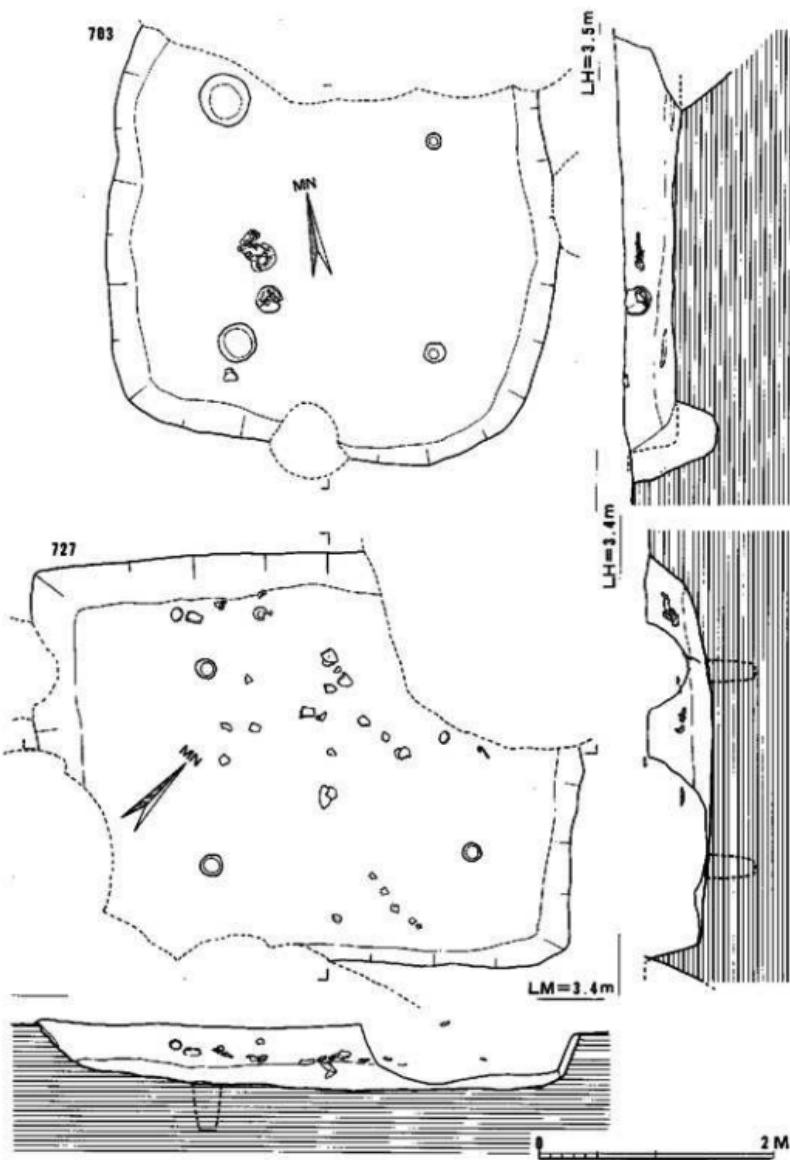
3) 住居跡

第703号住居跡〔第8図、図版5〕

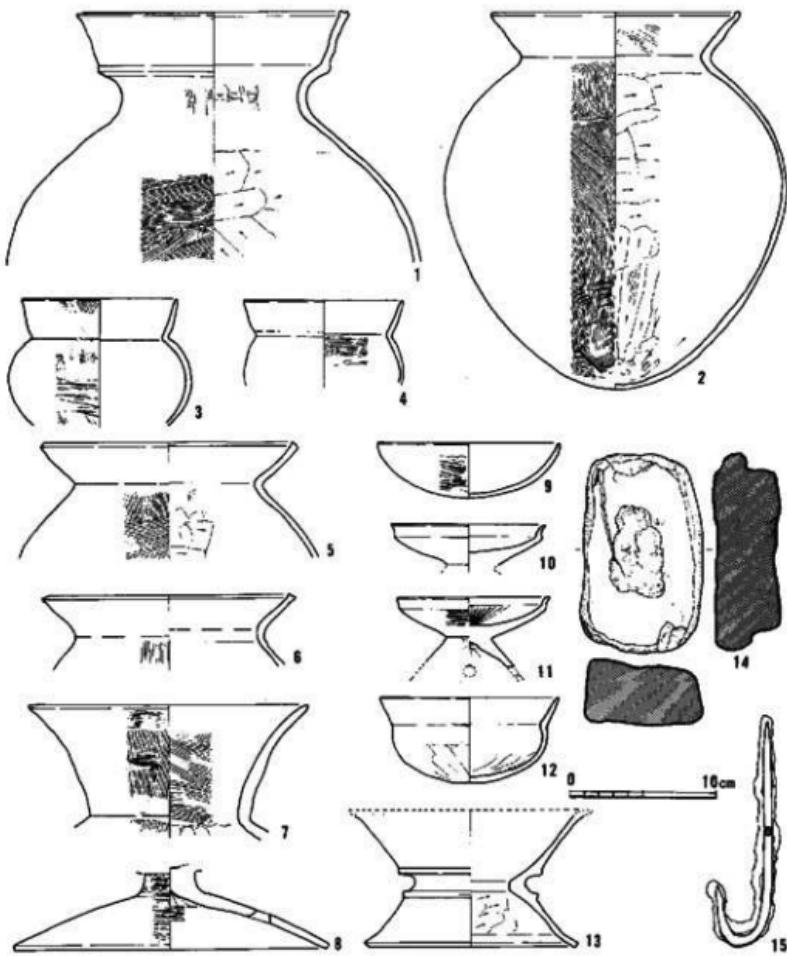
H・I-3・4区で検出した方形の竪穴住居跡である。北壁を他の遺構に破壊されている。長さ3.9m、深さ0.6mである。幅は3.4m以上で、柱穴の位置から推定しておよそ3.9mほどになるため、ほぼ正方形に近い平面形をもつものと考えられる。柱穴は4個あり、北西隅の1個がやや北よりにずれるが、その距離は平均して1.8mと1.6mである。柱穴の深さは25~30cm、直径は12~40cmである。覆土は茶色から黒褐色の砂質土である。遺物は覆土中から出土した土師器の小片以外に、南西隅の柱穴に近接して土師器の変形土器と壺形土器が並んで出土した。上器の残り具合から住居に遺棄されたものである可能性が高い。

出土遺物〔第9図、図版21〕

上記の土師器2個体と小型丸底壺の破片を2点図示した。1は二重口縁の変形土器で、下部を欠く資料である。胴部外面には刷毛目調整の痕跡がある。内面はケズリで、肩から上をナ



第8図 第703・727号住居跡実測図(1/50)



第9図 第703・727号住居跡出土遺物実測図(1/4)

テ消す。2はほぼ完形に近い變形土器で、口径17.2cm、胴部最大径23.6cm、器高26cmである。口縁内端をまるくつまみ出す。外面にタタキと刷毛目、内面にケズリ痕をとどめる。3と4は小型丸底壺の破片である。きめの細かい胎土をもち、調整は細かい刷毛目とミガキを残す。赤橙色を呈する。

第727号住居跡〔第8図、図版5〕

第703号住居跡の南約6mのところに位置する長さ4.6m、幅3.4mの長方形のプランをもつ堅穴住居跡である。検出面からの深さは0.6mである。柱穴は長方形に4個配列され、その距離は1.7mと2.4mである。柱穴の深さは40~45cm、直径18~20cmである。覆土は明茶褐色の砂質土であるが、土層ベルトの観察によると、住居中央よりやや北よりに、暗黒色のレンズ状の砂質土の部分があった。炉跡の可能性もある。遺物は土師器の小片を中心に、石器や鉄器各1点が覆土の中位から上位にかけて散漫な分布を示しながら出土している。上位から出土した破片は第706号土壙から出土した土器と接合していることから、住居の廃絶時もしくはその後に捨てられた遺物と考えられる。

出土遺物〔第9図、図版21〕

5~13は土師器である。5と6は甕型土器の口縁部の破片である。7はラッパ状に開く口縁部をもつ壺形上器の破片である。明橙色の胎土をもち、器壁が厚い。内外面に刷毛目を残す。8は脚付鉢の脚部である。3個所に丸い透しの穴をもつ。9は環の破片である。10と11は器台の坏部である。12は丸底壺の破片である。器壁は薄く、細かいミガキの痕跡が認められる。復元口径12.3cm、器高13.8cmである。13は鼓形器台の破片である。上は5や6などの甕形土器に似る。復元口径16.8cm、器高9.4cmである。14は凹石である。長方体の河原石を利用したものである。石材不明。15は鉄製の釣針である。長さ15.7cm、幅3.9cm、径0.6cmの製品である。鋭い三角形のアグをもち、フトコロは狭く深い。頭は長い円錐形で糸の緊繩のための特別な加工はない。

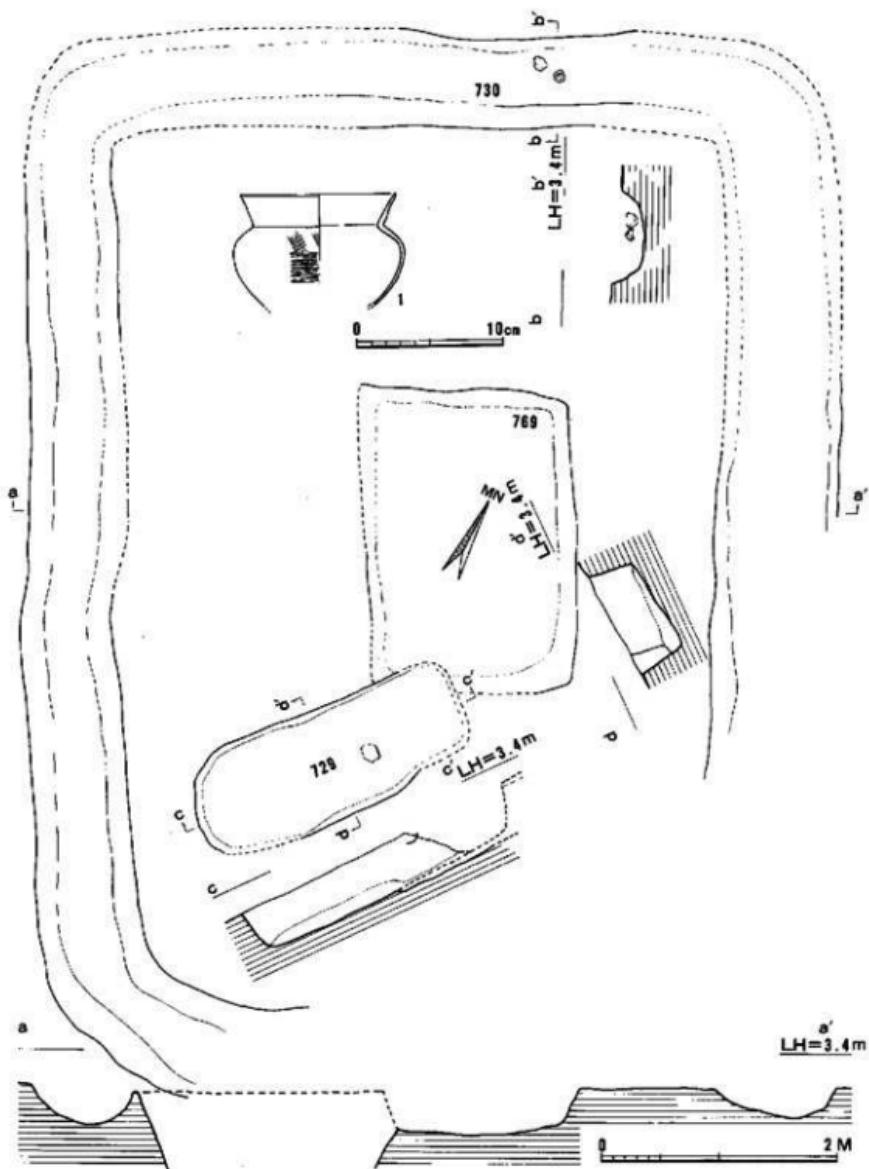
4) 墓

第730号方形周溝墓〔第10図、図版6〕

J-K-5~8区にかけて抜がる長方形の溝とその主体部と考えられる第769号土壙からなる。第769号土壙は、長さ2.6m、幅1.8m、深さ0.4mの長方形の上壙で、淡茶褐色の砂を埋土にもつ。特別な施設もなく、後世の造構に壊されていることもあって、その構造は把握できなかつた。

出土遺物は少量の土師器の小片があるのみである。この土壙を切る第729号土壙からは古式土師器の甕形上器の胴部の破片が出上している。溝は、幅0.9m、深さ0.3mほどで、調査区外へ延びるため全体は把握できなかつた。推定規模は溝の外周で、長さ9.2m、幅6.9mである。K-6区で小型丸底壺の破片と砾が出土している以外は、土師器の細片が少量出土しているにすぎない。しかし、造構検出中に同じ区の5層から2点の占式土師器の完形品(第14図3・4)が検出されており、出土地点が同じ区であることから、この溝に伴う可能性が高い。

出土遺物〔第10図〕



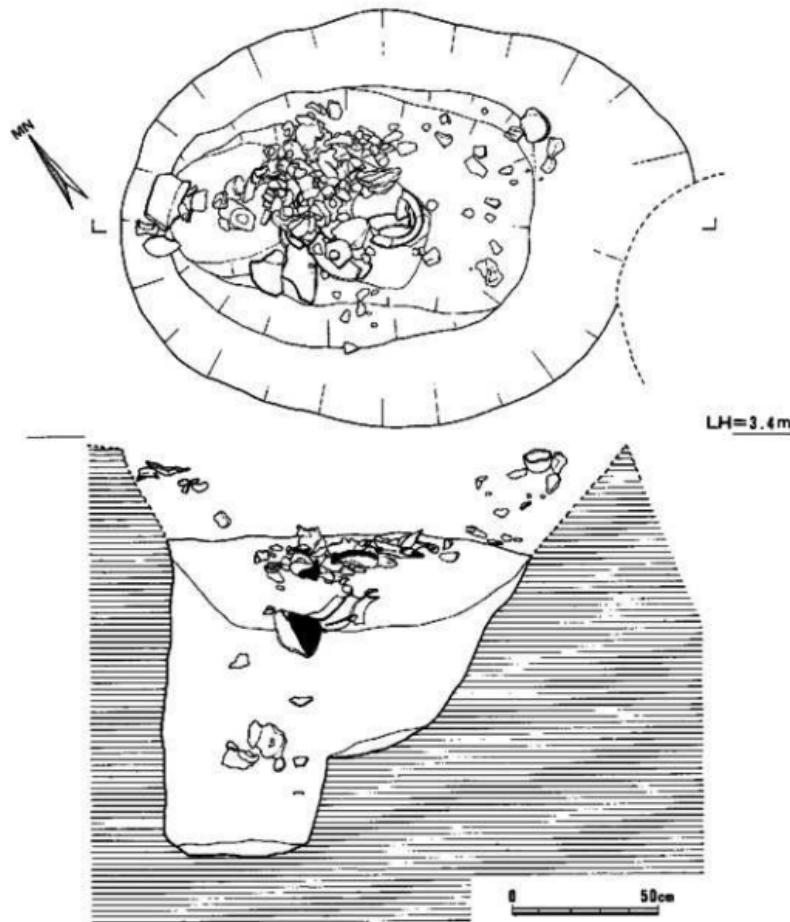
第10図 第730号方形周溝墓および出土遺物・第729号土壙実測図(1/50・1/4)

1は土師器の小型丸底壺である。器壁が1.7mmときわめて薄く、精巧なつくりである。

5) 錫冶関連遺構

第706号土壙 [第11図、図版7]

H-5区で検出した長さ2m、幅1.4m、深さ1.1mの楕円形の土壙である。多量の鉄滓や碗形



第11図 第706号土壙実測図(1/20)

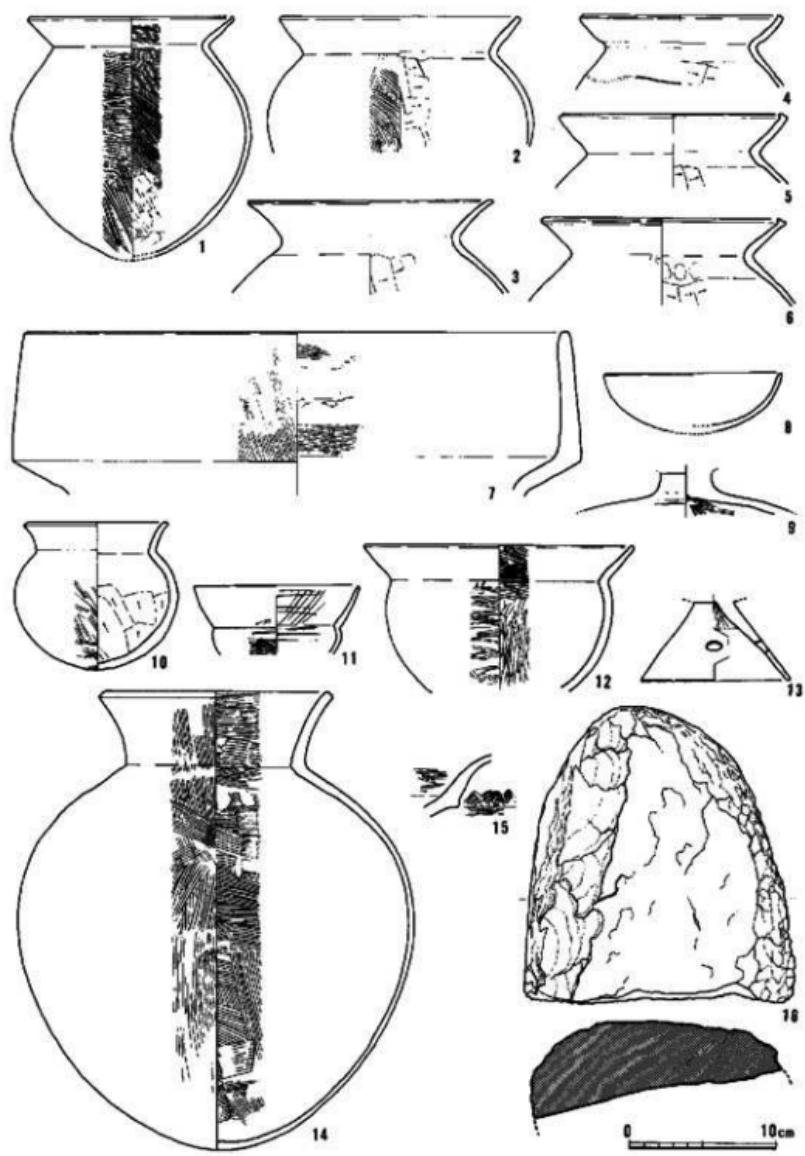
洋と轆の羽口や土器片などが廃棄してあった。遺物は遺構のプランを確認した面より20cm上から出土している。遺物が集中するのは底から1mから0.8mのところで、轆羽口と碗形洋が40cm×50cmの範囲にまとまって出土している。この直下には、ほぼ一個体の壺形上器の破片と偏平な蝶があった。これより下はあまり遺物の出土ではなく、約40cm隔てて2個の大型の羽口が出土しているにすぎない。この下位は二段掘りの長さ0.25m、幅0.3mの穴になっており、ここには黒色の土と土器の細片が詰まっていた。

埋土は茶褐色～黒褐色の砂質土である。この土には、土器片や鉄洋などの大型の廃棄物に混じって鍛造片や粒状洋がはいっていた。このため遺物の取り上げの際に25cmのメッシュを切って5cmごとの深さで土を取り上げた。この土は乾燥後縫にかけ、磁石で鉄片や湯玉を探取した。の中には、鍛練粒状洋や鍛造片の他に、木炭、砂鉄なども含まれていた(図版22)。鍛練粒状洋は直径5mmのものから1mmに満たない極小なものまである。また、鍛造片には、砂の付着する1cm前後の形状や厚さが一定しないものとそれ以下の薄板状のものがある。前者には、針金状のものが含まれている。後者の表面は青みを帯びた銀色を呈し、極めて薄いのが特徴である。これらは、おそらく鍛冶工程の各段階の差を示すものと考えられる。薄板状の細かい鍛造片は、鍛造の最終段階に飛び散るものであり、詳細な科学分析を経ていないため明白はできないが、おそらくここでは、鉄板などの素材から鉄器を製作のための鍛練鍛冶が行われたと考えられる。

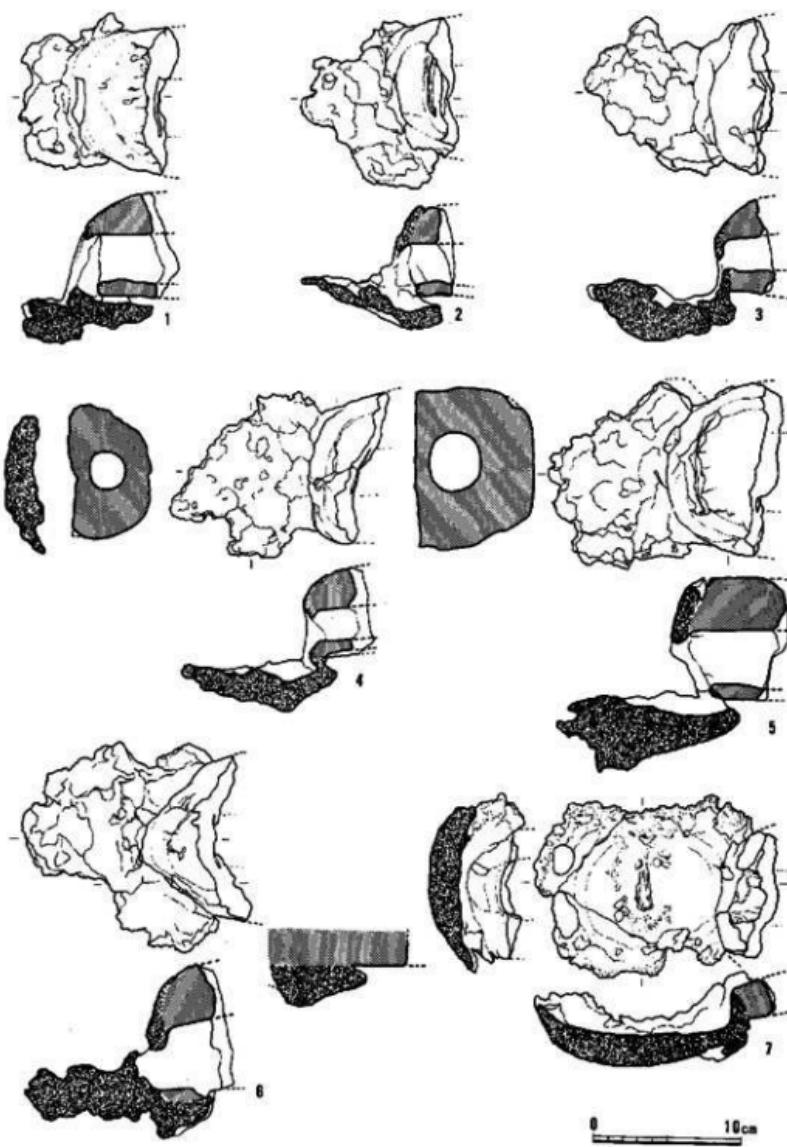
羽口の破片などは近接する第727号住居跡からも出土しているし、土師器の同一個体(第12図1)の破片がこの第706号土壙と第727号住居跡から出土していることから、この上部に一括廃棄された遺物は、この2つの遺構が廃棄される時点のものである可能性が高い。または、この第706号土壙が廃棄穴として使用されている段階では、すでに第727住居は廃棄されており、廃棄場所として使用されたとも考えられる。

出土遺物〔第12・13図、図版21〕

第12図に示したのは土師器と石器である。1は庄内式系の壺形土器である。口縁内端をつまみ出す。最大径は胴部中程にあり、底部は尖り気味の丸底である。橙色から明茶褐色を呈する。外面は横方向のタタキで、底部から胴部下半にかけて粗い縱方向の刷毛目を加える。内面は細かい刷毛目を残し、底部付近はケズリを加える。復元口径14cm、胴部最大径16.3cm、器高16.8cmである。2～6は布留式系の壺形上器の口縁である。7は二重口縁の大形の壺形上器である。8は壺の破片である。9は脚付鉢の脚部である。10は小型丸底壺である。口径9.8cm、器高10cm。外面胴部下半には刷毛目を残す。11は器壁の薄い小型丸底壺の破片である。口縁内面には暗文風のミガキがある。12は鉢の破片であるが、内面には朱が、また外面には煤が付着していた。13は器台の脚部である。2個所に透し穴がある。14はやや外方に開く口縁をもつ壺形土器である。ほぼ完形に近い。最大直径は胴部のやや上にあり、すばまり気味に底部へ移行する。



第12図 第706号土壤出土遺物実測図(1/4)



第13図 第706号土壤出土鶴羽口・碗形洋実測図(1/4)

調整は内外面とも刷毛目を残す。外面には煤が付着している。口径16cm、脚部最大径27cm、器高31.2cmである。15は櫛描きの波状文を施す壺形土器の破片である。16は硬砂岩製？の偏平な碟の破片である。作業台として使用されたものか。

4・6・8・11～13・15は遺構検出時の上面の遺物で、他は遺構中より出土したものである。14と16が遺構の中程の深さから出土したのに対し、1・7・9・10などは上位から出土している。

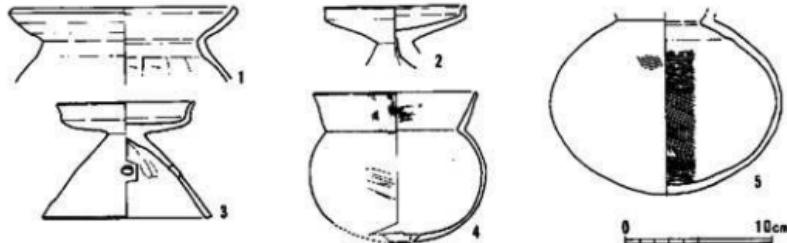
第13図に示したのは碗形甕と輪羽口の溶着したものである。羽口の裏面は溶けた鉄で覆われ、口の両端で溶て熔着している。このため端部の形状はよく判らない。横断面図からも判るように羽口の底面は平坦で、輪切りにした状態は4や5のように蒲鉾型になる。これは碗甕の端部との間に隙間があることから、板などを敷いた状態で使用された可能性もある。

碗形甕の大きさはまちまちであるが、7に示した資料は比較的大きく、長さ17cm、幅12cmほどである。おそらく炉の大きさは直径20cm前後で、深さも8cmに満たないものであったと考えられる。

羽口の破片は左側6点、右側8点、底破片1点などを含めると合計で35点ほど出土している。遺構の検出の際の破片も含めると20個体はあると考えられ、およそその炉体の数が推定できる。

6) その他の遺物〔第14図、図版21〕

1は第409号上塙から出土した土師器の壺形土器の破片である。2は第840号上塙から出土した器台の環部である。3と4は同じK-6区包含層5層から出土した土師器で、どちらもほぼ完成である。3は器台で、環部の径9.4cm、器高7.9cm、脚部径11.6cmである。円形の透かし穴を2個所にもつ。4は丹塗の小型丸底甕で、底部に直径1.6cmほどの焼成後の穿孔がある。器壁は薄く、丁寧なつくりである。口径11.2cm、器高10.2cmである。5は丸底の長頸壺の胴部である。口縁部をすべて欠く。内面には細かい刷毛目を残したままである。明橙色で、胎土は緻密である。H-8区包含層4層から出土した。



第14図 各遺構・包含層出土遺物実測図(1/4)

2 古代の遺構と遺物

検出遺構

掘立柱建物

707号掘立柱建物（第15図、図版8） 第V面、2~4-E~G区で検出した。梁間2間、桁行4間の東西棟の建物である。梁間の全長4.2m、桁行の全長7.2mを測る。柱穴は円形もしくは隅丸方形で、径80~110cm、深さ70~110cmを測る。方位はN-7°-Wにとる。柱穴掘り方からは、須恵器・土師器杯片が出土している。

739号掘立柱建物（第16図、図版8） 第V面、3~5-J~L区で検出した。梁間2間、桁行4間の東西棟、総柱の建物である。梁間の全長3.7m、桁行の全長4.2mを測る。柱穴は円形で、径80~100cm、深さ50~60cmを測る。方位はほぼ真北にとる。

井戸

700号井戸（第17図、図版8） 第V面、8~9-I~J区で検出した。掘り方は上面径4.5mの略円形を呈し、深さは2.1mを測る。南西側は攪乱を受けている。基底部中央に径60cm、深さ1mの円形の井戸枠が据えられていたが、腐朽が著しくそれが曲物かくり抜きによるものかは不明である。

出土遺物

707号掘立柱建物柱穴掘り方出土土器（第18図、図版23）

須恵器

杯蓋（1・3・8・9） 1の口縁部は断面三角形で内傾し、内面の体部との境は明瞭である。3は平坦な天井部で偏平な擬宝珠状のつまみがつく。8の天井部は低く水平で回転ヘラ削りされ、11縁部は断面三角形で外反する。9は断面三角形の口縁部が内傾する。

杯（2・4・5・7） 4・5・7は底部と体部の境に稜がつき、断面四角形の高台が底端部よりやや内側につく。4は高台の端部が外側に跳ね上がる。

土師器 杯蓋（6） 口縁部は断面三角形で、内外面ともヘラ磨きされる。

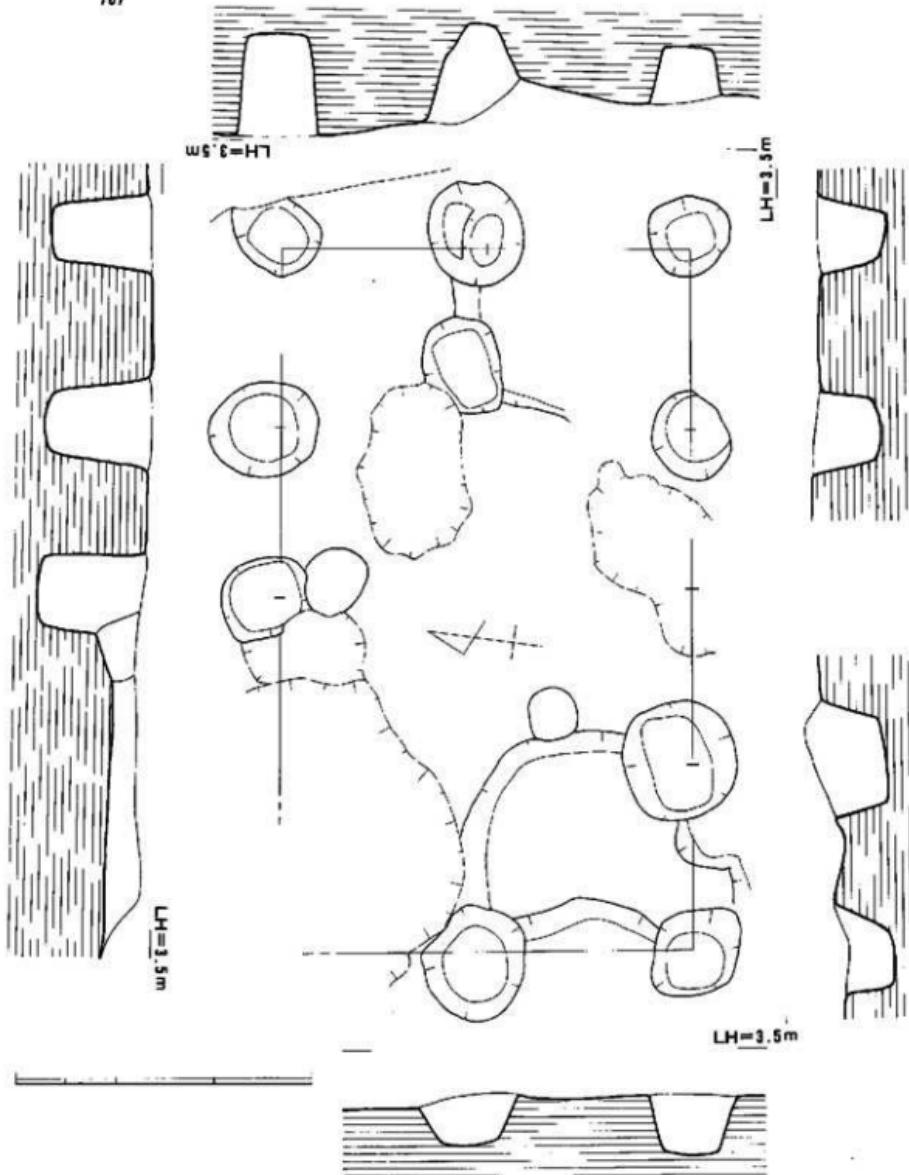
700号井戸出土土器（第18図、図版23）

土師器 杯（10・11） 10の体部は直立気味に開き内外面とも横ナデされる。11の体部は丸味を持ち、下位がヘラ削りされる他は、内外面ともヘラ磨きされる。

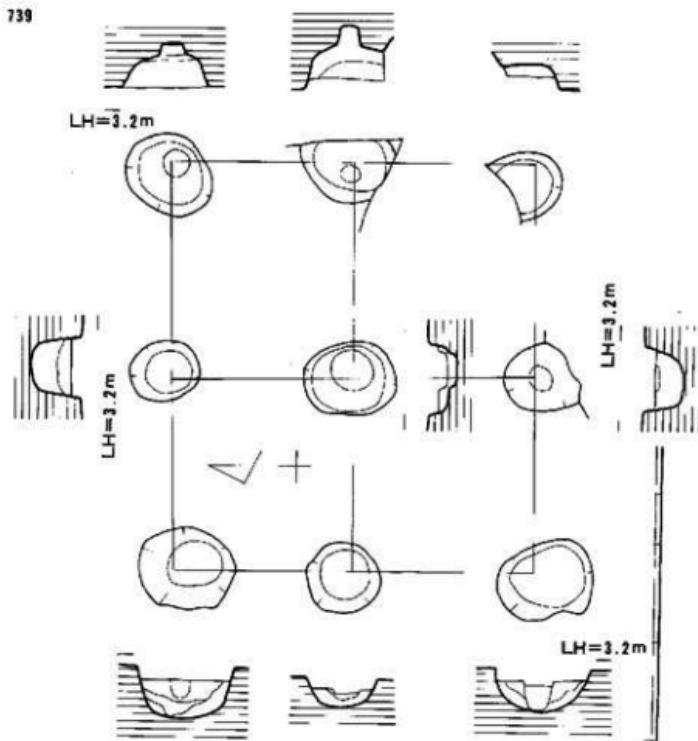
須恵器

杯（12~16） 直線的に開く体部の傾斜角度はそれほど大きくはない。12~15は底部と体部の境はやや下位にあり、稜がつく。断面四角形の高台が底端部よりやや内側につき、12は体部内面に「十」の墨書きをもつ。13~15は高台の端部が外側に跳ね上がる。無高台の16は外底部に「匁隅」の墨書きをもつ。

707



第15図 707号塔立柱建物実測図(1/60)



第16図 739号掘立柱建物実測図(1/60)

無頭蓋 (17) 天井部は平坦で、口縁部は直立気味に開き端部が外傾する。

包含層・その他の造構出土土器 (第19図) 古代の包含層、造構・包含層を掘り込んだ中世の造構から出土した古代の遺物について述べていく。

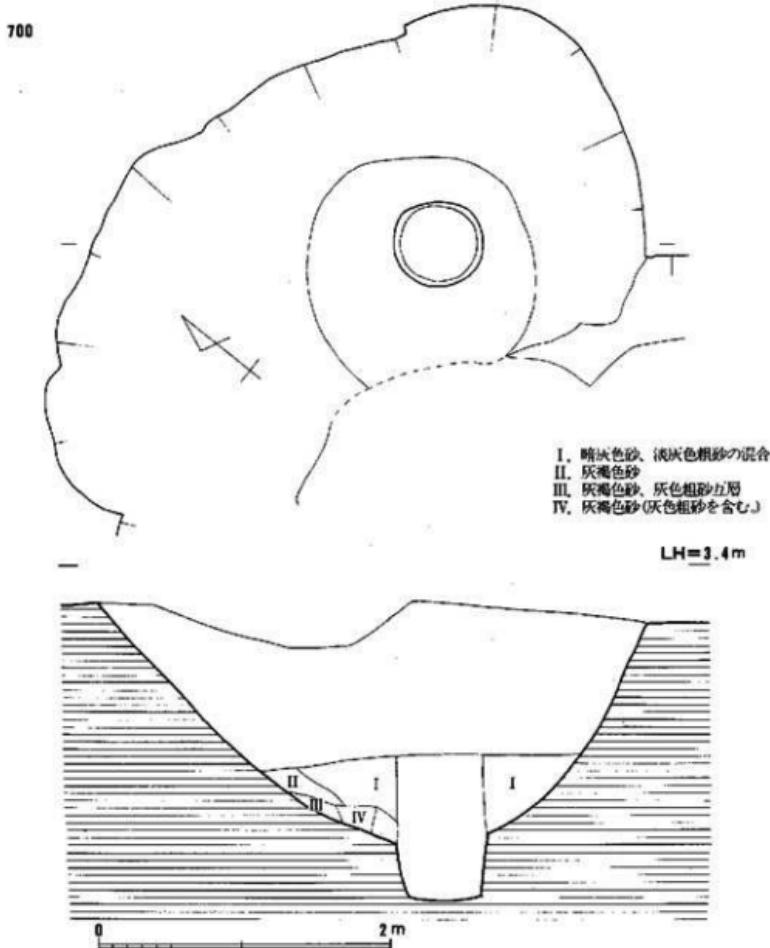
土師器 高台付皿 (1) 断面四角形の高台が外側に跳ね上がる。体部は丸味をもって外上方へのび、口縁部は外方へ屈曲する。磨滅が著しいが、体部は内外面ともヘラ磨きされたとみられる。

須恵器

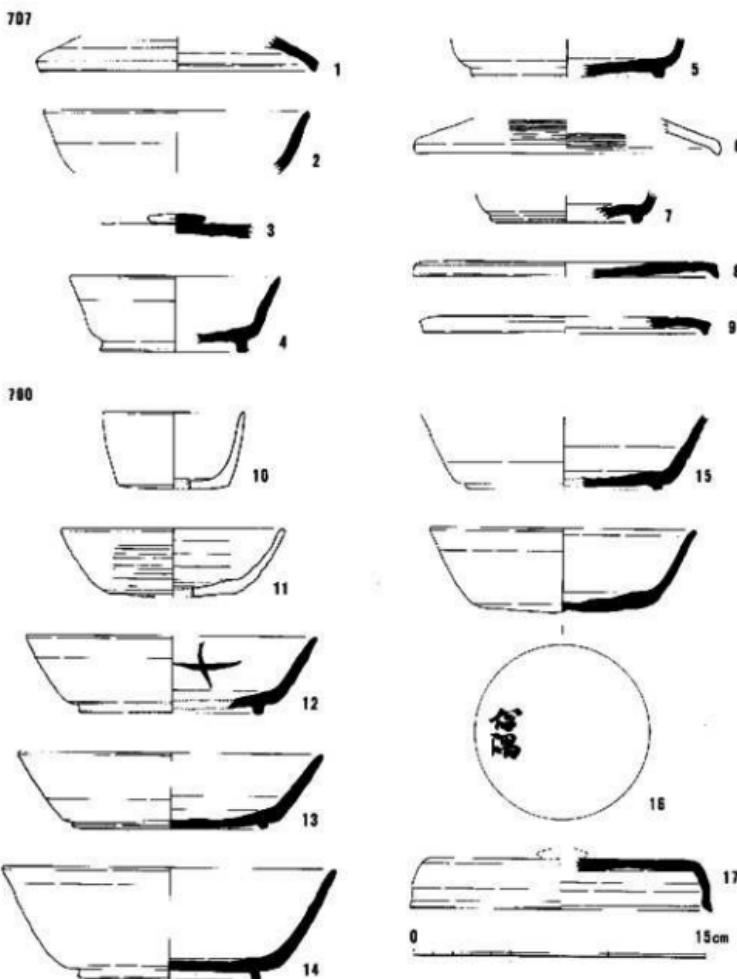
杯蓋 (2・4・8) 口縁端部は断面三角形を呈し、2・4は天井部に偏平な鉗状のつまみがつく。

杯（3・5・6・9） 3・5の底部と体部の境はやや下位にあり、稜がつく。断面四角形の高台が底端部よりやや内側につく。3の高台の端部は外側にはね上がる。6の高台の端部は外側に拡張されはね上がる。体部中位から屈曲し、口縁部はさらに開く。9は丸味を持つ体部中位から口縁部が直立してのびる。

皿（7） 底部は水平にヘラ切りされ、体部は外面とも横ナテ調査される。



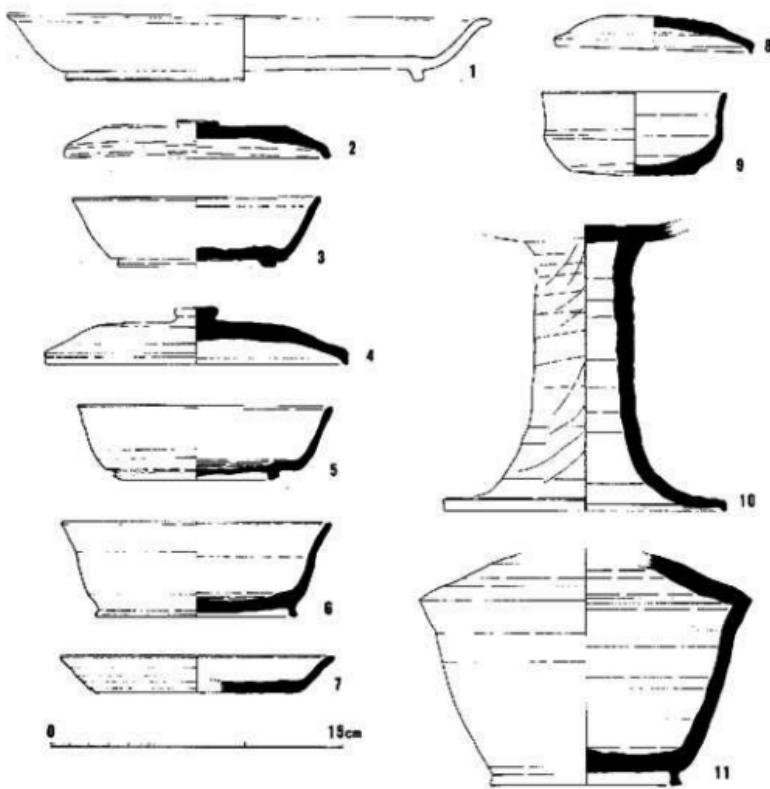
第17図 700号井戸実測図(1/40)



第18図 707号堆立柱建物・700号井戸出土遺物実測図(1/3)

高杯 (10) 杯部は欠失。長大な脚部で、断面三角形の端部が垂直に屈曲する。

長頸壺 (11) 頸部は欠失。肩部と胴部の境に鋭く稜がつく。断面四角形の高台の端部を外側に拡張する。



第19図 各遺構・包含層出土遺物実測図(1/3)

3 中世の遺構と遺物

検出遺構

溝

243号遺構（第20図、図版9） 第II面、F・G 1～5区で検出した幅が1m前後の集石遺構である。石の大きさは人頭大から5cm前後と様々で、角礫が多い。焼けた石がほとんどである。石の中に破碎された土器、瓦片が投げ込まれた状態で出土している。整然と並べられた様子ではなく、遺物の密度にも疎密がある。明確な掘り込みは認められず、下面で検出された003号溝より若干西に振れるが、溝の堆積の一帯である可能性もある。延長13m検出した。

003号溝（第20図、図版9） 第IV面、G・II区を南北に走り、F-11区で西に屈曲する溝である。上端幅1.3～2.0m、底面幅0.3～0.5mを測り、断面逆台形を呈する。方位はN-15°～Wにとる。延長33m検出した。深さは0.7～1.5m、北端底面の標高が2.3m、南端底面の標高は2.5mを測り、その間の距離からすれば、傾斜はないに等しい。今回の調査区域の北側に隣接する第25次調査検出のS D01溝の延長に相当する。第25次調査S D01溝は南北7m検出され、底面の標高は2.5mを測る。第25次調査検出分に今回の調査検出分、両調査区間の距離7mを加える総延長47mに達し、底面の標高はほぼ一定している。溝の埋土の基本層序は上層一暗褐色土と下層一茶褐色砂と茶褐色土の互層の2層に分けられる。

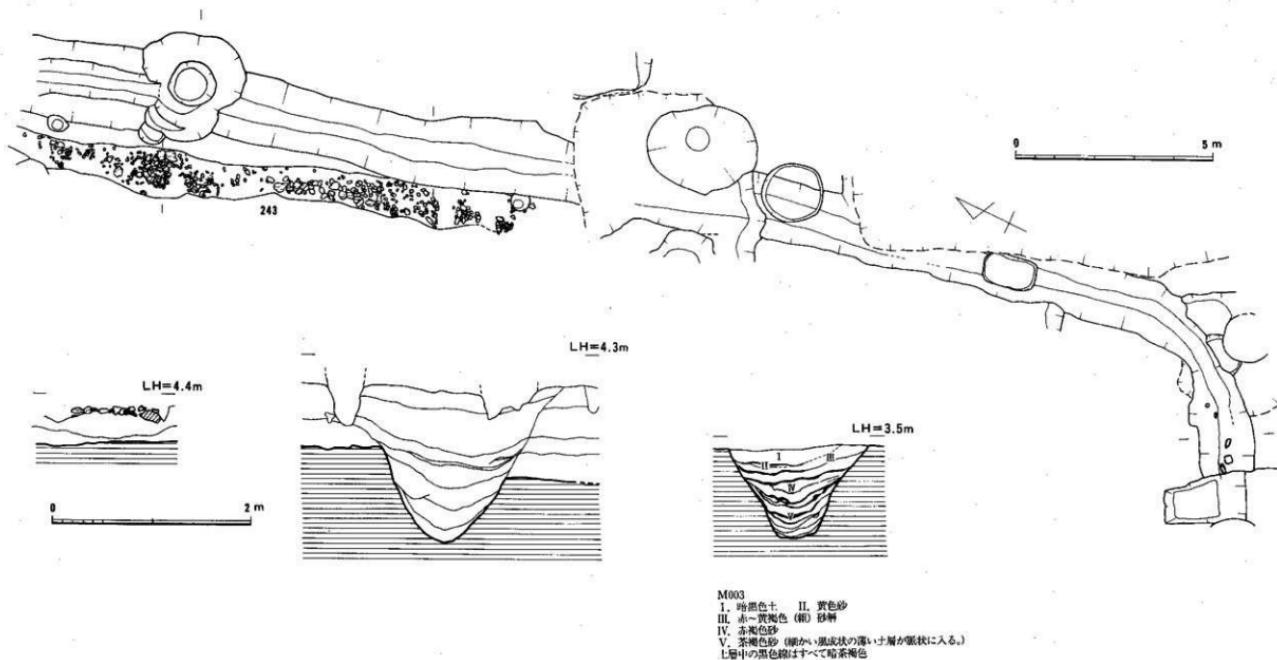
井戸

004号井戸（第21図、図版10） 第I面、C-7・8区で検出した。掘り方は上面径2.2mの隅丸方形を呈し、深さは1.7mを測る。掘り方の南側にある基底部には礫が散かれ、径60cm、深さ1.1mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しかった。006号井戸に切られる。

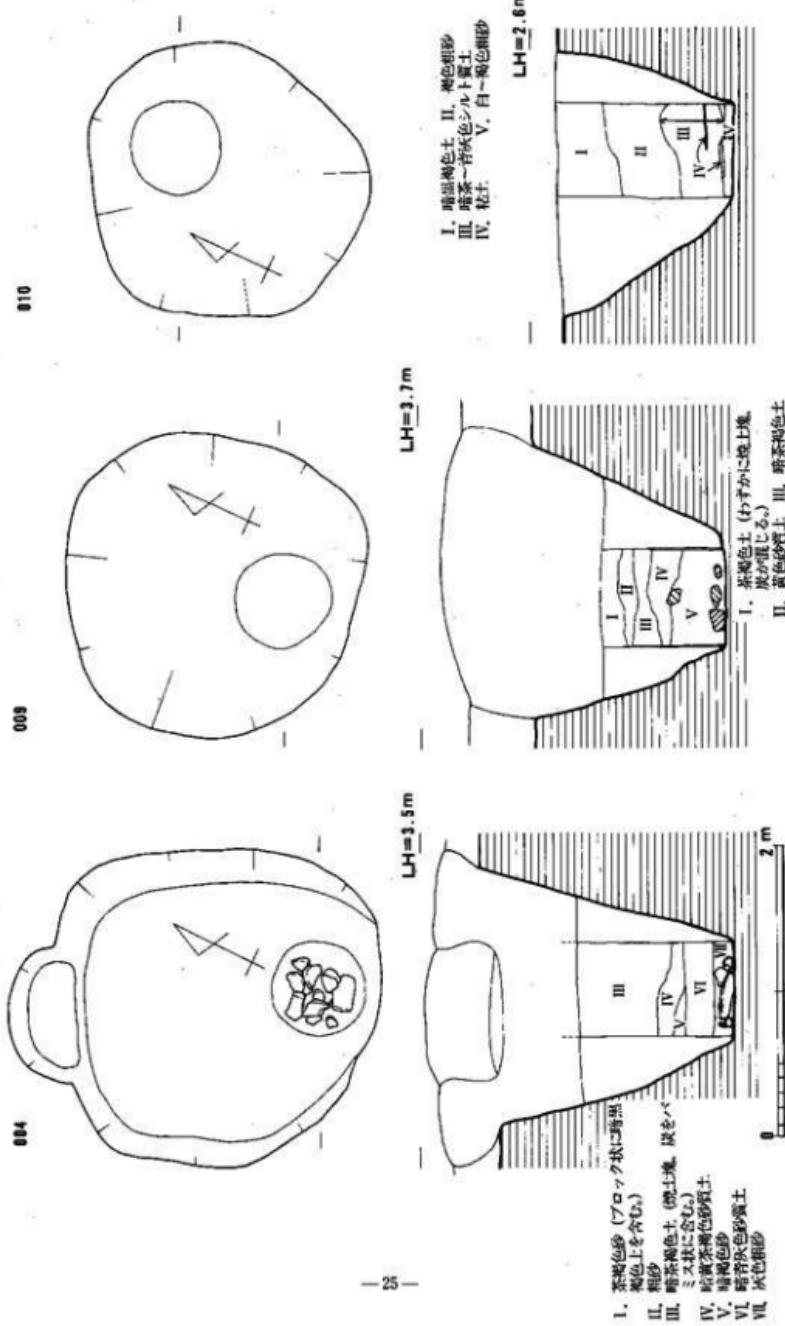
006号井戸（第22図、図版10） 第I面、C-8区で検出した。掘り方は上面復元径2.0mの略円形を呈し、深さは1.4mを測る。基底部に径65cm、深さ0.3mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しかった。004・007号井戸を切る。

007号井戸（第22図、図版10） 第I面、C・D-8・9区で検出した。掘り方は上面復元径2.2mの略円形を呈し、深さは1.5mを測る。基底部に径40～45cm、深さ0.3mの円筒形の桶側が据えられていた。木口の幅8～6cm、厚さ1cm前後の板材を用いて桶側をつくる。腐朽が著しいためその周囲にたがを検出することはできなかった。今回の調査で検出したすべての桶側についても同様である。006号井戸に切られ、008号井戸を切る。

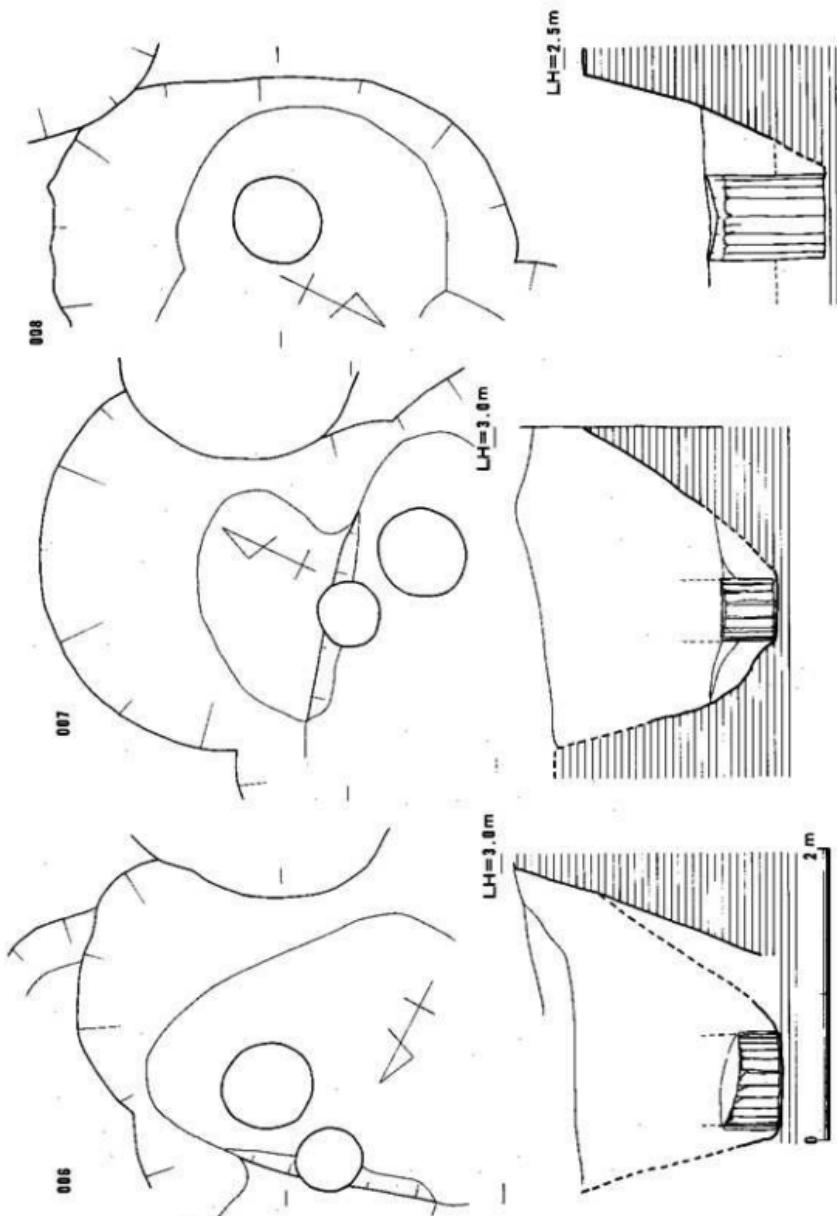
008号井戸（第22図、図版10） 第I面、D-8区で検出した。掘り方は上面復元径3.0mの略円形を呈し、深さは1.7mを測る。基底部に径55～60cm、深さ0.7mの円筒形の桶側が据えられていた。木口の幅12.5cm、厚さ1cm前後の板材を用いて桶側をつくり、端部は直のままである。007・009号井戸に切られる。切り合い関係にある006・007号井戸より基底部の高さは低い。



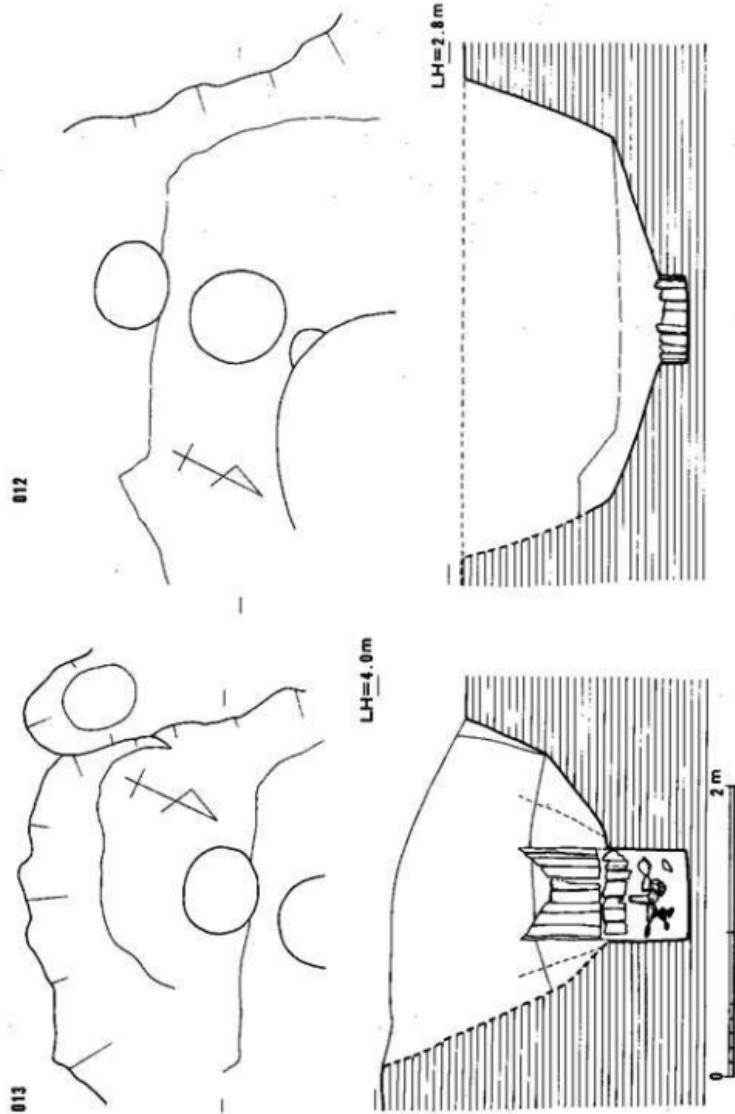
第20図 003号測定断面図・土層断面図(1/40)



第22図 006・007・008号井戸実測図(1/40)



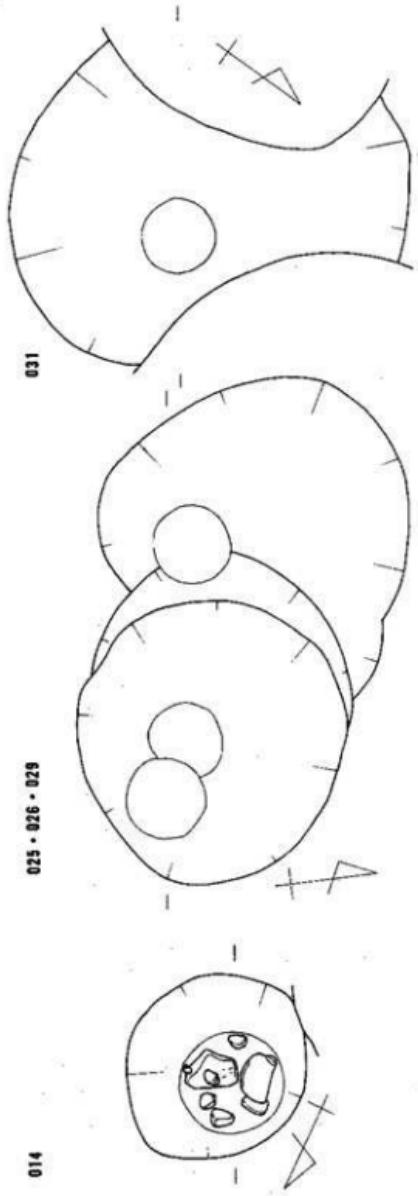
第23图 012·013号井声测图(1/40)



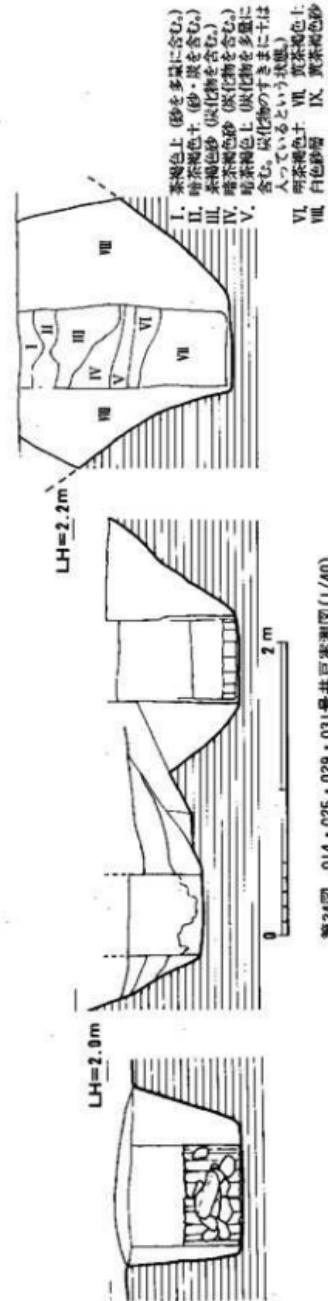
014

025・026・029

031



— 28 —



第24図 014・025・029・031号井戸実測図(1/40)

掘撃は008号井戸→007号井戸→006号井戸の順になる。

009号井戸 (第21図、図版10・11) 第I面、D・E-7・8区で検出した。掘り方は上面径1.8mの略円形を呈し、深さは1.8mを測る。掘り方の南側にある基底部に、径0.7cm、深さ1.7mの円筒形の井戸枠が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。008号井戸を切る。

010号井戸 (第21図、図版11) 第I面、E-8・9区で検出した。掘り方は上面径1.8mの略円形を呈し、深さは1.2mを測る。掘り方の北側にある基底部に、径0.6cm、深さ1.2mの円筒形の井戸枠が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。

012号井戸 (第23図、図版11) 第I面、E-7区で検出した。掘り方はそのほとんどが搅乱を受けており、平面形、直徑とも不明である。検出面からの深さ1.5mを測る。基底部に径55~60cm、深さ0.2mの円筒形の桶側が据えられていた。木口の幅8cm、厚さ2cm前後の板材を用いて桶側をつくり、板材内側の下端4cmを削り矢板状にしている。013号井戸を切る。

013号井戸 (第23図、図版11) 第I面、D-7区で検出した。掘り方南半分弱が残存する。検出面からの深さ2.0mを測る。基底部に径50~60cm、深さ1.0mの円筒形の桶側が二段据えられていた。桶側は炭化しており、詳細は不明。基底部には厚さ約10cmの炭化物が堆積していた。012号井戸に切られる。

014号井戸 (第24図、図版11・12) 第I面、E-6区で検出した。掘り方は上面径1.2mの略円形を呈し、深さは0.8mを測る。基底部に、径70cm、深さ0.4mの円筒形の桶側が据えられていた。桶側の上端は腐朽が著しく詳細は不明だが、外側の下端5~6cmを削り矢板状にしている。

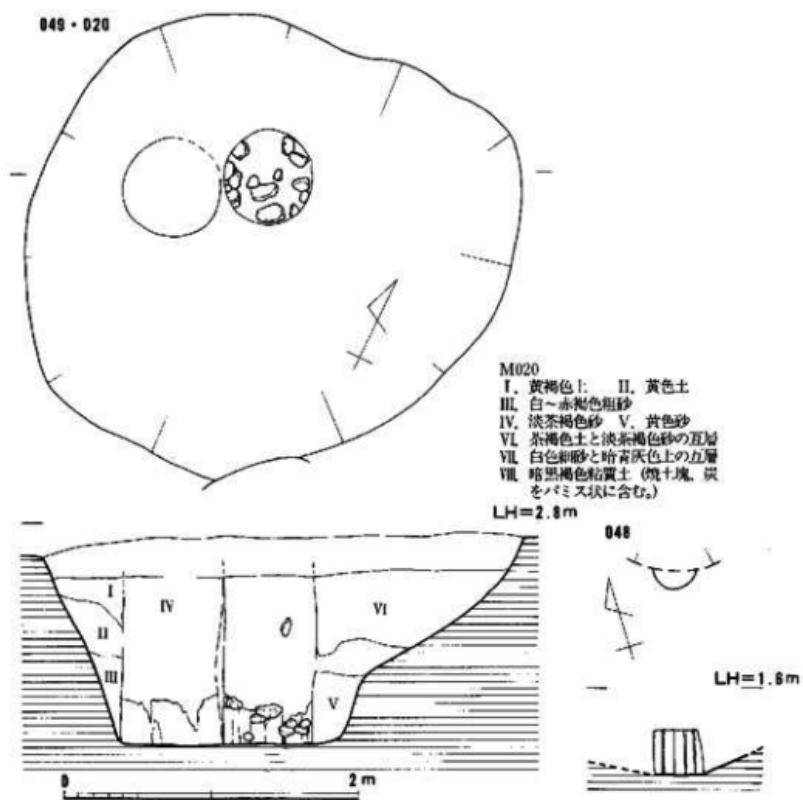
基底部から約15cm上面に厚さ約30cmの礫層がみられ、故意に入れられた可能性がある。

020号井戸 (第25図、図版12) 第I面、C・D-4・5区で検出した。掘り方は上面径3.3mの略円形を呈し、深さは1.4mを測る。基底部に、径60cm、深さ0.3mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。026号井戸を切る。掘り方を掘り下げる際にさらに桶側(049号井戸)を検出したが、切り合い関係は不明。同時に併存した可能性がある。基底部には礫が投げ込まれていた。

025号井戸 (第24図、図版12・13) 第I面、E-5区で検出した。掘り方は上面径1.9mの略円形を呈し、深さは0.5mを測る。基底部に、径55cm、深さ0.5mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。026号井戸を切る。

026号井戸 (第24図、図版12) 第I面、E-4・5区で検出した。掘り方は上面径1.7mの略円形を呈し、深さは0.5mを測る。基底部に、径50cm、深さ0.2mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまったく。025号井戸に切られ、029号井戸を切る。

029号井戸 (第24図、図版12・13) 第I面、D・E-4・5区で検出した。掘り方は上面径



第25図 020・048・049号井戸実測図(1/40)

1.9mの略円形を呈し、深さは0.9mを測る。基底部に、径60cm、深さ0.4mの円筒形の桶側が据えられていた。木口の幅10cm、厚さ1cm前後の板材を用いて桶側をつくり、その外側に厚さ1.5cmの桶側がめぐる。026号井戸に切られ、掘鑿は029号井戸→026号井戸→025号井戸の順になる。

031号井戸（第24図、図版12・13） 第I面、D-4・5区で検出した。掘り方は上面径2.7mの略円形を呈し、深さは1.4mを測る。基底部に、径50cm、深さ1.5mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。020・029号井戸に切られる。

037号井戸 (第26図、図版13・14) 第I面、D-10区で検出した。掘り方は上面径2.3mの略円形を呈し、深さは1.9mを測る。基底部に、径60cm、深さ1.7mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。基底部には礫が投げ込まれていた。

048号井戸 (第25図、図版11) 第I面、D-6区で検出した。掘り方はそのほとんどが攪乱を受けており、平面形、直徑とも不明である。円筒形の桶側の南半分弱のみの残存である。木口の幅13cm、厚さ1.5cm前後の板材を用いて桶側をつくる。013号井戸に切られる。

049号井戸 (第25図、図版12) 第I面、C-4・5区で020号井戸掘り下げ時に検出した。掘り方は上面径3.4mの略円形を呈し、深さは1.2mを測る。基底部に、径70cm、深さ1.4mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。

107号井戸 (第26図、図版14) 第I面、II-7・8区で検出した。掘り方は上面径2.7mの略円形を呈し、深さは2.2mを測る。基底部に、径80cm、深さ1.7mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。桶側内の堆上には炭化物を含む。

200号井戸 (第27図、図版14) 第II面、H-2・3区で検出した。掘り方は上面径2.6mの略円形を呈し、深さは1.7mを測る。基底部に、径85cm、深さ1.7mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。003号溝を切る。

301号井戸 (第27図、図版14・15) 第IV面、K・L-4区で検出した。掘り方は上面径2.8mの略円形を呈し、深さは1.0mを測る。基底部に、径90cm、深さ0.5mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。

400号井戸 (第28図、図版15) 第III面、I・J-6・7区で検出した。掘り方は上面径3.5mの略円形を呈し、深さは2.3mを測る。基底部に、径20cm、深さ60mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。桶側内の堆上には拳大の礫を多量に含む。

527号井戸 (第29図、図版15・16) 第III面、E・F-1・2区で検出した。掘り方は上面径1.8mの略円形を呈し、深さは1.4mを測る。基底部に、径60cm、深さ0.2mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。527・529号井戸を切る。

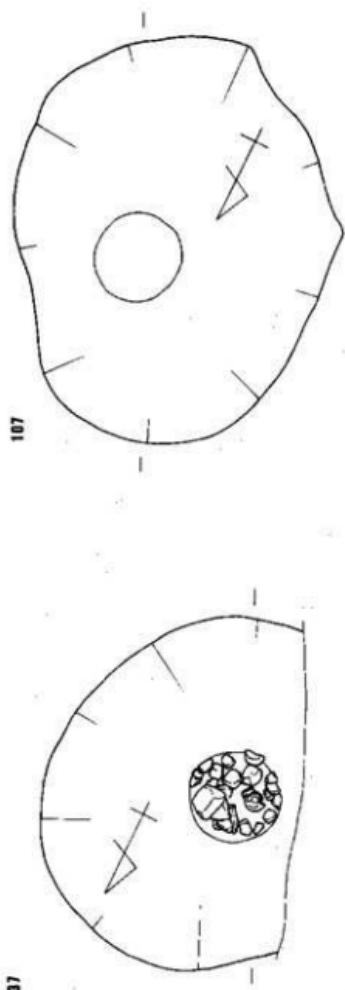
528号井戸 (第29図、図版15) 第III面、E-2区で検出した。掘り方は上面径3.3mの略円形を呈し、深さは2.4mを測る。基底部に、径50cm、深さ0.9mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまったく。527号井戸に切られ、529号井戸を切る。

529号井戸 (第30図、図版15) 第III面、E-2区で検出した。掘り方東半分弱が残存する。検出面からの深さ1.5mを測る。基底部に、径50~70cm、深さ1.1mの鞍頭円錐形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまったく。527・529号井戸に切られる。掘整は529号井戸→528号井戸→527号井戸の順になる。

532号井戸 (第30図、図版16) 第III面、F・G-4区で検出した。掘り方は上面径2.6mの

037

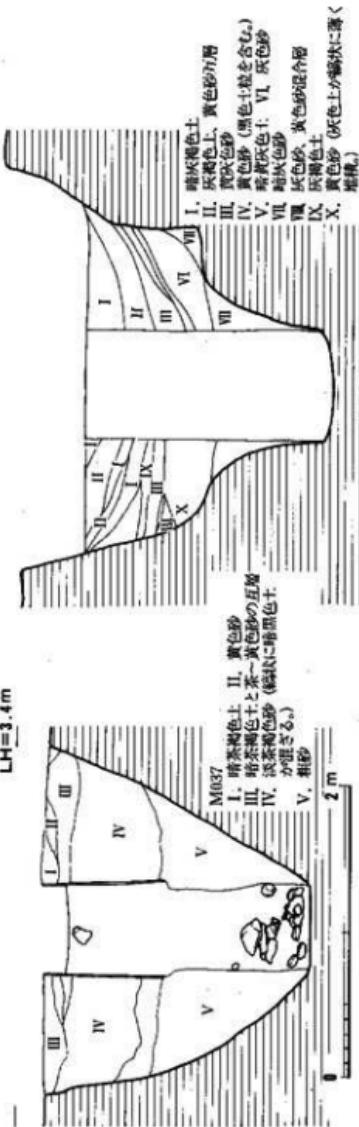
107



— 32 —

LH=3.3m

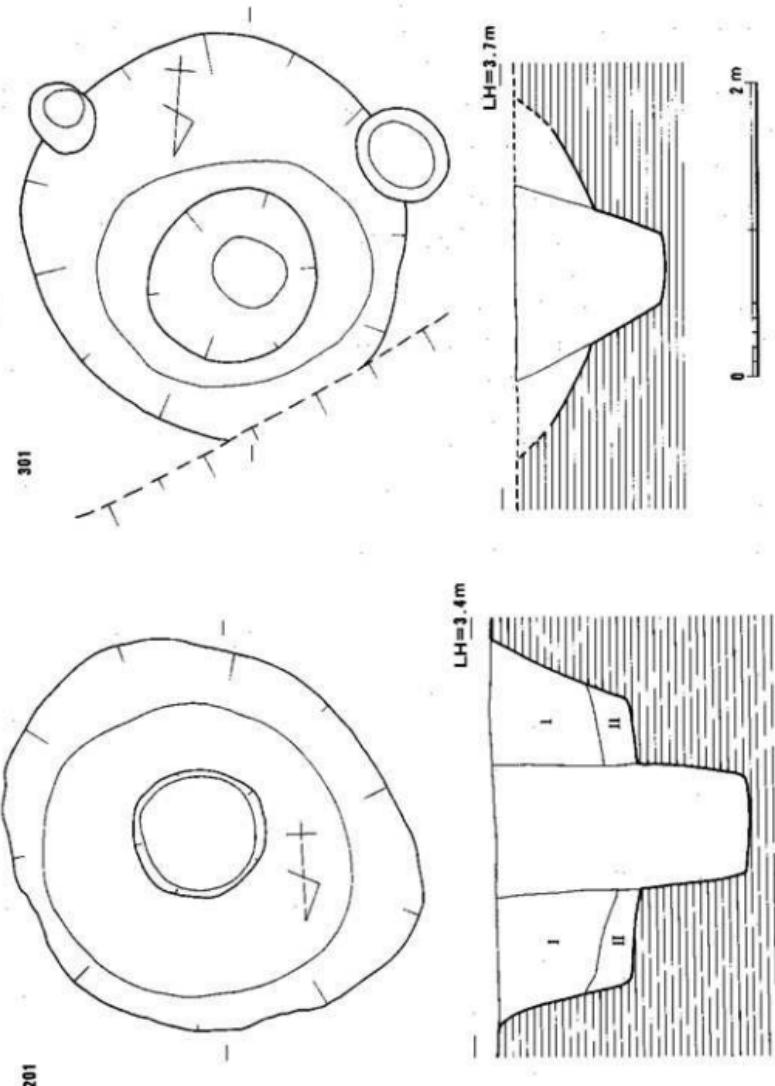
LH=3.4m



第26図 037・107号井実測図(1/40)

第21图 200·301号井声测图(1/40)

I. 灰色砂、灰绿色页岩
II. 黄色砂、暗灰色粘土互层



略円形を呈し、深さは2.0mを測る。基底部に、径76cm、深さ0.4mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。

595号井戸（第31図、図版16） 第III面、G-1・2区で検出した。掘り方は上面径2.8mの略円形を呈し、深さは2.0mを測る。基底部に、径70~80cm、深さ0.8mの戴頭円錐形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。桶側内の埋土には炭化物を含む。北西側は調査区外に延びる。

663号井戸（第31図、図版17） 第V面、H-9・10区で検出した。掘り方は上面径1.5mの略円形を呈し、深さは0.5mを測る。基底部に、径60cm、深さ0.4mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。

664号井戸（第31図、図版17） 第V面、H-9・10区で検出した。掘り方は上面径1.8mの略円形を呈し、深さは0.8mを測る。基底部に、径80cm、深さ0.6mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。

816号井戸（第32図） 第IV面、P-3・4区で検出した。掘り方は上面径4.7mの略円形を呈し、深さは1.5mを測る。基底部で井戸枠の痕跡の検出はみられなかった。

842号井戸（第32図、図版17） 第IV面、P・Q-3区で検出した。掘り方北半分弱が残存する。検出面からの深さ2.0mを測る。円筒形の桶側も北半分弱のみの残存である。

890号井戸（第33図） 第V面、M・N-2・3区で検出した。掘り方は上面径2.1mの略円形を呈し、深さは1.2mを測る。基底部に、径70cm、深さ0.3mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。

883号井戸（第33図） 第V面、L-3区で検出した。掘り方は上面径2.2mの略円形を呈し、深さは1.0mを測る。掘り方中央よりやや南側にある巷底部に、径65cm、深さ0.6mの円筒形の桶側が据えられていたが、腐朽が著しくその痕跡の検出にとどまった。

土壤

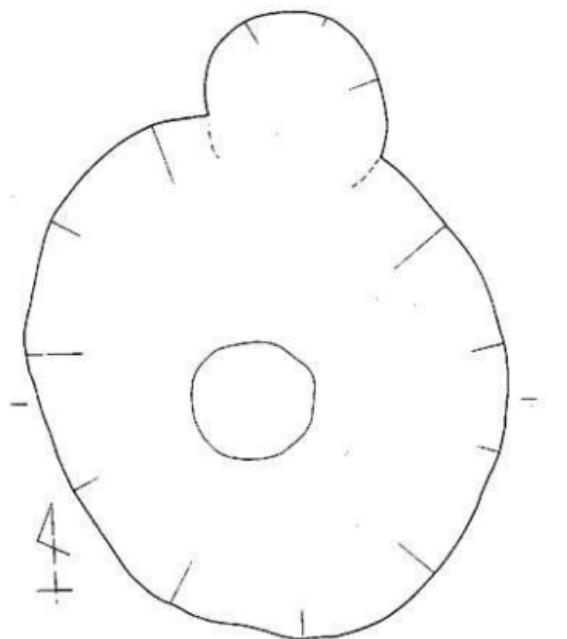
001号土壤（第34図、図版18） 第I面、B・C-10区で検出した。平面形は梢円形を呈する。全長1.8m、幅1.4m、深さ0.4mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。埋土には木炭を多量に含む。土器小皿・杯が多量に出上した。

017号土壤（第34図、図版18） 第I面、E・F-8区で検出した。平面形は不整梢円形を呈する。全長1.7m、幅1.2m、深さ0.6mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。018号土壤を切る

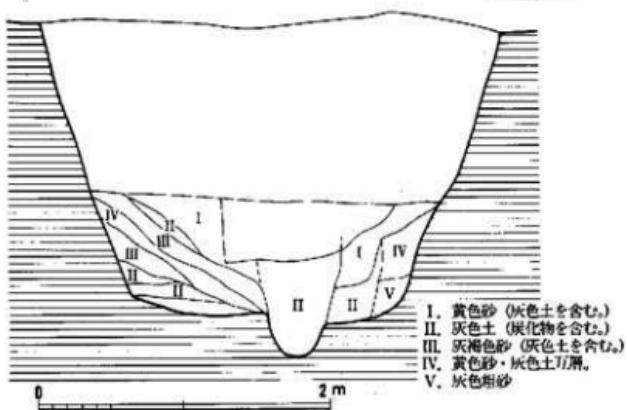
018号土壤（第34図、図版18） 第I面、E-8区で検出した。平面形は不整梢円形を呈する。全長1.6m、幅1.3m、深さ0.7mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。017号土壤に切られる

019号土壤（第34図、図版18） 第I面、F-7・8区で検出した。平面形は円形を呈する。直径1.5m、深さ0.2mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。埋土には焼土塊を部分的に含む。

400

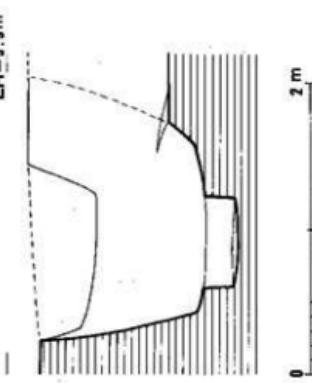


LH=3.8m



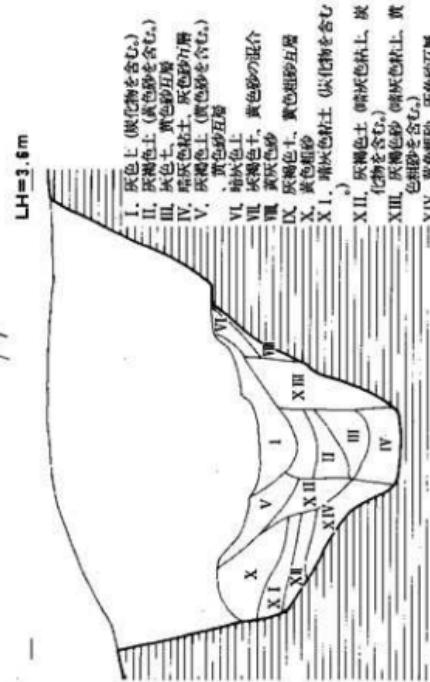
第28図 400号井戸実測図(1/40)

527



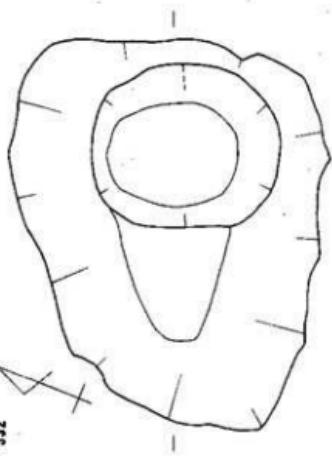
— 36 —

第29圖 527・528號井剖面圖(1/40)

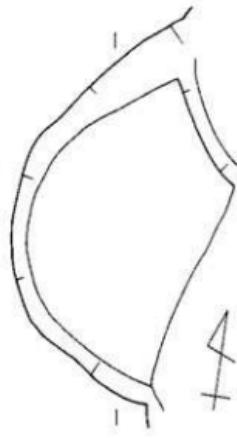


529

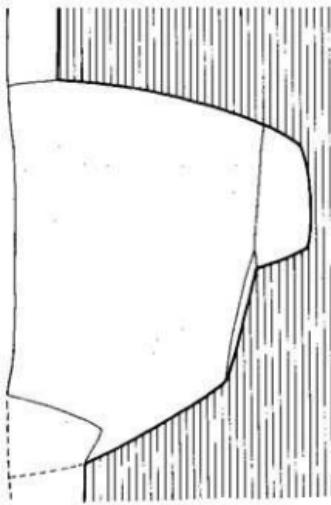
532



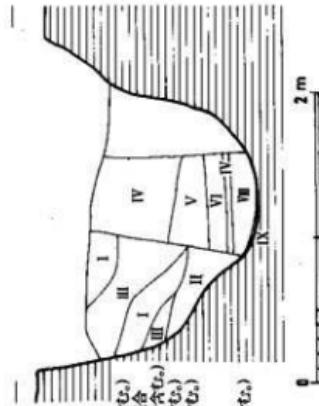
LH=3.0m



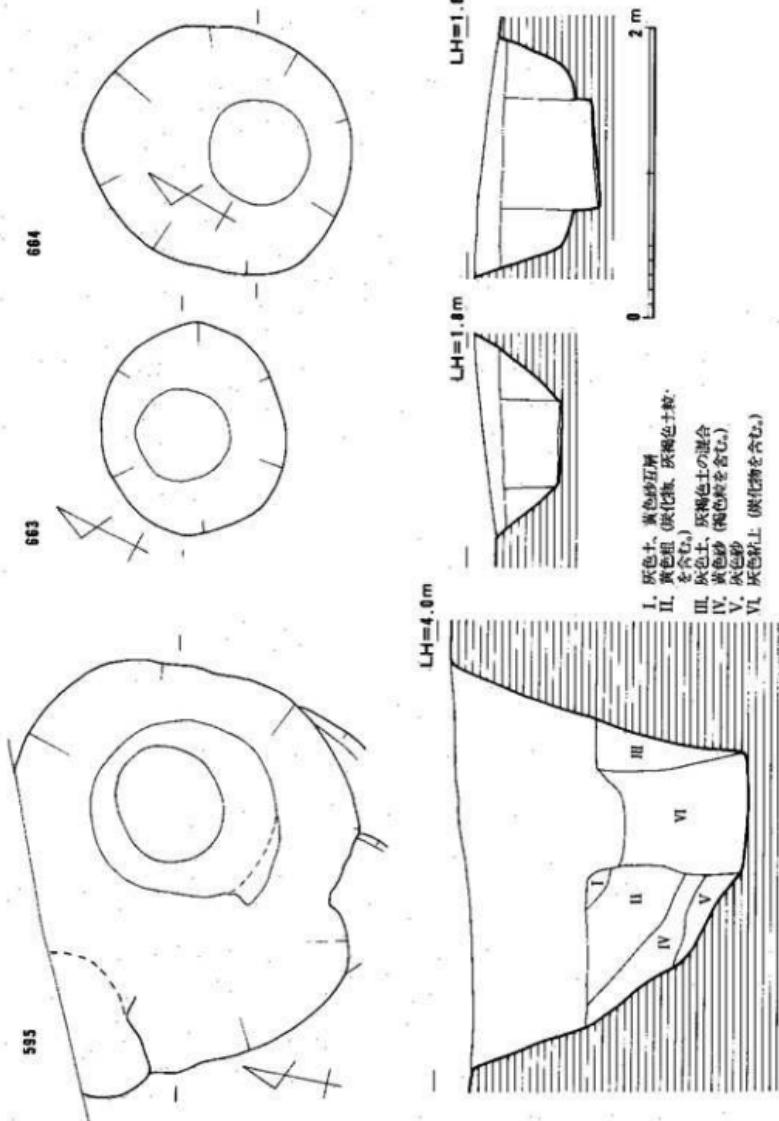
LH=3.4m



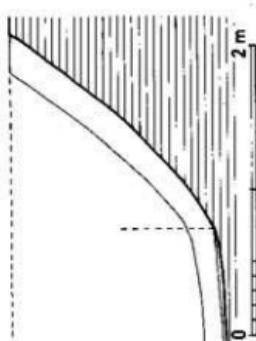
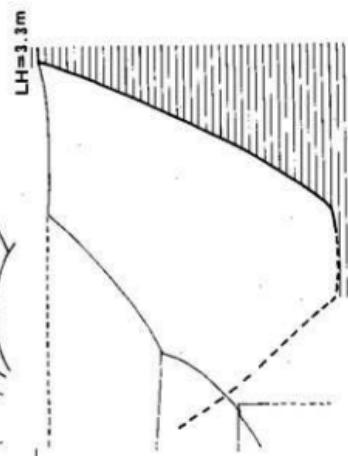
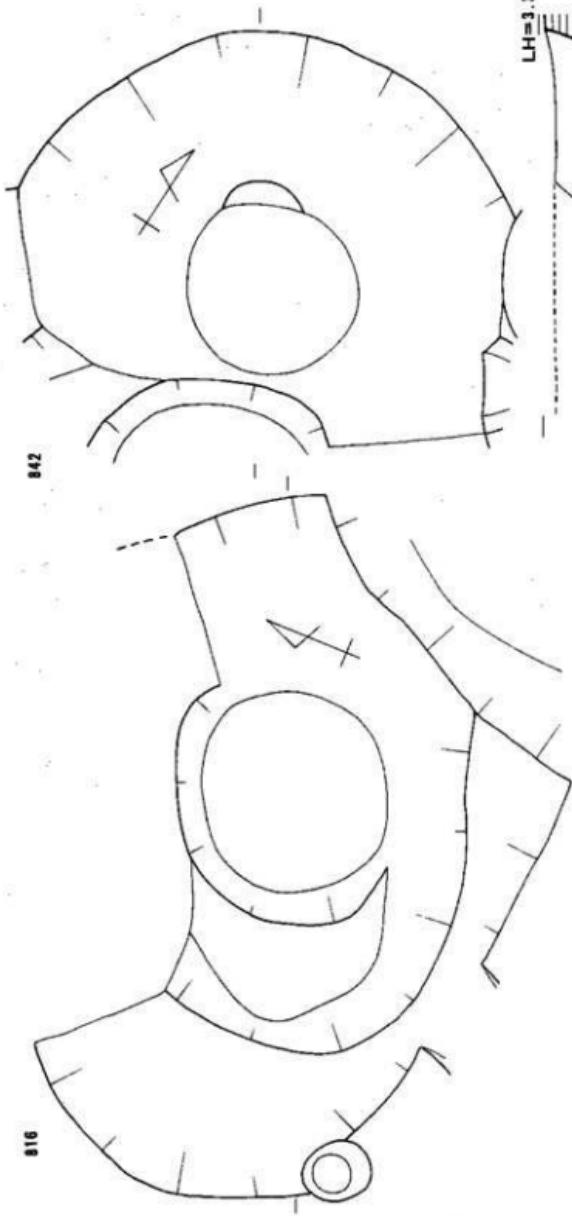
第30图 529·532号井剖面图(1/40)



- I. 黄褐色土 (含 t_1)
- II. 黄褐色土 + 黄色砂砾层
- III. 黄褐色土 (含 t_2)
- IV. 褐灰色土 (含 t_3)
- V. 褐灰色土 (含 t_4)
- VI. 黄色砂砾层
- VII. 褐灰色土 + (含 t_5)
- VIII. 黄色砂砾层
- IX. 哈灰土粘土

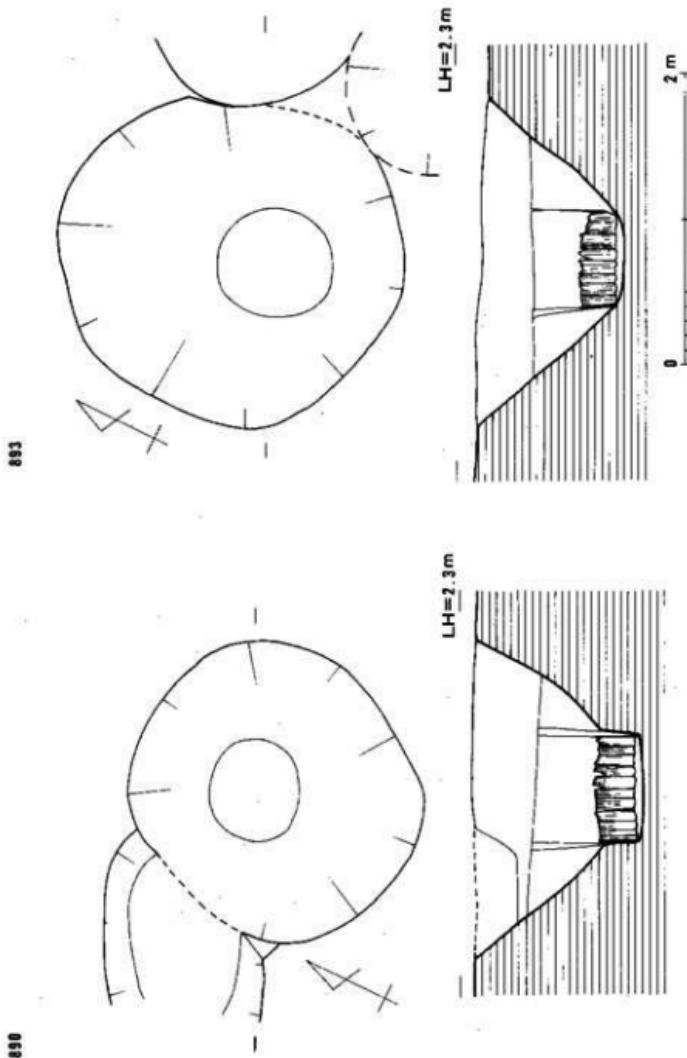


第31図 595・663・664号井戸実測図(1/40)



第32図 816・842号井戸実測図(1/40)

第331図 890・893号井戸実測図(1/40)



032号土壤 (第34図、図版18) 第I面、C-12区で検出した。平面形は楕円形を呈する。全長1.6m、幅1.4m、深さ0.6mを測る。壁は斜めに立ち上がる。南東側は調査区外にかかる。

033号土壤 (第34図、図版19) 第II面、C-10区で検出した。南北側が調査区外に延び、平面形は不整円形を呈する。直径1.9m、深さ0.9mを測る。壁は斜めに立ち上がる。

101号土壤 (第35図) 第I面、K-7・8区で検出した。平面形は不整椭円形を呈する。全长2.0m、幅1.9m、深さ1.2mを測る。壁は直に立ち上がる。

104号土壤 (第35図) 第I面、H・G-5・6区で検出した。平面形は不整椭円形を呈する。全长3.0m、幅2.3m、深さ0.2mを測る。壁は直に立ち上がる。

300号土壤 (第36図) 第III面、M-4・5区で検出した。平面形は不整円形を呈する。直径1.9m、深さ1.5mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。4層に厚さ約15cmの炭化物が堆積する。

034号土壤 (第36図、図版19) 第II面、D-10区で検出した。平面形は不整椭円形を呈する。全长0.9m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

123号土壤 (第36図) 第I面、K-5区で検出した。平面形は不整椭円形を呈する。全长0.8m、幅0.7m、深さ0.7mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。柱穴の可能性がある。

844号土壤 (第36図) 第III面、N-3区で検出した。北半分が複雑を受けている。平面形は不整円形を呈する。直径1.9m、深さ1.0mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。

479号土壤 (第36図) 第III面、G-II区で検出した。平面形は不整円形を呈する。直径1.2m、深さ0.8mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。596号土壤を切る。

595号土壤 (第36図) 第IV面、G-1区で検出した。平面形は不整円形を呈する。直径1.4m、深さ0.7mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。479号土壤に切られる。

845号土壤 (第36図) 第III面、N-3区で検出した。平面形は不整椭円形を呈し、その西側が失われている。全长1.4m、幅1.0m、深さ0.9mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。

386号土壤 (第37図) 第III面、J-8区で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、その南北側が失われている。全长1.2m、幅0.8m、深さ0.7mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。柱穴の可能性がある。

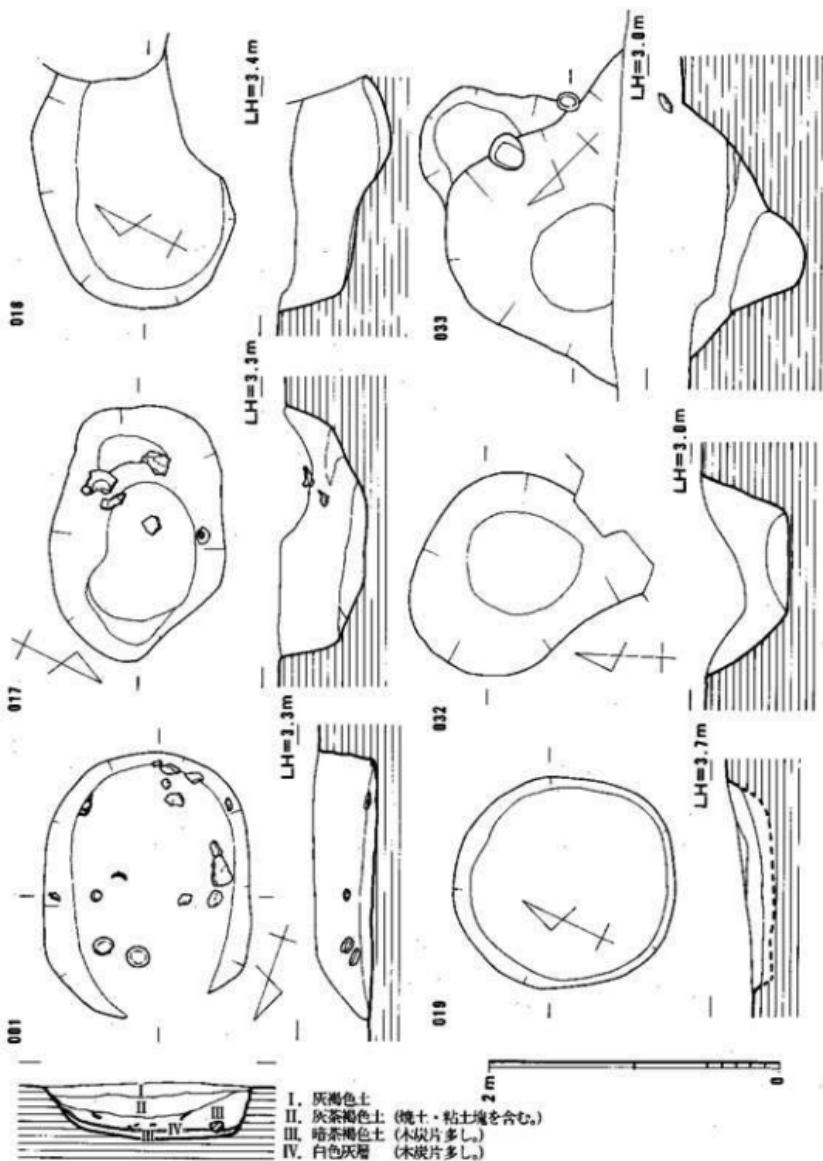
399号土壤 (第37図) 第III面、K-8区で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。全长1.3m、幅1.1m、深さ0.9mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。柱穴の可能性がある。

478号土壤 (第37図) 第III面、G-2区で検出した。平面形は楕円形を呈する。全长1.5m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。柱穴の可能性がある。

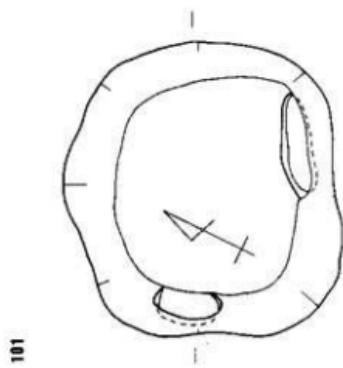
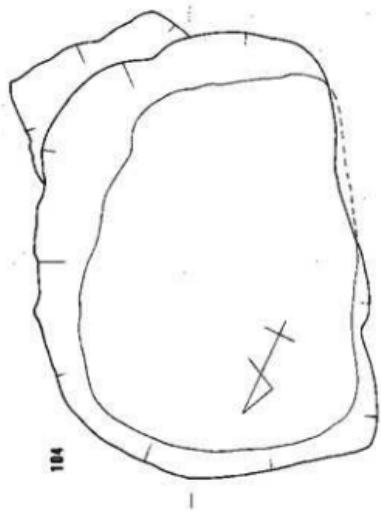
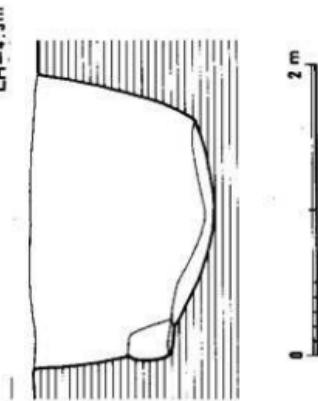
578号土壤 (第37図) 第IV面、G-1区で検出した。平面形は楕円形を呈し、その北端と南端が切られる。残存長1.1m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。

590号土壤 (第37図) 第III面、H-1区で検出した。平面形は不整長方形を呈し、その北側が調査区外に延びる。全长1.7m、幅1.1m、深さ0.15mを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

第34図 001・018・019・032・033号井戸測定図(1/40)



第35図 101・104号土壤実測図(1/40)



483号土壤 (第37図) 第III面、G-3区で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。全長1.0m、幅1.0m、深さ0.7mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。柱穴の可能性がある。

551号土壤 (第37図) 第III面、F-2区で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、その西側が528号井戸に切られている。全長1.1m、幅0.8m、深さ0.7mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。柱穴の可能性がある。

818号土壤 (第37図) 第III面、PQ-4区で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、東側が調査区外に延び、平面形は不整円形を呈する。直径1.9m、深さ1.3mを測る。壁は斜めに立ち上がる。

244号土壤 (第38図、図版19) 第II面、E・F-1・2区で検出した。その北端と南端が切れ溝状を呈するが、平面形は本来長楕円形を呈していたと考えられる。埋土は暗茶褐色土を基本とし、部分的に炭化物、灰層がレンズ状なして堆積していた。残存長2.8m、幅1.4m、深さ0.5mを測る。土師器小皿・杯が多量に出土した。他に元豊通寶が出土した。

597号土壤 (第38図、図版20) 第IV面、G-3区で検出した。平面形は不整長方形を呈する。全長1.7m、幅1.0m、深さ0.5mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。

810号土壤 (第38図、図版20) 第II面、0-5区で検出した。平面形は楕円形を呈し、その東南側が搅乱を受ける。残存長0.9m、幅1.0m、深さ0.2mを測り、壁は緩やかに立ち上がる。その中に北宋錢2枚と土師器小皿30数枚がほとんどすき間もなく埋納されていた。

木棺墓

478号木棺墓 (第39図、図版20) 第III面、F-1・2区で検出した。平面形は楕円形を呈し、その東側が597号土壤と重複する。東側重複部分で掘り込みを検出することができなかったが、597号土壤埋土上面で鉄釘が西側と同様にめぐった状態で検出されたことから、597号土壤の埋土上から墓壙が掘り込まれていたことが判明した。鉄釘は底面より40cm浮いた状態で出土した。

土壙墓

486号土壤墓 (第39図、図版20) 第III面、G-3・4区で検出した。平面形は不整方形を呈し、その南側土壙に切られる。残存長2.9m、幅1.7m、深さ0.5mを測り、頭部を欠失した右側臥屈葬の入骨が検出された。

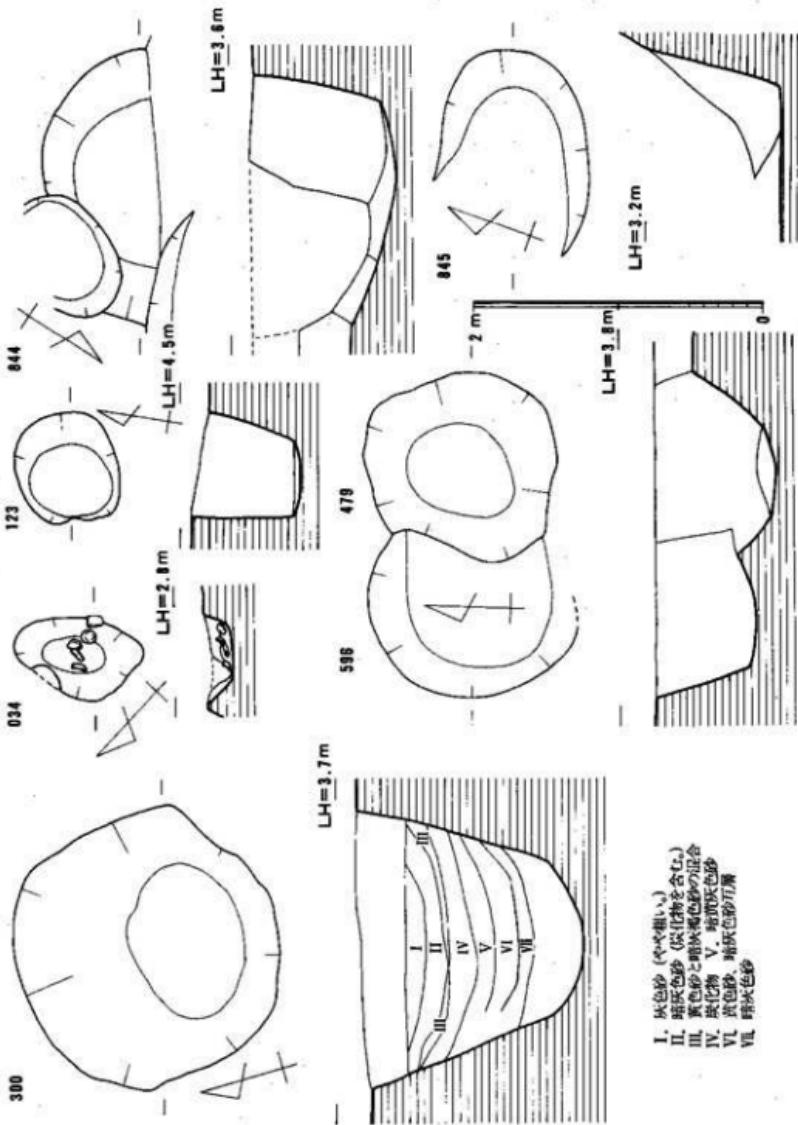
出土遺物

003号溝出土遺物 (第40図、図版23)

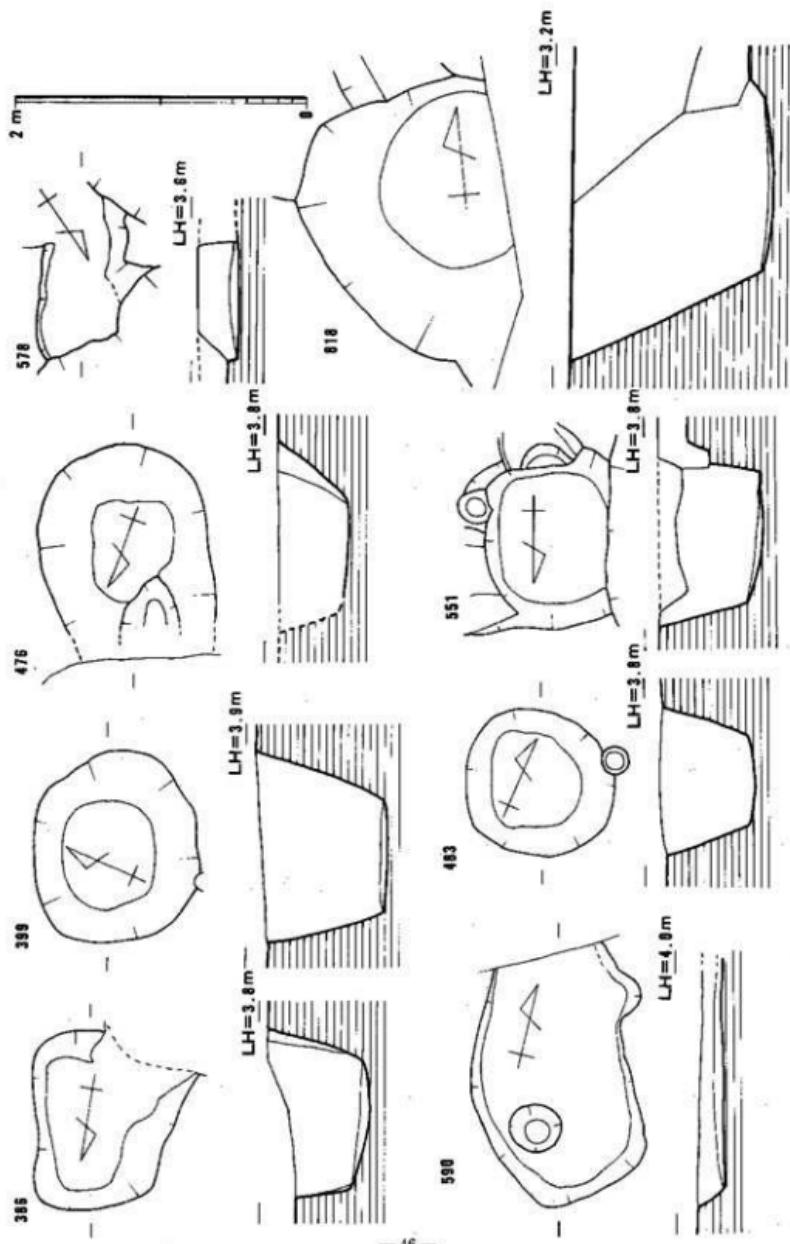
土師器 小皿 (1) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.5cm、器高1.2cm、底径7.5cmを測る。

白磁

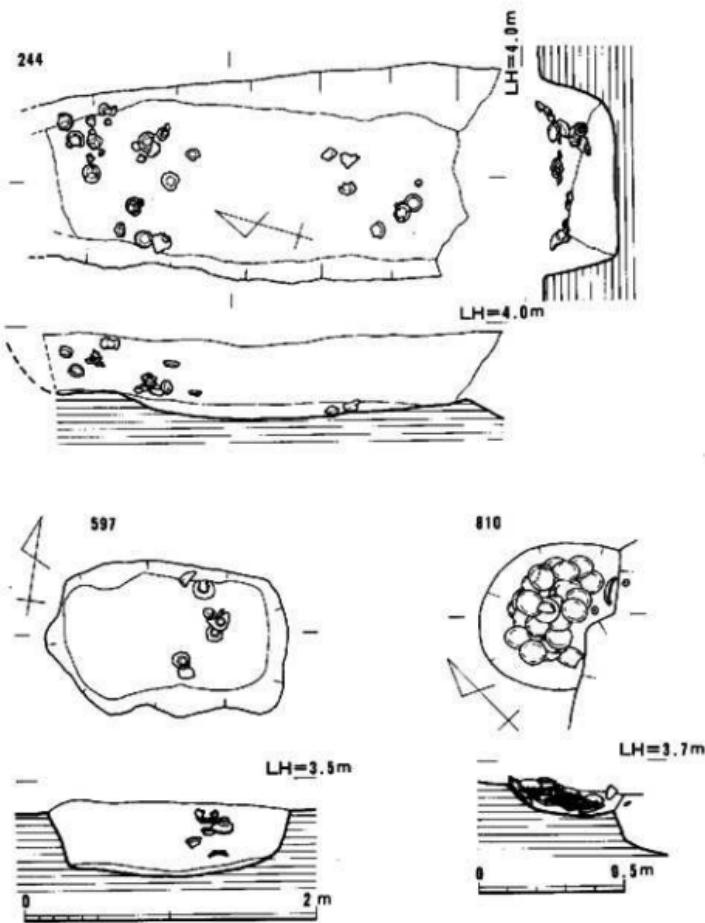
椀 (2・3) 2は内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部が外へ屈曲する。高台は細



第36図 034・844・030・596・479・845・300号土壤実測図(1/40)



第37圖 386・399・476・578・590・483・551・818號土壤實測圖(1/40)

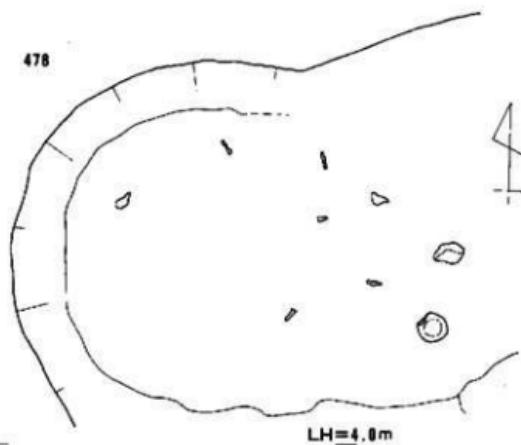


第38図 244・597・810号土壤実測図(1/40・1/20)

く、低い。断面逆台形を呈し、外側は垂直に近い。口縁部を輪花にし、内面の口縁部下に沈線、体部と見込みの境に段をもつ。体部内面にヘラおよび櫛状工具で花卉文を施す。灰色を帯びた透明の軸が高台までかかり、胎上には黒色微粒子を含み灰白色を呈する。3は2と同様の特徴をもつ底部片で、外底に墨書きが記されているが判読不能である。

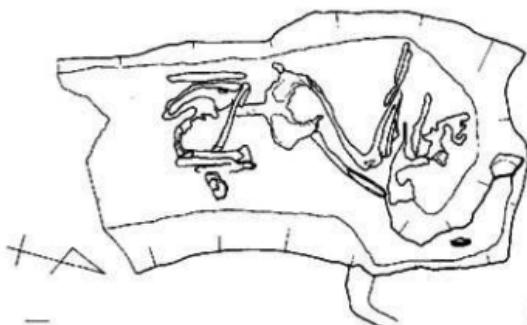
皿(4~6) 底部がやや上げ底状の平底の皿である。4の体部は直線的に外上方にのび、

478



LH=4.8m

486



LH=3.7m

第39図 478号木棺墓・486号土塙墓実測図(1/20)

口縁端部が斜めに切られる。5・6は平坦な見込みから口縁部が直線的に屈曲する。5は内底見込みに花卉文を施す。

黒釉陶器 梶(7) 内面に金彩で文字文が施されている体部のみの細片である。「寿山福海」

銘の内の「海」と記されている。

陶器

皿（8） 体部は直線的に外上方にのび、口縁部はやや肥厚する。胎土には細かい砂粒を多量に含み、赤褐色を呈する。不透明な緑色の釉が、底部付近までかけられている。

長頸壺（9） 口縁部、胴部下半を欠失。頸部は長くのび、胴部との境に凹線、肩部には弧を組み合わせた波状の凹線を施す。胴部中位に幅1.5cm前後の縱方向の削りを入れる。胎土には砂粒を多量に含み、青灰色を呈する。透明な濃緑色の釉がかけられている。

243号造構出土遺物（第40図、図版23）

土師器 小皿（10） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.2cm、器高1.6cm、底径6.8cmを測る。

白磁 皿（11） やや丸味をもった体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。

同安窯系青磁 皿（12） 体部中位で屈曲し、口縁部が外反する平底の皿である。

龍泉窯系青磁 皿（13・14） 体部中位で屈曲し、口縁部が直線的に外上方へのびる。内底見込みに柳状工具で文様を施す。13は14より小型のものである。

青白磁 合子蓋（15） 天井部に花文を型押ししている。胎上は緻密で白色、青白色の釉が外面にかけられている。

009号井戸出土遺物（第42図）

土師器 杯（1） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径15.6cm、器高3.0cm、底径11.6cmを測る。

020号井戸出土遺物（第42図）

土師器 杯（2） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径11.2cm、器高2.6cm、底径7.2cmを測る。

青白磁 合子（3） 側面に蓮華座を型押ししてつくる合子の身である。

029号井戸出土遺物（第42図、図版23）

土師器 小皿（4） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.3cm、器高1.5cm、底径6.9cmを測る。

白磁

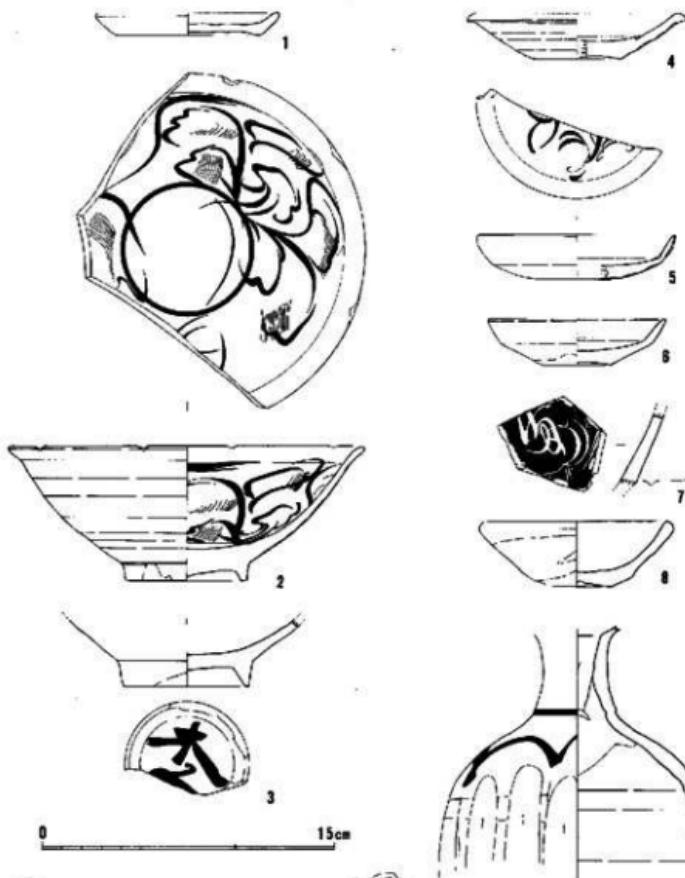
碗（5） 体部外面にヘラで条線を施し、内底見込みに輪状のかき取り、目跡がみられる。

皿（6～8） 体部中位で屈曲し、口縁部はやや丸味をもって外上方へのびる。6・7は内底見込みにヘラおよび柳状工具で、8はヘラで文様を施す。

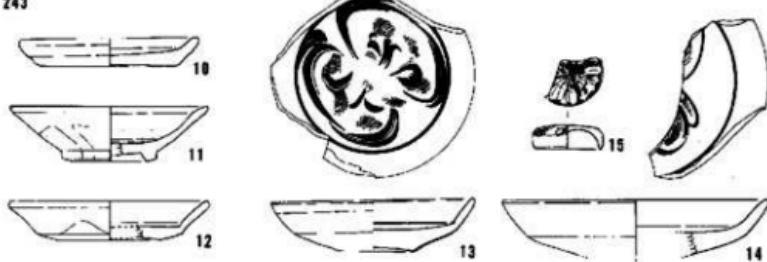
031号井戸出土遺物（第41図、図版23）

土師器 杯（1・2） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には

003

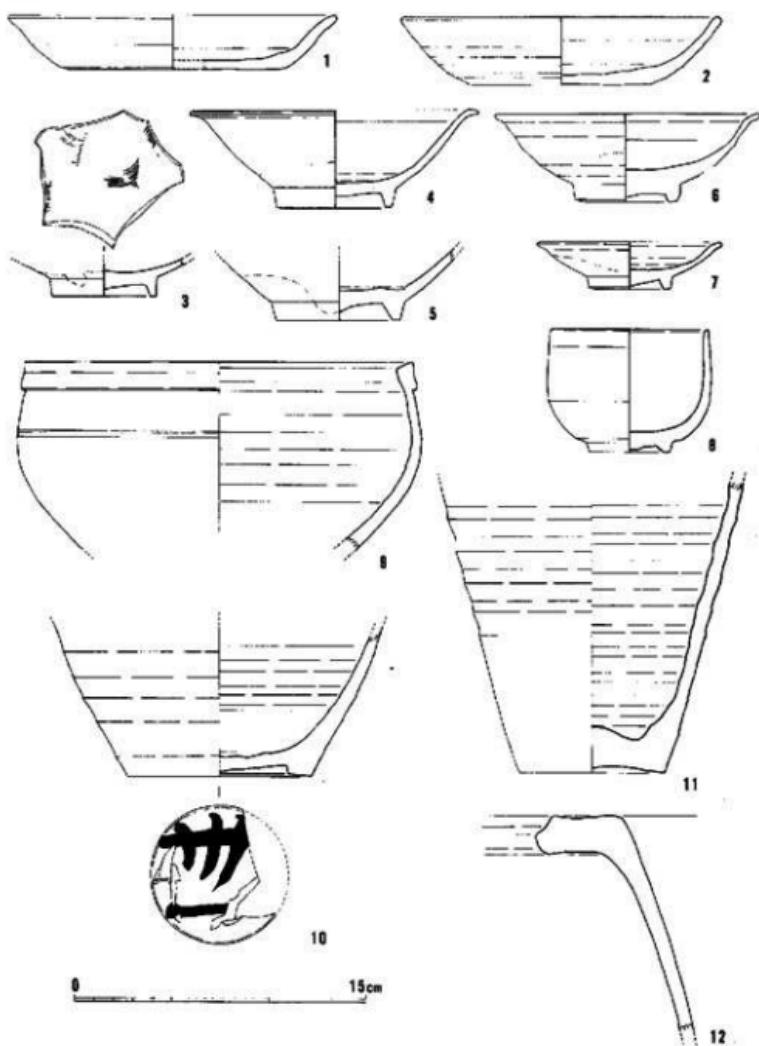


243



第40図 溝出土遺物実測図(1/3)

631



第41図 井戸出土遺物実測図(1)(1/3)

板状压痕がみられる。口径16.8・16.4cm、器高2.8・3.5cm、底径11.2・9.0cmを測る。

白磁

椀(3～6) 3の高台は細く低く、内底見込みに梅描文が施されている。4・5は内底見込みの釉が輪状にかきとられ、高台は細く低い。4の口縁部は外反し端部は平坦をなす。6の高台は断面四角形を呈し、底部の器肉が厚い。体部は内湾気味に外上方にのび、口縁部は外へ屈曲する。

皿(7) やや丸味をもった体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかきとった高台付皿である。

青磁 梗(8) 口縁部は直立し、高台は外面を直に、内面を斜めに削り出す。緑色の釉が全面に施釉され、外底部に目跡がみられる。胎土には黒色微粒子を含み、淡灰褐色を呈する。

陶器

鉢(9) 口縁部を折り返し、瓦縁状にする。胎土には細かい砂粒を含み、灰色を呈する。

壺(10) 外底部の内側が削られ輪状をなし、外底に「卅一」の墨書きが記されている。焼成が甘いため内面に近い部分は灰色、外側は赤橙色を呈する。

長瓶(11) 胴部上半を欠失している。胎土には細かい砂粒を含み、灰色を呈する。

甕(12) 口縁部を内側に屈折した大甕片である。

037号井戸出土遺物(第42図)

白磁 梗(9) 細く低い高台をもち内底見込みに梅描文が施されている底部片の周囲を打ち欠き、瓦玉に転用している。外底に墨書きが記されているが判読不能である。

同安窯系青磁 皿(10) 体部中位で屈曲し口縁部が外反する平底の皿で、内底見込みにヘラおよび櫛状工具で文様を施す。

280号井戸出土遺物(第42図)

白磁 皿(11) やや丸味をもった体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。

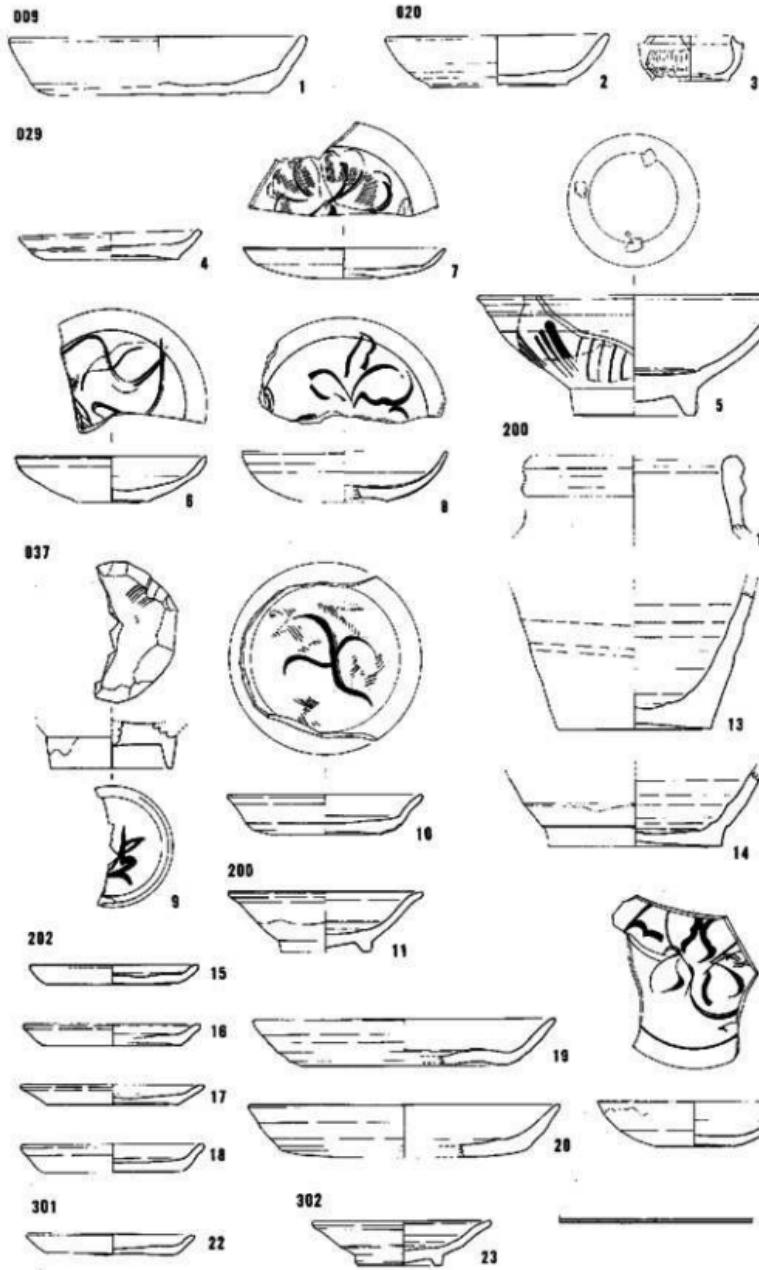
陶器(12・14) 胎土は赤褐色で、砂粒を含む。12はほぼ直立した壺の頸部片で、口縁下外面に断面半円形の突帯をめぐらす。13・14はやや上げ底の底部片で、14の内底は平坦である。低く厚い。2は体部中位で屈曲し、口縁部は直線的に外上方へのびる平底の皿で、内底見込みにヘラで文様を施す。

202号井戸出土遺物(第42図、図版23)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状压痕がみられる。

小皿(15～18) 口径8.6～9.4cm、器高1.0～1.5cm、底径5.6～7.0cmを測る。

杯(19・20) 口径15.5・16.0cm、器高2.4・2.7cm、底径10.2・10.5cmを測る。



第42図 井戸出土遺物実測図(2)(1/3)

白磁皿 (21) 体部中位で屈曲し、口縁部はやや丸味をもって外上方へのびる。内底見込みにヘラで文様を施す。胎土は灰白色を呈する。

301号井戸出土遺物 (第42図)

土師器 小皿 (22) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口縁外端部に凹線がめぐる。口径8.6cm、器高1.1cm、底径6.1cmを測る。

302号井戸出土遺物 (第42図)

白磁皿 (23) やや丸味をもった体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。

400号井戸出土遺物 (第43図、図版23)

白磁皿 (1・2) 1は口縁部を玉縁にする高台付の皿である。高台の削り出しが浅く、低く厚い。2は

陶器 長瓶 (3) 胸部上半を欠失し、底部は著しく上げ底である。

527号井戸出土遺物 (第43図、図版23)

土師器 杯 (5) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径12.6cm、器高2.7cm、底径8.7cmを測る。

陶器 鉢 (4) 薄手で小型のもので、口縁部を内面に折り返し、端部を水平にする。体部中位の接合部に突帯をめぐらす。胎土は淡赤褐色できめが細かく、釉は黒～茶褐色を呈する。

528号井戸出土遺物 (第43図、図版23)

東播系須恵器 片口鉢 (6) 体部は直線的に外上方にのび、口縁部は玉縁状に肥厚する。胎土には白色砂粒を多量にふくみ、灰色を呈する。

白磁皿 (7) 見込みから口縁部が直線的に屈曲する平底の皿である。内底見込みに花卉文を施す。

529号井戸出土遺物 (第43図、図版23)

白磁皿 (8) 体部は直線的に外上方にのび、端部が斜めに切られる平底の皿である。

同安窯系青磁皿 (9) 体部中位で屈曲し口縁部が外反する平底の皿で、内底見込みにヘラおよび櫛状工具で文様を施す。

532号井戸出土遺物 (第43図、図版23)

白磁

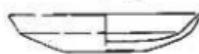
椀 (10) 内底見込みの釉が輪状にかきとられ、高台は細く低い。

皿 (11) 直線的に外上方にのびる体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。

龍泉窯系青磁椀 (13) 体部外面にヘラで条線、内面に花文を施す。

陶器 皿 (12) 体部は直線的に外上方にのび、口縁部はやや肥厚する。胎土には細かい砂

488

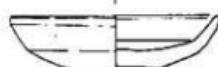
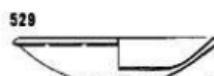


527



3

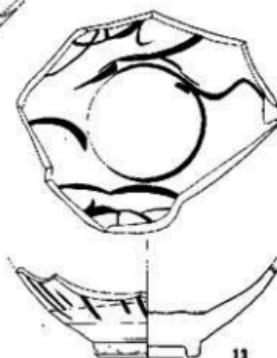
528



11



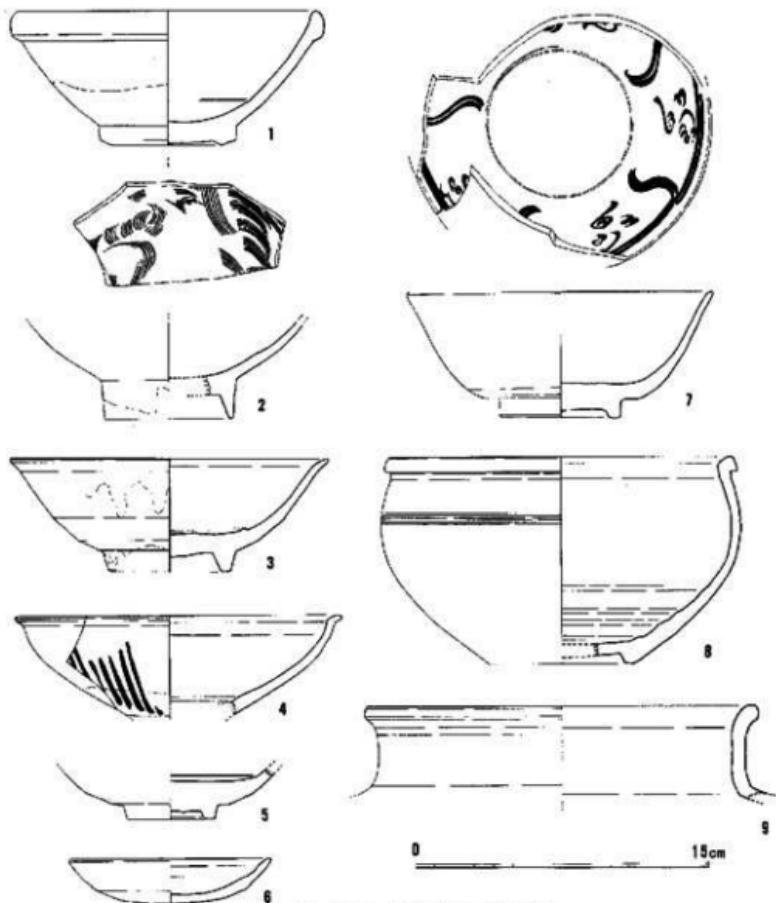
12



13

0 15cm

第43図 井戸出土遺物実測図(3) (1/3)



第44図 井戸出土遺物実測図(4)(1/3)

粒を多量に含み、赤褐色を呈する。不透明な緑色の釉が、底部付近までかけられている。

595号井戸出土遺物 (第44図、図版23)

瓦器 小皿 (6) 底部は丸底を呈し、体部との境は肥厚し僅かに屈曲する。調整は磨滅により詳細は不明。

白磁 梵 (1~3) 1は口縁部を玉縁にし、高台の削り出しが浅く、低く厚い。体部はやや丸味をもって外上方にのびる。2は高台が高く細く、外側が直に削り出され、内底見込みに梅描文が施されている底部片である。3はやや丸味をもった体部から口縁部が外反し、内底見込みの種を輪状にかき取る。

白磁 梵（4） 体部は直線的に口縁部は内湾気味に外上方にのび、口縁端部は外に屈曲する。

龍泉窯系青磁 梵（5・7） 5は内底見込みに比べ、高台の径が小さい。7は体部内面にヘラによる片彫りの線を入れ、5分割し、その間に雲文を配している。

陶器

鉢（8） 口縁部は折り返玉縁状にし、外底部の内面は削られ幕筈底をなす。

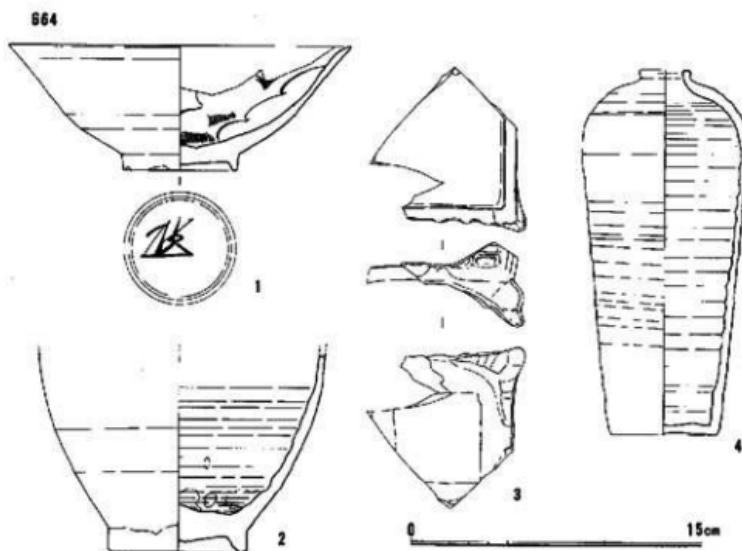
壺（9） 脊部以下は欠失。頸部は直にのび、口縁部で僅かに外反し、端部は丸くおさめられている。

664号井戸出土遺物（第45図、図版24）

白 磁

梵（1） 内面に弧を組み合わせた波状文と柳描文を施す。内底見込みに小さな茶溜まりがみられる。灰色を帯びた透明の釉が高台までかかり、胎土には黒色微粒子を含み灰白色を呈する。

四耳壺（2） 高台の端部内側を面取りし、高台上まで施釉される。頸部中位より上が欠失している。



第45図 井戸出土遺物実測図(5)(1/3)

龍泉窯系青磁 (3) 香炉の底部片であろうか。わずかに残る体部側面に型押しによる文様が施されている。胎土は灰白色を呈し、薄い緑色の透明釉が外底部の方形の鉢脚部分を除いてかけられている。

褐釉陶器 小口瓶 (4) 口縁部を折り返し断面四角形とし、頸部は短い。胴部は直線的に平底の底部からやや開き気味にのび、肩部は丸い。器壁は薄く、胴部内面には粗いクロ目が残る。胎土には細かい砂粒を含み内部は灰色、表面は赤味をおびた灰色~茶色を呈する。

816号井戸出土遺物 (第46・48岡、岡版24)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿 (1~21) 口径8.4~9.8cm、器高1.0~1.5cm、底径5.0~8.1cmを測る。1の外底には「七」の墨書きが記されている。

杯 (22~33) 口径13.2~16.2cm、器高2.65~3.6cm、底径9.8~12.3cmを測る。26の底部には直径0.9mmの孔が穿たれている。

高台付杯 (34) 口径17.0cm、器高4.6cm、高台径7.8cmを測る。

瓦器 槌 (35) 12世紀前半でを中心として筑前地方に広くみられる在地産の瓦器椀に比べると、器壁が薄く、ヘラ磨きの幅は細い。内面は体部に横方向、見込みに不定方向のヘラ磨きが施され、外面にはほとんどヘラ磨きの痕跡はみられず、口縁下が横ナデ、体部に指頭圧痕がみられる。内面から外面は口縁部にかけて黒灰色、その他の灰色を呈する。

白磁

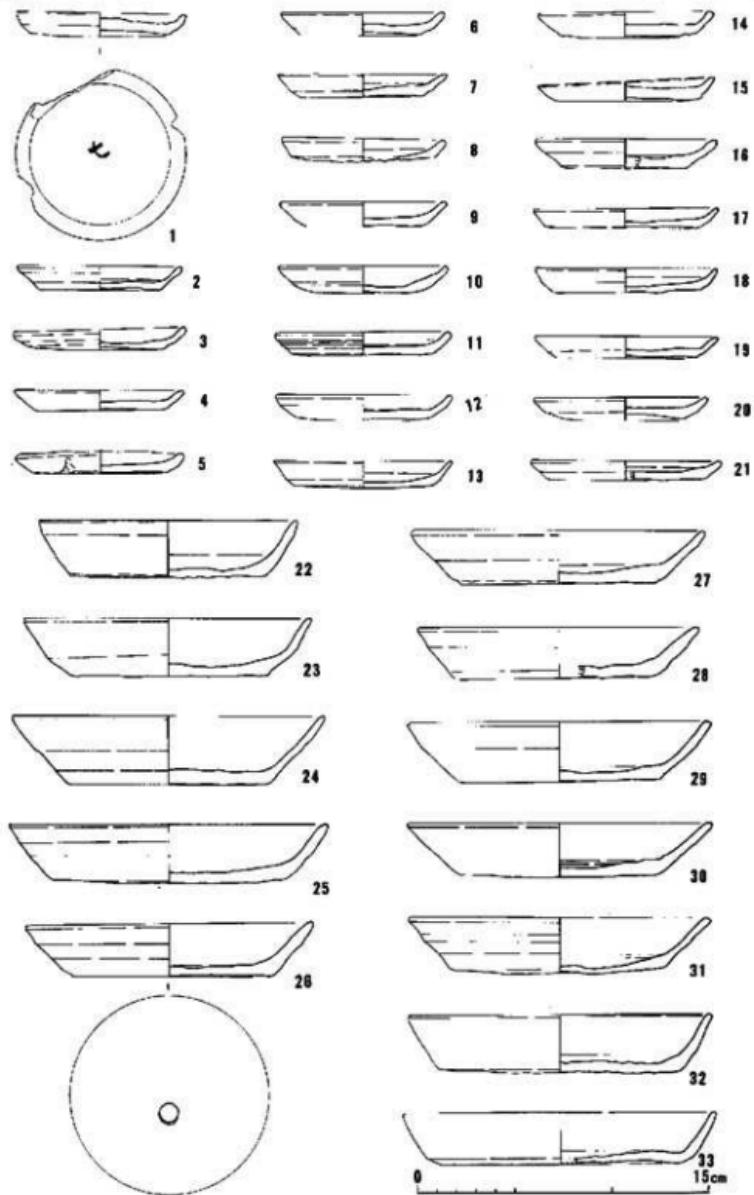
椀 (36~41) 36は口縁部を玉縁にし、高台の削り出しあは浅く、低く厚い。37の体部は直線的に外上方にのび外側の削りの単位は幅広で、内面の口縁部下に沈線をもつ。内底見込みの釉を輪状にかき取る。内底は平坦で、断面逆台形の高台がつく。38~41は口縁部を外反させ、端部を水平にする。38・40・41は内面の口縁部下に沈線、体部と見込みの境に段をもつ。高台は高く細く、外側が直に削り出される。40・41は内面に滑描文が施されている。39は内底見込みの釉を輪状にかき取り、断面逆台形の高台がつく。

皿 (42~48) 42~46は内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。体部はやや丸味をもって外上方にのび、42・43・45はわずかに口縁部が外反する。43は高台内から外面体部かけて「□□小」の墨書きが記されている。47・48は体部中位で屈曲し、口縁部はやや丸味をもって外上方へのびる。内底見込みにヘラで文様を施す。

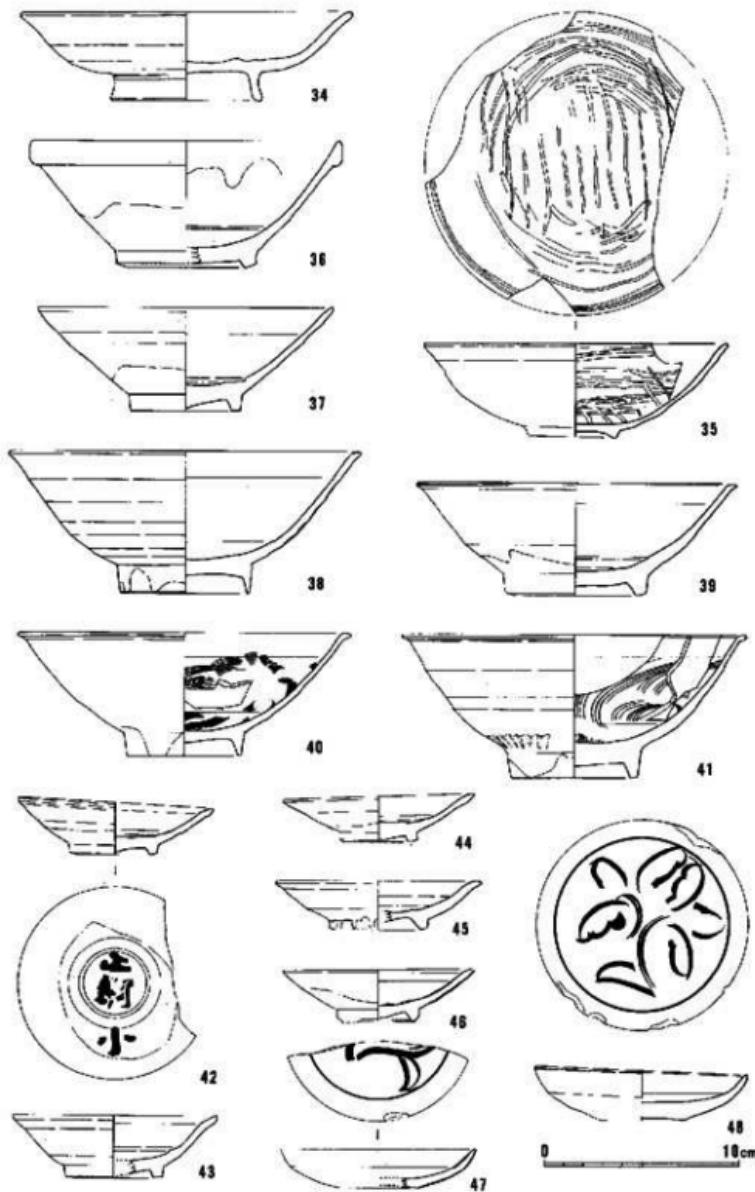
同安窯系青磁 槌 (49・50) 体部はやや内湾気味に外上方にのび、高台は断面逆台形を呈し、底部の器肉が厚い。体部外間に柳状工具による条線を施す。体部内面上位に沈線、体部と見込みの境に段をもつ。体部内面に49がヘラ、50は柳状工具による文様を施す。

龍泉窯系青磁 皿 (51) 体部中位で屈曲し、口縁部は直線的に外上方へのびる。内底見込

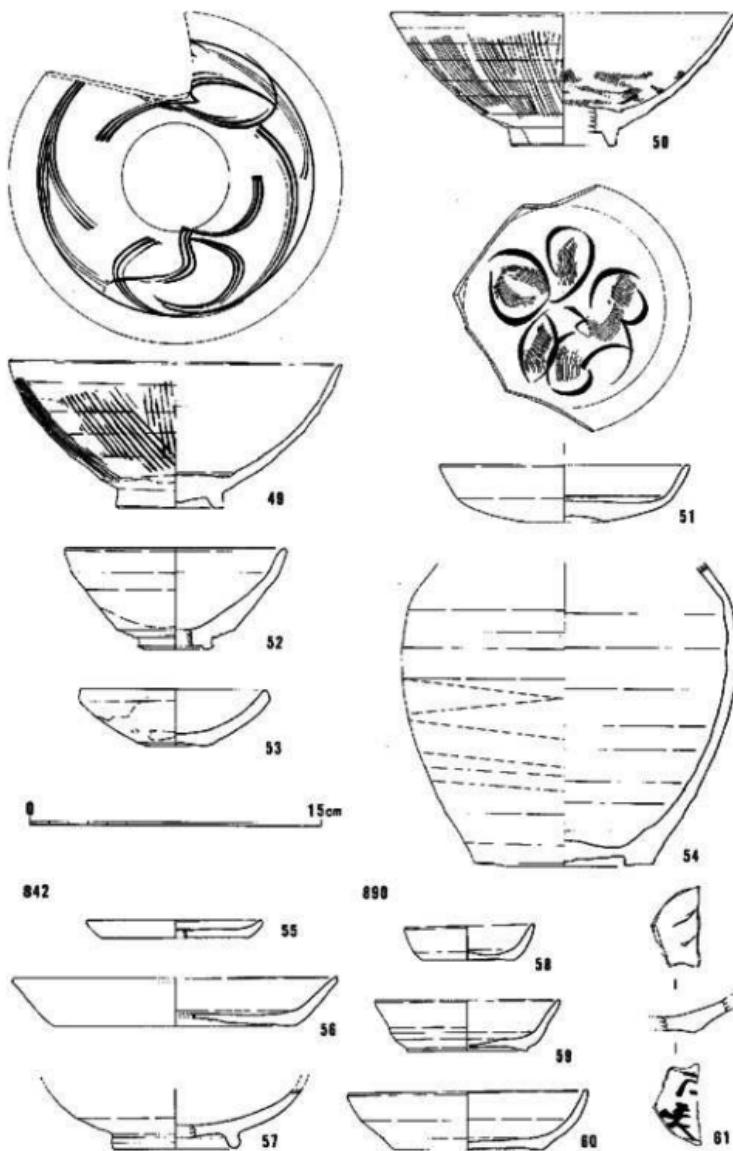
816



第46図 井戸出土遺物実測図(6) (1/3)



第47図 井戸出土遺物実測図(7)(1/3)



第48図 井戸出土遺物実測図(8)(1/3)

みにヘラおよび櫛状工具で花卉文を施す。

黒釉陶器 梗 (52) 口縁部は体部の上位で屈曲し、外反気味に外上方にのびる。内底見込みは平坦で、底部と体部の境に稜がつく。

陶器

皿 (53) 体部は直線的に外上方にのび、口縁部はやや肥厚する。胎上には細かい砂粒を多量に含み、赤褐色を呈する。不透明な緑色の釉が、底部付近までかけられている。

壺 (54) 胸部の上位に最大径をもち、口頭部を欠失している。外底部の内側が削られ輪状をなす。胎上には黒色微粒子を含み、暗灰色を呈する。

842号井戸出土遺物 (第48図)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿 (55) 口径9.0cm、器高0.9cm、底径7.4cmを測る。

杯 (56) 口径16.6cm、器高2.5cm、底径(12.4)cmを測る。

椀 (57) 断面半円形の高台をもつ底部片である。胎土は精良で、淡赤褐色を呈する。

850号井戸出土遺物 (第48図)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部から内底まで横ナデを施す。

特小皿 (58) 口径6.7cm、器高1.9cm、底径4.7cmを測る。

杯 (59・60) 59は口径9.5cm、器高2.6cm、底径6.2cmを測る小型のもので、60は口径12.4cm、器高3.1cm、底径7.6cmを測る。

白磁 皿 (61) 平底の皿の底部片で、外底に墨書きが記されているが判読不能である。

001号土壤出土遺物 (第49図、図版24)

土師器 底部の切り離しは糸切り離しによる。

小皿 (1~7) 体部から内底まで横ナデを施す。口径7.6~(8.2)cm、器高0.9~1.3cm、底径5.9~(7.0)cmを測る。

杯 (8~21) 8~14~16の体部は横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕がみられる。他は内底までナデで板状圧痕はみられない。口径10.0~14.6cm、器高2.0~3.3cm、底径7.0~11.4cmを測る。この中のやや丸味をもった体部から口縁部が外反し、端部が鋭く仕上げられた平底の一群は器形、法量の上で口禿の白磁皿の模倣型と見なされる。

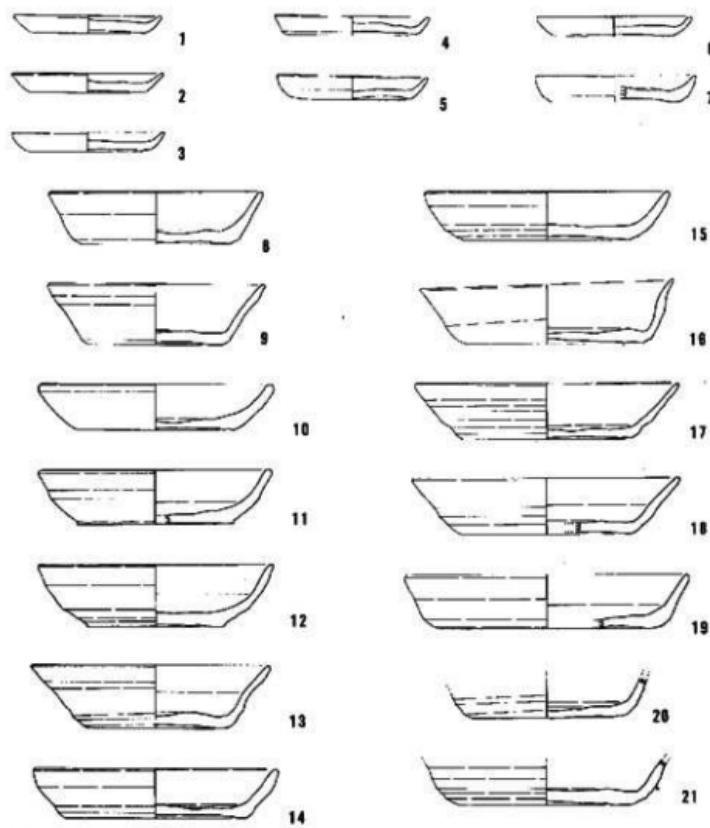
002号土壤出土遺物 (第49図)

土師器 底部の切り離しは糸切り離しによる。

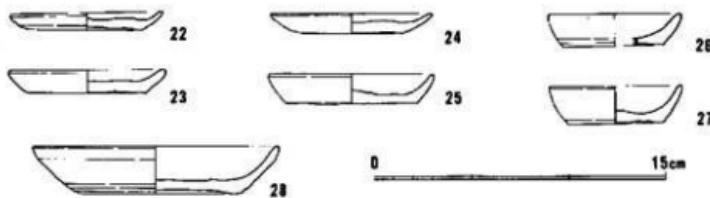
小皿 (22~25) 体部から内底まで横ナデを施す。口径7.8~8.4cm、器高0.9~1.6cm、底径5.8~(7.2)cmを測る。

特小皿 (26~27) 5は体部から内底まで横ナデ、6は体部が横ナデ、内底はナデ、外底に

001



002



第49図 土壤出土遺物実測図(1)(1/3)

板状圧痕がみられる。口径6.8・6.8cm、器高1.7・1.9cm、底径5.1・4.9cmを測る。

杯 (28) 体部は横ナデ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径12.6cm、器高2.4cm、底径8.5cmを測る。

017号土壤出土遺物 (第50図、図版24)

土師器 小皿 (1) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径10.4cm、器高2.0cm、底径8.4cmを測る。

白磁

椀 (2) 口縁部を玉縁にし、高台の削り出しが浅く、低く厚い。

皿 (3) 体部は直線的に外上方にのび、口縁端部が斜めに切られる高台付の皿である。内面体部を堆線で区割りし、見込みとの境に段をもつ。

018号土壤出土遺物 (第50図)

土師器 小皿 (4) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.0cm、器高1.1cm、底径9.2cmを測る。

032号土壤出土遺物 (第50図)

土師器 杯 (5) 底部の切り離しは糸切り離しで、体部から内底まで横ナデを施す。口径12.2cm、器高2.7cm、底径7.9cmを測る。

033号土壤出土遺物 (第50図、図版24)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿 (6) 口径8.4cm、器高1.2cm、底径6.6cmを測る。

杯 (7・8) 口径14.0・17.4cm、器高2.8・6.7cm、底径9.5・6.2cmを測る。

青磁 楠 (9) 体部は内湾気味にのび、口縁部がわずかに外反する。やや低めの断面逆台形の高台がつく。内面の口縁部下と見込みに沈線がつく。内面から体部外面中位まで回転横ナデ、それ以下は回転ヘラ削りされる。胎土には径1mm前後の砂粒を多量に含み、淡灰褐色～灰色を呈する。オリーブ色の透明な釉が体部外面下半までかかり、貫入が多い。

同安窯系青磁 皿 (10) 体部中位で屈曲し口縁部が外反する平底の皿で、内底見込みにヘラおよび樹状工具で文様を施す。

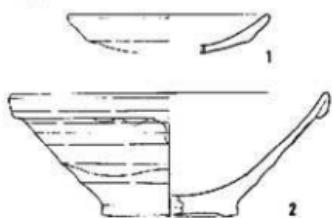
034号土壤出土遺物 (第50図、図版24)

土師器 杯 (11～14) 底部の切り離しは糸切り離しで、体部から内底まで横ナデを施す。口径12.2～13.0cm、器高2.5～2.6cm、底径8.6～9.3cmを測る。

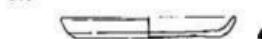
椀 (15) 体部は直線的に外上方にのび外面の削りの単位は幅広で、内面の口縁部下に沈線をもつ。内底見込みの釉を輪状にかき取る。内底は平坦で、断面逆台形の高台がつく。

皿 (16) 体部が直線的に外上方にのび、口縁端部は斜めに切られる平底の皿である。

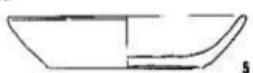
017



018



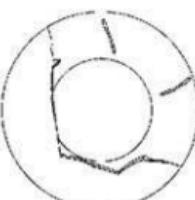
032



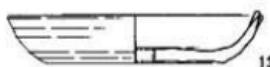
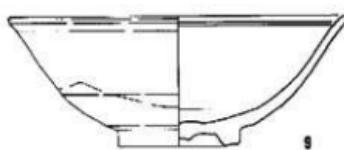
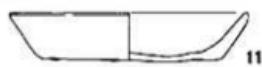
033



0 15cm



034



第50圖 土塚出土遺物實測圖(2)(1/3)

123号土壤出土遺物（第51図、図版24）

土師器

小皿（1） 底部の切り離しは糸切りで、体部から内底まで横ナテを施す。口径8.0cm、器高1.5cm、底径6.2cmを測る。

椀（2～3） 高台の形状はいびつで、重んだ輪状をなす。体部外面に指頭圧痕がみられ、内面は平滑に仕上げられているが、崩きの単位は認められない。胎土は精良で、淡赤褐色を呈する。

201号土壤出土遺物（第51図）

土師器 高台付小皿（4） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテを施す。外底に外に聞く高台を貼り付ける。口径10.6cm、器高2.2cm、高台径5.8cmを測る。

244号土壤出土遺物（第52図、図版24）

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部から内底まで横ナテを施す。杯の13・20・21の外底には板状圧痕がみられるが、内底をなすことによって生じたものではなく、乾燥の際に特に生乾きのものが置かれた台の木口などが圧痕としてついたものであろう。

小皿（1～3） 口径7.7～8.3cm、器高1.0～1.5cm、底径5.9～6.5cmを測る。

杯（4～22） 口径10.8～13.0cm、器高2.5～3.2cm、底径7.0～9.1cmを測る。この中のやや丸味をもった体部から口縁部が外反し、端部が鋭く仕上げられた平底の一組は001号土壤出土のものと同様、器形、法量の上で口禿の白磁皿の模倣型と見なされよう。

陶器 鉢（23） 外底部の内側は削られ基盤底をなす。胴部中位以上を欠失。胎土には砂粒を多量に含み、やや赤みのある肌色を呈し、内面は赤褐色の部分が多い。

300号土壤出土遺物（第51図）

土師器 高台付小皿（5） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテを施す。断面逆台形の直立した高台を貼り付ける。口径9.4cm、器高2.6cm、高台径5.9cmを測る。

347号土壤出土遺物（第51図、図版25）

白磁皿（6） 口縁部が内溝する平底の皿で、内面の口縁部下に沈線をもつ。

386号土壤出土遺物（第51図）

土師器 杯（7） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径12.7cm、器高2.8cm、底径7.7cmを測る。

399号土壤出土遺物（第53・55図、図版25）

土師器 小皿（1） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.0cm、器高1.1cm、底径7.0cmを測る。

白磁

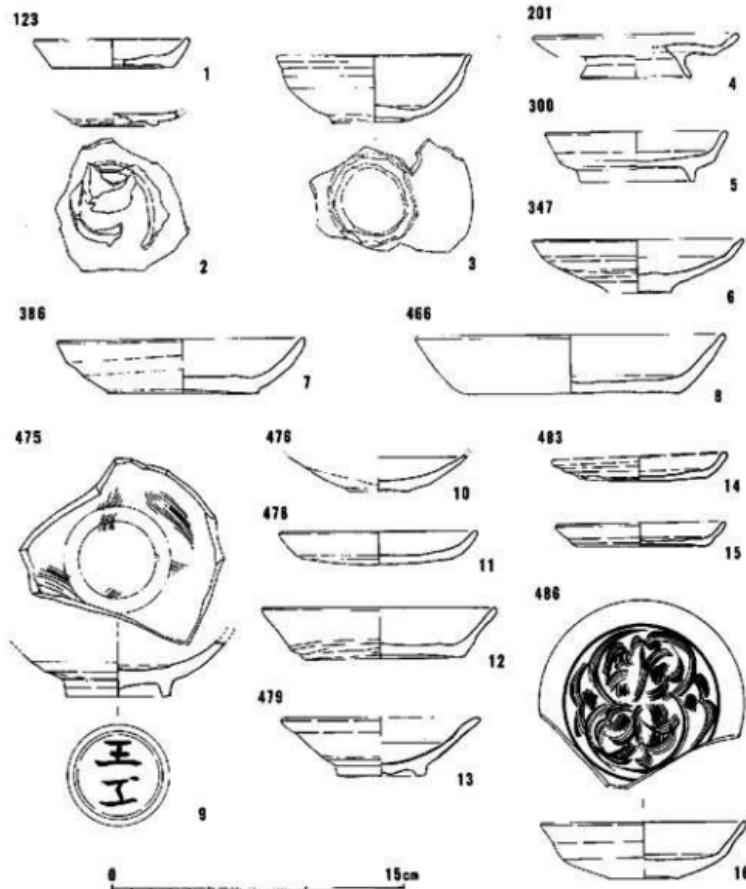
椀（2～5） 体部は直線的に外上方にのび外面の削りの単位は幅広で、内面の口縁部下に

沈線をもつ。内底見込みの種を輪状にかき取る。内底は平坦で、断面逆台形の高台がつく。

皿（6・7） 6は口縁部を玉縁にする高台付の皿である。高台の削り出しあは浅く、低く厚い。7は口縁部が内湾する平底の皿で、内面の口縁部下に沈線をもつ。

陶器

盤（8・9） 鋸状口縁の8は、胎上が灰色を呈し白色粒子を含む。釉は薄いオリーブ色を呈する。外面は露胎で紫灰色に発色する。口縁部を折り返しL字状にする9は胎上が灰色を呈し黒色粒子、白色粒子を含む。釉は薄いオリーブ色を呈し、外面は露胎である。



第51図 土壌出土遺物実測図(3)(1/3)

捏鉢（10） 口縁部を内面に折り返し、口縁端部を内傾させ口縁下に断面三角形の隆帯を造り出す。胎土には白色砂粒を多量に含み、紫色を呈する。

四耳壺（11） 精は褐色を帯びたオリーブ色、胎土は灰色を呈する。

401号土壤出土遺物（第54・55図、図版25）

土師器 杯（1） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径15.3cm、器高2.9cm、底径11.3cmを測る。

白磁

椀（2～7） 体部は直線的に外上方にのび外面の削りの単位は幅広で、内面の口縁部下に沈線をもつ。内底見込みの釉を輪状にかき取る。内底は平坦で、断面逆台形の高台がつく。

皿（8） 直線的に外上方にのびる体部に、玉縁状に肥厚した口縁部がつく高台付の皿である。高台の削り出しあは浅く、低く厚い。

陶器

壺（9） 頸部以上を欠失。肩部から胴部にかけては丸みをもち、底部は上げ底で、径約2cmの孔が穿たれている。胎土は灰黒色を呈し、外面に緑色の釉がかけられ、内面に垂れ下がっている。

四耳壺（10・13～16） 10は口縁部を折り返し内傾するL字状にする。釉は暗茶褐色、胎土には白色砂粒を多量に含み、灰色を呈する。13～16の釉は褐色を帯びたオリーブ色、胎土は灰色を呈する。13・14は口縁部が断面三角形を呈し、端部を水平にする。肩部に波状沈線がめぐり、横耳が貼り付けられる。外底部の内側が割られ蛇の目状をなす。13は頸部と肩部の境に凹線が入るが、不明瞭である。14は同様に凹線があり、頸部が13と比して直に近く頸部と肩部の境が明瞭である。15は肩部に波状沈線がめぐり、縦耳が貼り付けられる。外底部の内側が割られ輪状をなす。頸部は欠失。16は胴部下半以下が残存し、399号土壤出土の破片と接合した。外底部の内側が割られ蛇の目状をなす。

瓦瓶（11） 脇部中位以上を欠失。底部に高く外側に聞く高台をもつ。陶製絆筒と同形態である。集落遺跡からの出土は稀である。胎土は灰色を呈し、外底部を除いて名褐色の釉がかけられている。

水注（12） やや上げ底の円盤状の底部をもち、脇部中位以上は欠失している。胎土には白色砂粒を多量に含み、紫褐色を呈する。

466号土壤出土遺物（第31図）

土師器 杯（8） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径16.3cm、器高3.0cm、底径11.0cmを測る。

475号土壤出土遺物（第51図、図版25）

同安窯系青磁 挿（9） 内面に模描文が施されている。内底見込みの釉を輪状にかき取り、

断面逆台形の高台がつく。外底に「王口」の墨書きが記されている

478号土壤出土遺物（第51図、図版25）

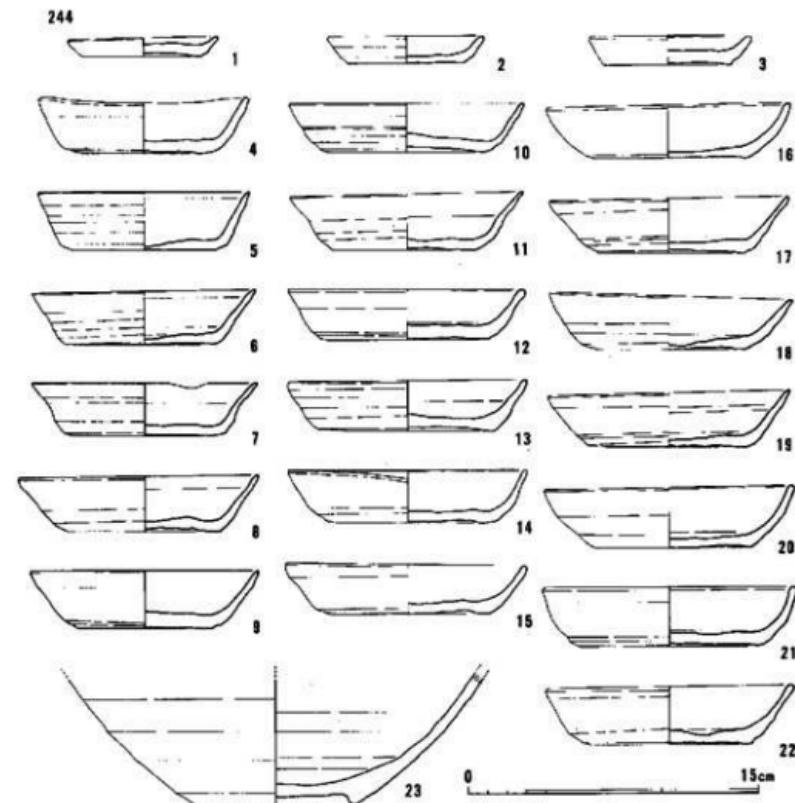
白磁皿（10） 口縁部が内湾する平底の皿で、内面の口縁部下に沈線をもつ。口縁部上位を欠失。

478号土壤出土遺物（第51図）

土器器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（11） 口径10.2cm、器高1.7cm、底径7.7cmを測る。

杯（12） 口径12.0cm、器高3.1cm、底径6.3cmを測る。



第52図 土壤出土遺物実測図(4)(1/3)

479号土壤出土遺物 (第51図、図版25)

白磁 皿 (13) 内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。体部はやや丸味をもつて外上方にのび、わずかに口縁部が外反する。

483号土壤出土遺物 (第51図)

土師器 小皿 (14・15) 底部の切り離しは糸切り離しによる。14は体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.0cm、器高1.5cm、底径6.7cmを測る。15は体部から内底まで横ナテを施す。口径8.8cm、器高1.3cm、底径6.6cmを測る。

486号土壤出土遺物 (第51図、図版26)

龍泉窯系青磁 皿 (16) 体部中位で屈曲し、口縁部は直線的に外上方へのびる。内底見込みにヘラおよび櫛状工具で花卉文を施す。

530号土壤出土遺物 (第56図、図版)

土師器 杯 (1) 底部の切り離しは糸切りで、体部から内底まで横ナテを施す。口径17.0cm、器高3.5cm、底径9.8cmを測る。

白磁 皿 (2) 直線的に外上方にのびる体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。

535号土壤出土遺物 (第56図、図版26)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿 (3～5) 口径9.2～9.4cm、器高0.9～1.4cm、底径6.6～7.5cmを測る。

杯 (6) 口径15.2cm、器高3.1cm、底径10.5cmを測る。

白磁 皿 (7) 口縁部が内湾する平底の皿で、底径は大きい。内面の口縁部下に沈線をもつ。内底見込みに花卉文を施す。

550号土壤出土遺物 (第56図、図版)

土師器 小皿 (8) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.5cm、器高1.5cm、底径7.7cmを測る。

555号土壤出土遺物 (第56図、図版26)

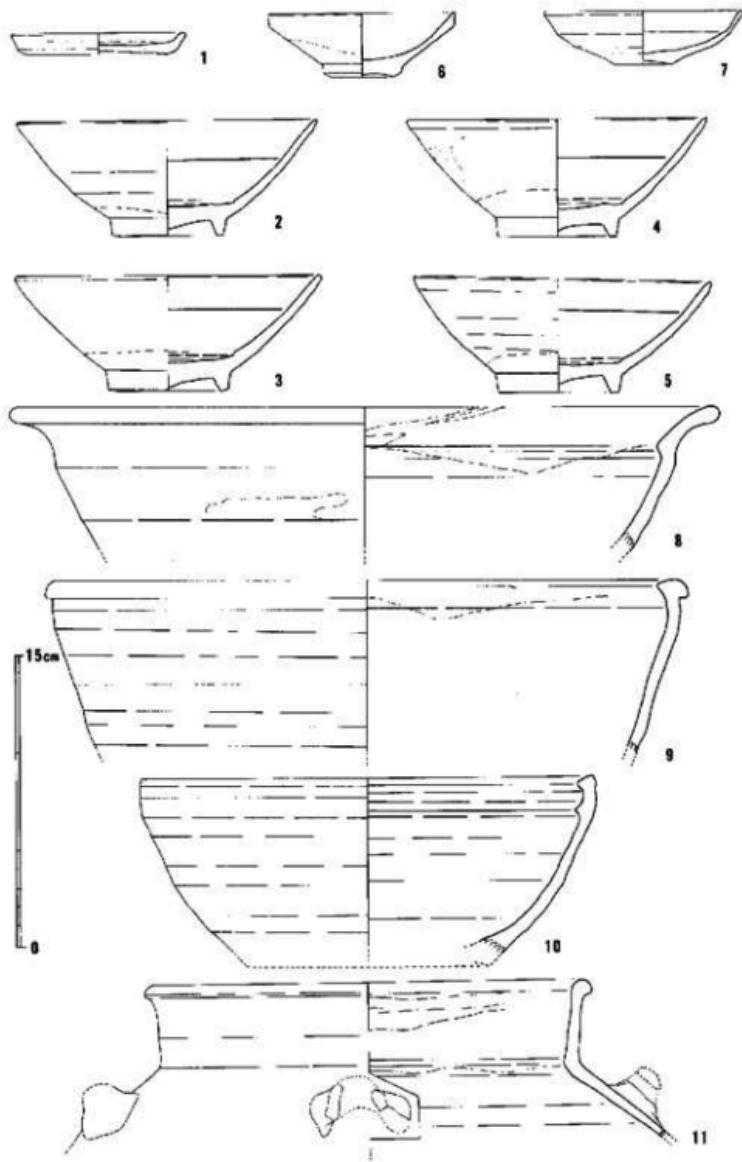
白磁 皿 (9) 直線的に外上方にのびる体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。

575号土壤出土遺物 (第56図)

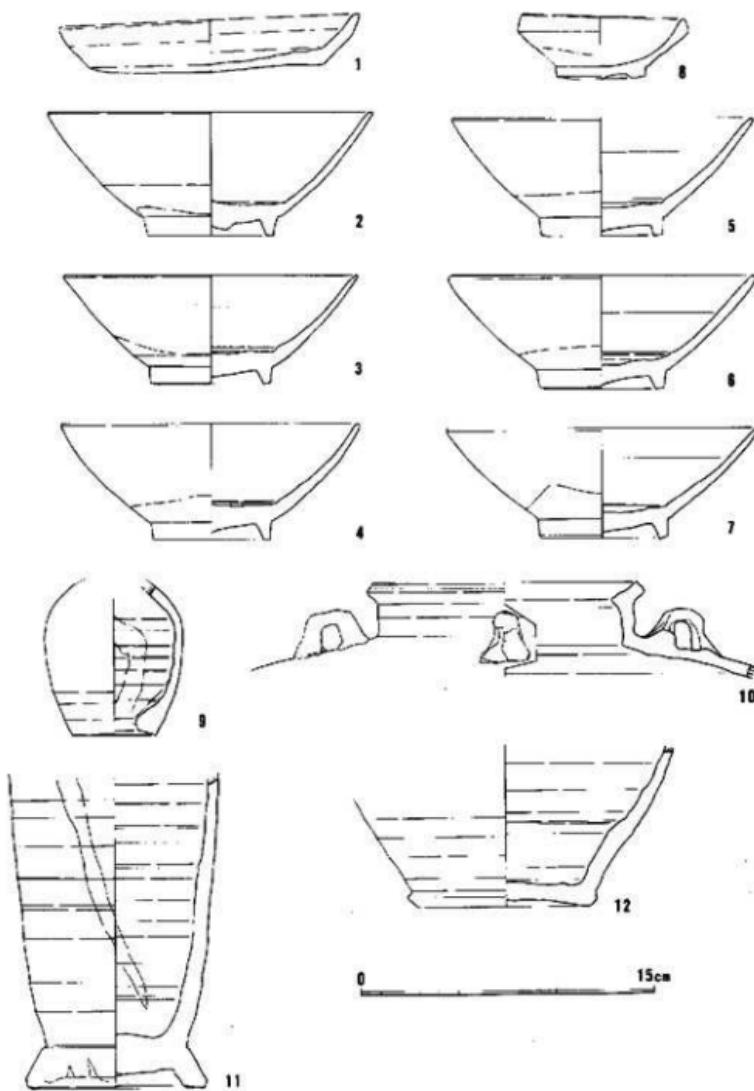
土師器 小皿 (10) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.4cm、器高1.2cm、底径8.1cmを測る。

578号土壤出土遺物 (第56図、図版26)

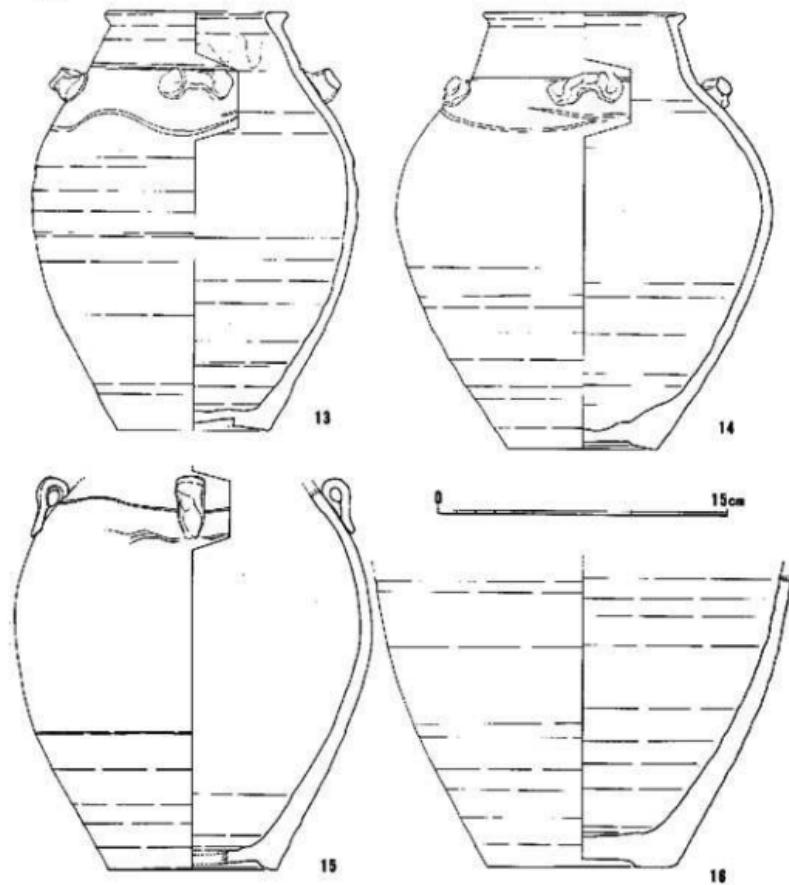
土師器



第53図 土壌出土遺物実測図(5)(1/3)



第54図 土壤出土遺物実測図(6)(1/3)



第55図 土壌出土遺物実測図(7)(1/3)

小皿 (11) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径(9.0)cm、器高1.2cm、底径7.3cmを測る。

杯 (12・13) 底部の切り離しは糸切り離しによる。12は体部から内底まで横ナデを施し、口径(11.9)cm、器高2.9cm、底径7.4cmを測る。13は体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径15.0cm、器高2.5cm、底径11.1cmを測る。

瓦質土器 (14) 器形は不明。極端な上げ底の皿の形状をとる。上面は回転横ナデ、下面

は回転ヘラ削りされる。胎土は精良で灰色、外面は焼され黒灰色を呈する。

龍泉窯系青磁 盆(15) 体部中位で屈曲し、口縁部は直線的に外上方へのびる。内底見込みに魚文を施す。

578号土壤出土遺物 (第56図、図版26)

土師器 小皿(16) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.7cm、器高1.1cm、底径8.0cmを測る。

白磁 梗(17) 体部は直線的に外上方にのび外面の割りの単位は幅広で、内面の口縁部下に沈線をもつ。内底見込みの釉を輪状にかき取る。内底は平坦で、断面逆台形の高台がつく。

黒釉陶器 梗(18) 体部は直線的に外上方にのび、口縁部下で内側へ屈曲し、端部が外反する。体部と底部の境に鋭く稜がつく。内底見込みは広くなっている。

551号土壤出土遺物 (第57図、図版26)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿(1~3) 口径8.8~9.6cm、器高0.9~1.1cm、底径7.5~8.1cmを測る。

杯(4) 口径16.3cm、器高3.0cm、底径10.8cmを測る。

白磁

梗(5~7) 5は内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部が外へ屈曲する。内面の口縁部下に沈線、体部と見込みの境に段をもつ。高台は高く細く、外側が直に削り出される。6は体部は直線的に外上方にのび外面の割りの単位は幅広で、内面の口縁部下に沈線をもつ。内底見込みの釉を輪状にかき取る。内底は平坦で、断面逆台形の高台がつく。7は内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部が外反する浅い梗である。内面の体部と見込みの境に沈凹線をもち、模様文が施される。高台は高く細く、外側が直に削り出される。外底に墨書が記されているか判読不能である。

皿(8~9) 8は直線的に外上方にのびる体部に、玉縁状に肥厚した口縁部がつく平底の皿である。9は口縁部が内湾する平底の皿で、底径は大きい。内面の体部中位に沈線をもつ。

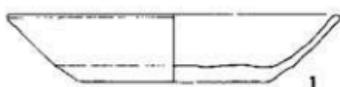
龍泉窯系青磁 梗(10) 梗の底部片で、高台は断面四角形を呈し底部の器肉は厚い。内底見込みに魚文を施す。

青磁 皿(11) 体部は丸味をもって外上方にのび、口縁端部が斜めに切られる幕筋底の皿である。体部内面に鳥を型押しによって施文している。焼成不良のもので、胎上は暗い肌色を呈し、釉は全く透明感を欠き淡褐色を呈する。

590号土壤出土遺物 (第58図、図版26)

白磁 皿(1) 直線的に外上方にのびる体部から口縁部がわずかに外反し、体部中位の内面に沈線をもつ平底の皿である。胎土には細かい砂粒を含み、灰白色を呈する。

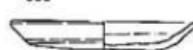
538



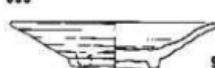
535



550



555



575



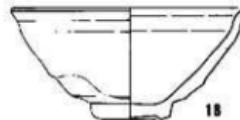
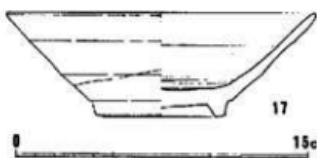
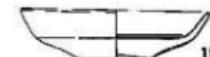
576



578



579



15cm

第56圖 土壤出土遺物實測圖(8)(1/3)

龍泉窯系青磁 梗 (2) 体部内面にヘラによる片彫りの線を入れ、5分割し、その間に雲文を配している。

597号土壤出土遺物 (第58図、図版26)

白磁

梗 (3・4) 3は口縁部を玉縁にし、高台の削り出しあは浅く、低く厚い。4は内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部が外へ屈曲する。内面の口縁部下に沈線、体部と見込みの境に段をもつ。高台は高く細く、外側が直に削り出される。外底に墨書が記されているが判読不能である。

皿 (5) 直線的に外上方にのびる体部に、玉縁状に肥厚した口縁部がつく高台付の皿である。高台の削り出しあは浅く、低く厚い。

599号土壤出土遺物 (第58図、図版26)

白磁 梗 (6) 内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部を外反し端部を水平にする。体部と見込みの境のやや上位に沈線をもつ。

601号土壤出土遺物 (第58図、図版26)

白磁

梗 (7) 高台の外側を直に内側を斜めに削り出すII類の梗である。体部は内湾気味に、口縁部は直線的に外上方にのびる。内面体部を堆線で区割りし、見込みとの境に段がつき、内底は平坦にする。

皿 (8) 直線的に外上方にのびる体部から口縁部が外反し、体部中位の内面に沈線をもつ高台付の皿である。

624号土壤出土遺物 (第60・61図、図版26)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状压痕がみられる。

小皿 (1) 口径9.8cm、器高1.2cm、底径7.3cmを測る。

杯 (2) 口径14.4cm、器高3.0cm、底径8.4cmを測る。

白磁

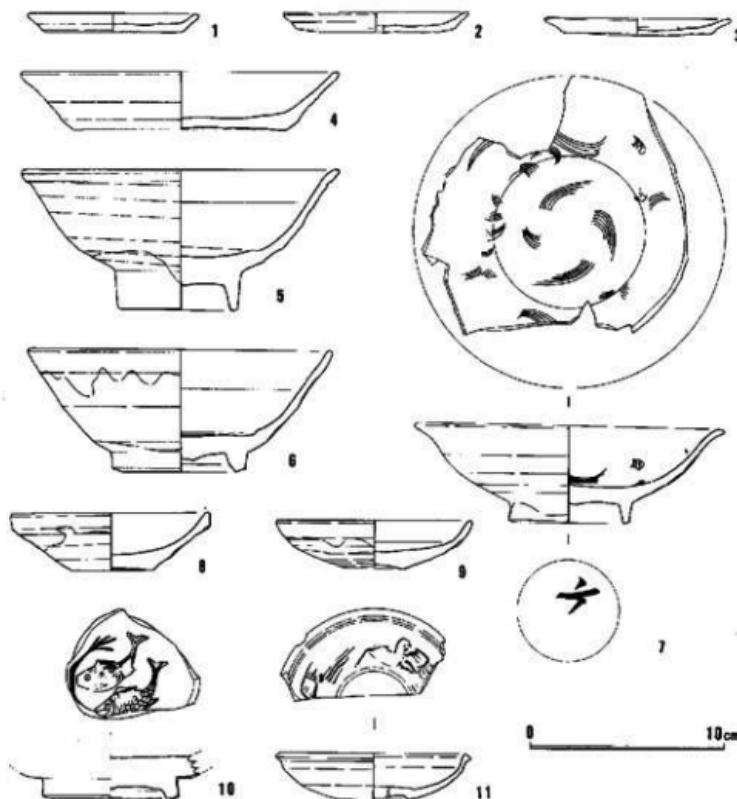
梗 (3~9) 3は内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部を外反し端部を水平にする。体部と見込みの境のやや上位に沈線をもつ。内面に模描文が施されているが、釉が不透明であるためほとんど観察できない。4~8は内底見込みの釉が輪状にかきとられ、高台は高く低く断面逆台形を呈する。4~7の体部は内湾気味に外上方にのび、口縁部は外反し端部は平坦をなす。5~7は内面の口縁部下に沈線をもつ。8は体部は直線的に外上方にのび外面の割りの単位は幅広で、内面の口縁部下に沈線をもつ。内底は平坦にする。9は8と同じ型の底部うい欠失したものである。

皿 (10~13) 10は直線的に外上方にのびる体部から口縁部がわずかに外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。11・12は口縁部が内湾する平底の皿で、底径は大きい。内面の体部中位に沈線をもつ。内底見込みにヘラ用いて花卉文を施すが、11はこの間を櫛状工具による之字形点綴文で埋めている。12は外底に墨書き記されているが判読不能である。13は内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部が先細りに水平に屈曲する。口縁部を輪花にし、内面体部を堆線で区割りし、見込みとの境に段がつく。

四耳壺 (14) 頭部より上位の破片資料で、口縁部を折り返し外下方に垂らす。

水注 (15) 胸部中位より上の破片資料で、注口、把手は欠失している。口縁部を折り返し

551



第57図 土壤出土遺物実測図(9)(1/3)

外下方に垂らす。

陶器 鉢 (16) 口縁部を折り返し断面三角形にし、外側の端部を下方に垂らす。口縁部と肩部下位に月鉢がある。褐色の釉が全面にかけられ、胎土には黒色粒子を含み、赤褐色を呈する。

龍泉窯系青磁 梵 (17) 内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部がわずかに外反する。高台は断面四角形を呈し、底部の器肉は厚い。体部外面にヘラによる線状文を施し、内面はヘラを用いて蓮華文を施し、この間を横目で埋めている。

同安窯系青磁 梵 (18) 体部は内湾気味に、口縁部は直線的に外上方にのびる。体部内面には柳状工具による之字形点線文が施されている。高台は断面逆台形を呈し、底部の器肉が厚い。体部内面上位に沈線、体部と見込みの境に段をもつ。

陶器

四耳壺 (19~21) 19は底部の内側が削られ輪状をなす肩部下半以下の残存である。外底に墨書が記されているが判読不能である。20は頸部が直に立ち、玉縁状に肥厚した口縁部がつく。肩部に2条の凹線を入れた横耳が貼り付けられる。底部は平底である。釉は頸部内面から体部下位までかけられ、透明な緑色を呈し、釉下には化粧上がりみられ、肩部内面から暗緑色釉を流す。胎土には砂粒、黒色粒子を多量に含み、灰色を呈する。21は口縁部を折り返し内傾するL字状にする。肩部に縦耳が貼り付けられる。茶褐色の釉が外而体部下位までかけられ、胎上には砂粒、黒色粒子を多量に含み、灰色~明黄褐色を呈する。器高は図上での合成から復元したものである。

810号土壤出土遺物 (第59図、図版27)

土師器 小皿 (1~36) 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状压痕がみられる。口径8.9~9.5cm、器高1.0~6.7cm、底径6.2~8.0cmを測る。

807号土壤出土遺物 (第62図、図版27)

白磁 小梵 (1) 体部はやや丸味をもって外上方にのび、口縁部が外反する。内面の口縁部下に沈線をもつ。高台は外側を直に内側を斜めに削り出す。

809号土壤出土遺物 (第62図)

土師器 杯 (2) 底部の切り離しは糸切りで、体部から内底まで横ナテを施す。口径13.2cm、器高2.8cm、底径8.7cmを測る。

818号土壤出土遺物 (第62図)

白磁 梵 (3) 内湾気味に外上方にのびる体部から、口縁部が外へ屈曲する。内面の口縁部下に沈線、体部と見込みの境に段をもつ。高台は高く細く、外側が直に削り出される。

840号土壤出土遺物 (第62図、図版27)

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状压痕がみられる。

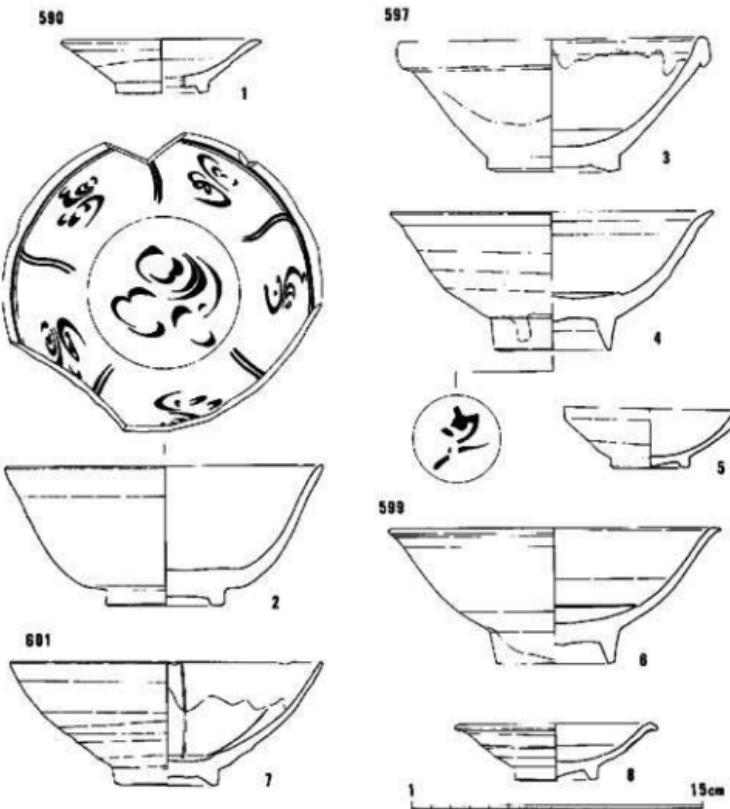
小皿（4） 口径9.2cm、器高0.8cm、底径6.0cmを測る。

杯（5～8） 口径14.6～16.6cm、器高2.9～3.0cm、底径9.8～11.0cmを測る。

白磁 皿（9） 直線的に外上方にのびる体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。

843号土壙出土遺物（第62図）

土師器 高台付小皿（10） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナデ、内底はナデを施す。外底に外に聞く高台を貼り付ける。口径9.6cm、器高2.4cm、高台径4.7cmを測り、840号土壙他で出土している白磁高台付皿に、法量が近似する。器形の上からは模倣型とは言い難いが、白



第58図 土壙出土遺物実測図(10)(1/3)

磁高台付皿の流入による影響を受けたものか。

844号土壤出土遺物（第62図、図版27）

土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（11～14） 口径8.5～10.0cm、器高0.9～1.2cm、底径6.4～7.4cmを測る。11の底部のはば中央には直径0.4mmの孔が穿たれている。

杯（15・16） 口径14.0・16.6cm、器高2.5・3.1cm、底径（10.6）・10.4cmを測る。

白磁

楕（17・18） 17は口縁部を外反させ、端部を水平にする。17は内面の口縁部下に沈線、体部と見込みの境に段をもつ。高台は高く細く、外側が直に削り出される。内面に櫛描文が施されている。18の体部は直線的に外上方にのび外面の削りの単位は幅広で、内面の口縁部下に沈線をもつ。内底見込みの釉を輪状にかき取る。内底は平坦で、断面逆台形の高台がつく。高台端部が細かく打ち欠かれている。重ね焼きで癒着した下方の個体の内底と取って離す際に付いたものであろう。

皿（19～22） 19は直線的に外上方にのびる体部に、玉縁状に肥厚した口縁部がつく平底の皿である。20は直線的に外上方にのびる体部から口縁部が外反し、内底見込みの釉を輪状にかき取った高台付皿である。21は体部が直線的に外上方にのび、口縁端部は斜めに切られる平底の皿である。22は体部は直線的に外上方にのび、口縁端部が斜めに切られる平底の皿である。内湾気味に外上方にのびる体部から口縁部がやや外反する平底の皿で、内面の口縁部下に沈線をもつ。

845号土壤出土遺物（第62図）

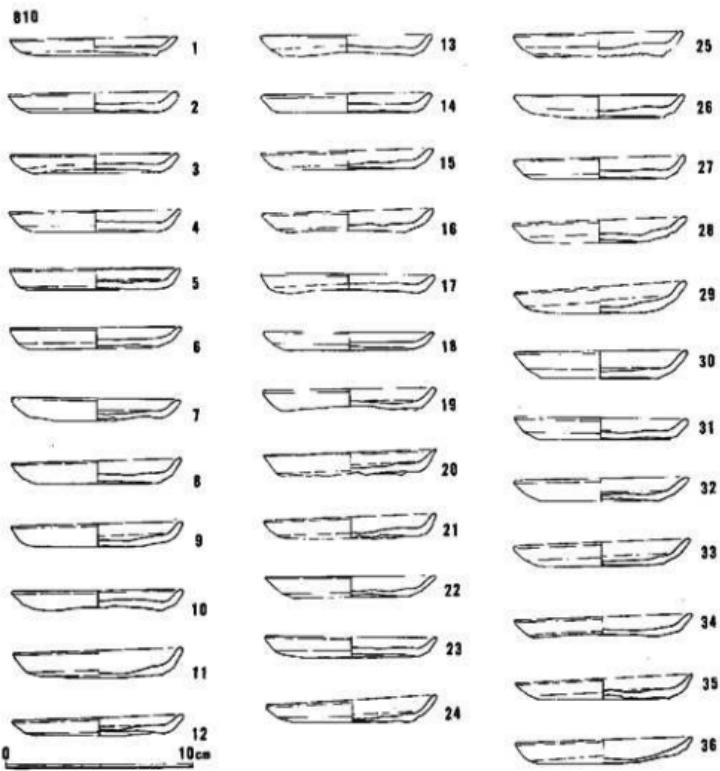
土師器 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（23～27） 口径8.6～9.6cm、器高0.9～1.5cm、底径5.8～7.4cmを測る。

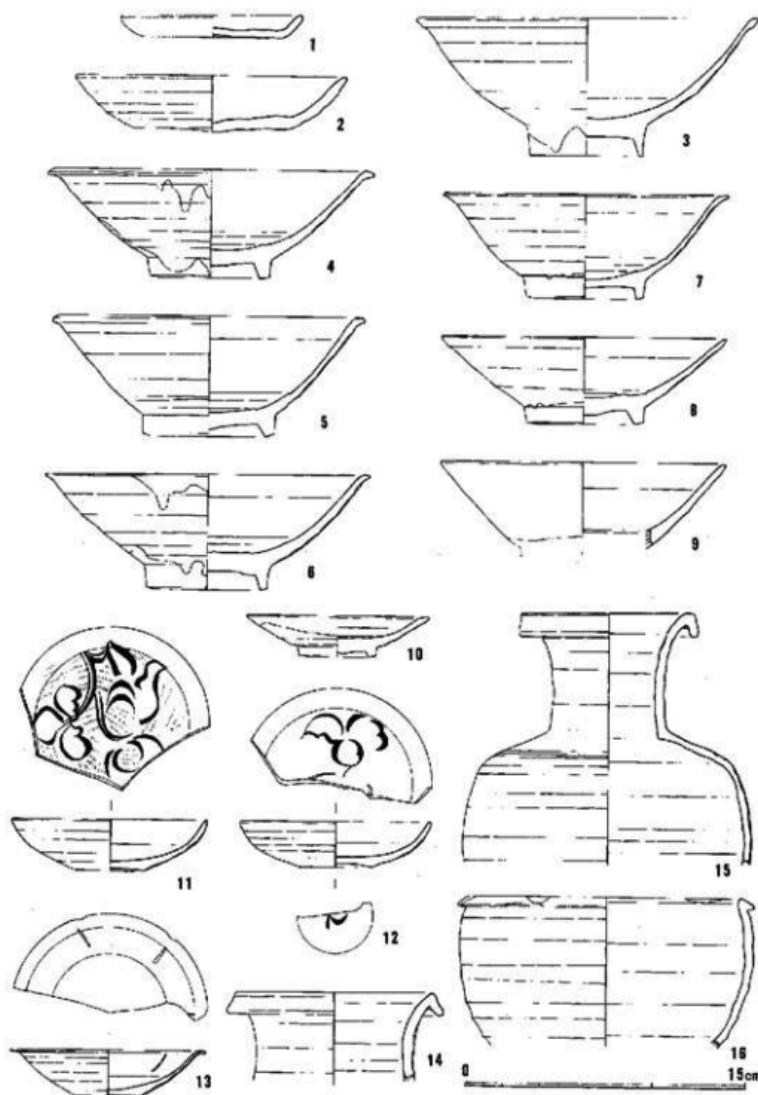
杯（28） 口径14.8cm、器高2.7cm、底径10.7cmを測る。

859号土壤出土遺物（第62図）

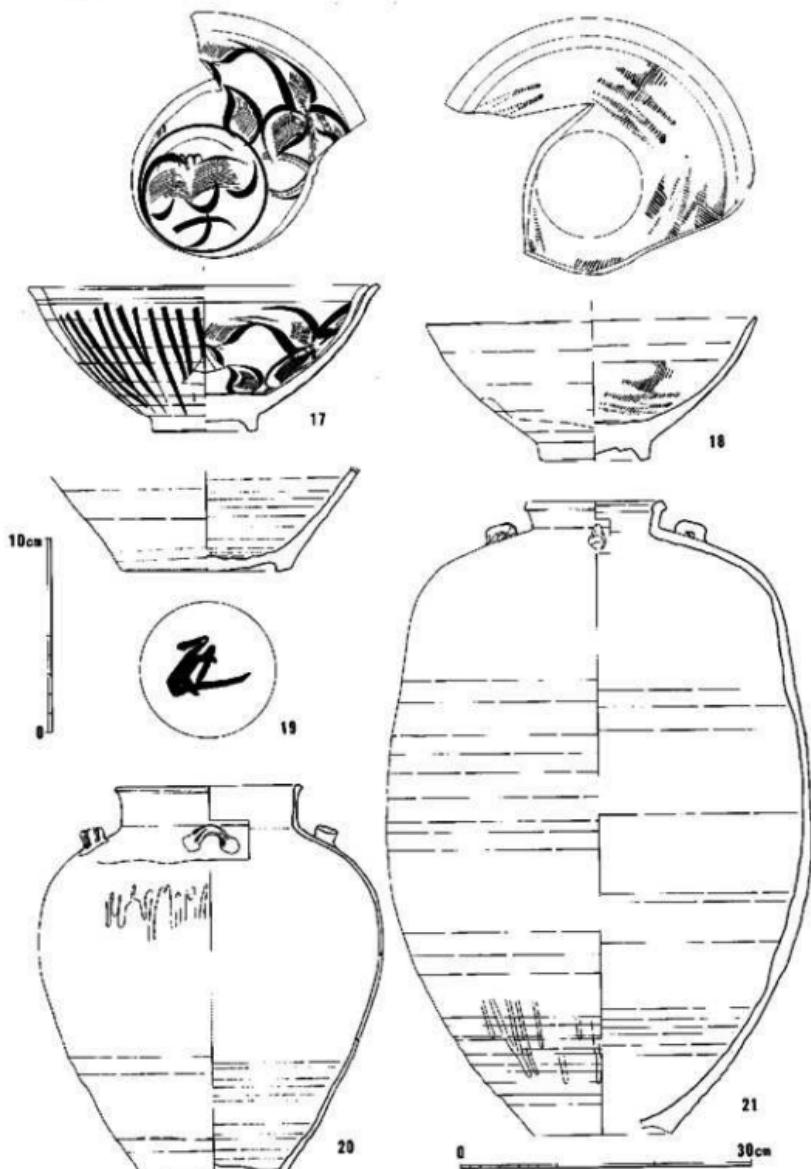
土師器 小皿（29） 底部の切り離しは糸切りで、体部は横ナテ、内底はナテ、外底には板状圧痕がみられる。口径9.0cm、器高1.3cm、底径7.0cmを測る。



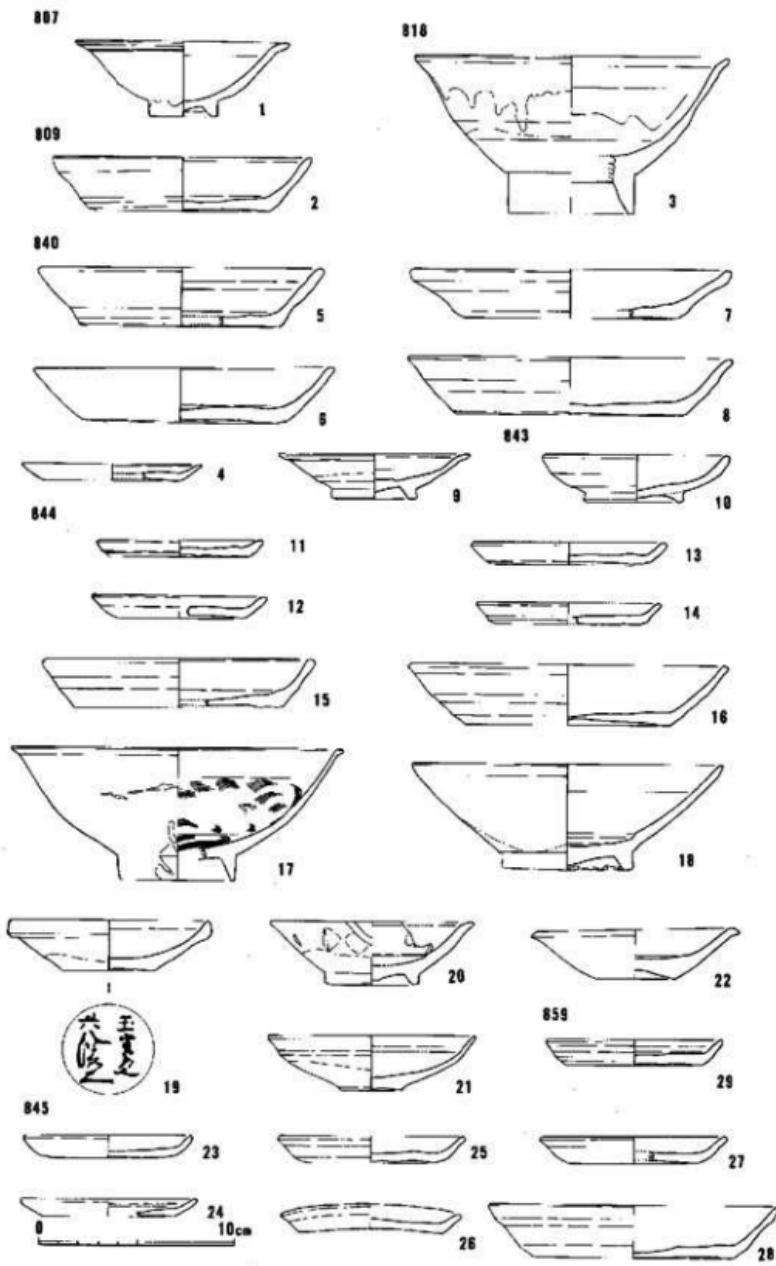
第59図 土壤出土遺物実測図(II)(1/3)



第60図 土塗出土遺物実測図(1/2)(1/3)



第61図 土壌出土遺物実測図(13)(1/3+1/6)



第62図 土壙出土遺物実測図(14)(1/3)

種別 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	種別 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	種別 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
003											
上師器小皿											
土師器小皿				1	8.6	1.3	7.2	34	(17.0)	4.6	10.1
1	9.5	1.2	7.5	2	(8.4)	1.25	(6.2)	瓦器碗			
243				3	8.8	1.2	6.5	36	15.5	4.8	4.5
土師器小皿				4	8.7	1.1	6.5	442			
10	9.2	1.6	6.8	5	(8.6)	(1.15)	(6.8)	土師器小皿			
001				6	8.4	1.2	6.2	55	9.0	0.9	7.4
土師器杯				7	8.7	1.25	6.3	土師器杯			
1	(15.6)	3.0	11.6	8	8.4	1.4	7.4	56	(16.6)	2.5	(12.4)
020				9	8.5	1.3	6.0	上師器碗			
上師器杯				10	(8.6)	1.4	(5.0)	57	13.0	3.0	3.1
2	(11.6)	2.6	(7.2)	11	9.0	1.2	(7.4)	490			
028				12	(9.0)	1.3	(6.7)	土師器特小皿			
土師器小皿				13	(9.2)	1.4	(7.1)	58	6.7	1.9	4.7
4	9.3	1.5	6.9	14	9.0	1.35	7.0	土師器杯			
031				15	9.1	1.25	7.6	59	9.5	2.6	6.2
土師器杯				16	9.6	1.5	6.5	60	12.4	3.1	7.6
1	(16.8)	2.8	(11.2)	17	9.5	1.1	7.8	801			
2	(16.4)	3.5	(9.0)	18	9.4	1.3	7.7	土師器小皿			
202				19	(9.4)	(1.3)	(7.2)	1	7.6	0.9	5.9
土師器小皿				20	9.0	1.2	6.0	2	(7.8)	1.0	(6.0)
15	8.6	1.0	6.8	21	(9.8)	1.0	8.1	3	7.8	1.0	6.3
16	(9.0)	1.1	(7.0)	土師器杯				4	7.9	(1.0)	6.6
17	(9.4)	1.0	(5.6)	22	(13.2)	3.0	(10.1)	5	7.7	1.3	6.2
18	(9.4)	1.5	(7.0)	23	(16.2)	3.1	11.0	6	(8)	1.0	(6.0)
土師器杯				24	(15.9)	3.6	9.8	7	(8.2)	(1.3)	(7.0)
19	(15.5)	2.4	(10.2)	25	(14.3)	3.1	10.2	土師器杯			
20	16.0	2.7	10.5	26	14.7	2.8	10.1	8	(10.0)	2.7	(8.4)
301				27	(15.1)	2.7	10.0	9	(11.2)	3.1	(7.0)
土師器小皿				28	14.4	2.7	10.4	10	(12.0)	2.3	(8.0)
22	8.6	1.1	6.1	29	(15.6)	3.1	10.4	11	(12.0)	2.8	(8.0)
527				30	(15.0)	2.8	10.1	12	(12.0)	3.2	(7.0)
土師器杯				31	15.5	2.95	11.0	13	12.3	3.2	7.3
5	(12.8)	2.7	8.7	32	15.6	3.0	12.3	14	(12.6)	2.5	9.2
816				33	(16.0)	2.65	(12.2)	15	(12.6)	2.5	8.5

第1表 出土土器計測表(1)

(括弧内の数値は復元値)

拂岡 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	拂岡 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	拂岡 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
16	13.0	3.3	9.1	12	12.5	2.5	8.6	21	(13.0)	3.1	(9.1)
17	(13.6)	2.8	8.6	13	(13.0)	2.6	(9.0)	22	12.7	3.1	8.4
18	(13.8)	2.9	8.6	14	12.5	2.6	8.7	300			
19	(14.6)	2.8	11.4	123					土師器高台付小皿		
20			7.7	土師器小皿				5	(9.4)	2.6	5.9
21	(12.5)	2.0	(9.0)	1	(8.0)	1.5	(6.2)	386			
802				土師器小碗				土師器杯			
土師器小皿				2			4.0	7	12.7	2.8	7.7
22	7.8	0.9	5.8	3	(10.0)	3.5	4.1	399			
23	8.1	1.2	6.0	201				土師器小皿			
24	(8.2)	1.0	(7.2)	土師器高台付小皿				1	(9.0)	1.1	(7.0)
25	(8.4)	1.6	(6.7)	4	(10.6)	2.2	(5.8)	401			
土師器特小皿				244				土師器杯			
26	6.8	1.7	5.1	土師器小皿				1	15.3	2.9	11.3
27	6.8	1.9	4.9	1	7.7	1.0	6.1	486			
土師器杯				2	(8.0)	1.4	(5.9)	土師器杯			
28	(12.6)	2.4	8.5	3	8.3	1.5	6.5	8	(16.0)	3.0	(11.0)
817				土師器杯				478			
土師器小皿				4	(10.8)	2.9	7.3	土師器小皿			
1	(10.4)	2.0	(8.4)	5	(10.8)	3.0	7.3	11	(10.2)	1.7	(7.7)
818				6	11.4	2.8	7.6	土師器杯			
土師器小皿				7	11.5	2.7	8.2	12	12.0	3.1	6.3
4	(9.0)	1.1	(9.2)	8	12.3	2.9	7.8	483			
832				9	(11.8)	3.0	7.0	土師器小皿			
土師器杯				10	(12.0)	2.5	(7.7)	14	9.0	1.5	6.7
5	12.2	2.7	7.9	11	12.0	3.0	7.5	15	8.8	1.3	6.6
833				12	12.1	2.6	8.5	530			
土師器小皿				13	12.2	2.7	8.4	土師器杯			
6	(8.4)	1.2	(6.6)	14	12.2	2.7	8.0	1	(17.0)	3.5	9.8
土師器杯				15	12.3	2.7	8.3	535			
8	(14.0)	2.8	9.5	16	12.6	2.8	8.4	土師器小皿			
9	(17.4)	6.7	6.2	17	12.3	2.9	7.5	3	9.2	0.9	7.5
834				18	12.5	3.0	8.0	4	(9.4)	1.4	(6.7)
土師器杯				19	12.4	2.9	8.2	5	(9.4)	1.25	(6.6)
11	12.2	2.5	9.3	20	12.8	3.2	8.1	土師器杯			

第2表 出土土器計測表(2)

(括弧内の数値は復元値)

押岡 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	押岡 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	押岡 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
6	15.2	3.1	10.5	2	9.0	1.1	6.7	36	9.5	1.4	7.5
550				3	9.0	1.2	6.9	848			
土師器小皿				4	9.1	1.2	6.7	土師器小皿			
8	9.5	1.5	7.7	5	9.1	1.1	8.0	4	(9.2)	0.8	(6.0)
551				6	9.1	1.2	7.3	土師器杯			
上師器小皿				7	9.0	1.3	7.1	5	(14.6)	3.0	(10.0)
1	(8.8)	1.0	(7.5)	8	9.0	1.3	6.7	6	15.4	2.9	9.8
2	9.5	1.1	8.1	9	9.1	1.3	7.1	7	(16.4)	(3.0)	(10.9)
3	(9.6)	0.9	(7.5)	10	9.1	1.4	6.6	8	(16.6)	2.9	(11.6)
土師器杯				11	9.0	1.1	6.6	843			
4	(16.3)	3.0	(10.8)	12	9.1	1.1	7.3	上師器高台付小皿			
575				13	9.2	1.1	7.0	10	9.6	2.4	4.7
上師器小皿				14	9.1	1.0	7.5	844			
10	9.4	1.2	8.1	15	9.2	1.3	6.8	土師器小皿			
576				16	9.2	1.3	6.2	11	8.5	0.9	7.2
土師器小皿				17	9.3	1.2	7.5	12	8.9	1.2	6.4
11	(9.0)	1.2	7.3	18	9.1	1.1	7.0	13	(10.0)	1.2	(7.4)
土師器杯				19	9.2	1.2	7.5	14	(9.4)	1.1	(7.3)
12	(11.9)	2.9	7.4	20	9.2	1.4	7.3	土師器杯			
13	15.0	2.5	11.1	21	9.2	1.3	7.4	15	(14.0)	2.5	(10.6)
578				22	9.1	1.1	6.3	16	(16.6)	3.1	(10.4)
土師器小皿				23	9.2	1.2	7.7	845			
16	9.7	1.1	8.0	24	9.1	1.4	6.5	土師器小皿			
624				25	9.1	1.3	7.1	23	(8.6)	1.2	(5.8)
土師器小皿				26	9.2	1.2	7.1	24	(9.0)	0.9	(6.8)
1	9.8	1.2	7.3	27	9.2	1.3	7.1	25	(9.6)	1.4	(6.6)
上師器杯				28	9.3	1.4	7.1	26	(9.2)	1.5	(7.4)
6-5	(14.4)	3.0	8.4	29	9.2	1.7	7.0	27	(9.6)	1.4	(6.4)
809				30	9.3	1.5	6.3	土師器杯			
上師器杯				31	9.3	1.2	7.5	28	(14.8)	2.7	(10.4)
2	13.2	2.8	8.7	32	9.3	6.7	6.7	859			
810				33	9.5	1.1	6.6	土師器小皿			
土師器小皿				34	9.5	1.2	8.0	29	(9.0)	1.3	(7.0)
1	8.9	1.0	6.9	35	9.5	1.3	7.0				

第3表 出土土器計測表(3)

(括弧内の数値は復元値)

瓦 今回の調査では夥しい量の瓦が出土した。容量28ℓの整理用コンテナで40箱を越える。ここではその中から抽出された軒丸瓦、軒平瓦、完形の平瓦について述べていく。

花卉文軒丸瓦（第63図、図版28）

1は外区と内区の境に圓線をめぐらせ、内区に花と枝葉の文様を配する。扇状の花弁の先端が珠文状をなす。2は半円形の中にほとんど直に開いた花弁の先端が膨らんでいるものの、珠文状にはなっていない。葉は幅広である。3・4は外区と内区の境に圓線ではなく、同範のものである。幹枝は左に傾いている。葉は長く反りが大きい。5は外区と内区の境に圓線をめぐらせる下半の資料で、葉は長く反りが大きく外形を線で表現している。6は扇状の花弁部分の破片で、先端が珠文状をなす。8は全体的に文様の表現が平板で、花弁の先端が膨らみ辛うじて枝葉と区分できるが、枝葉はほとんど区別が付かない。外区と内区の境に圓線をめぐらす。9は外区と内区の境に圓線をめぐらす。4分の1の破片であるため、文様の全体像は不明である。

押圧波状文軒平瓦（第64図、図版28・29） 二重弧目を刺突し波状文とする3～23としない1・2とに大別される。

二重弧目を刺突しない型 1は型引きによる三重弧文軒平瓦（以下、重弧文はすべて型引きによる。）の頸部に指の押圧によるやや左流れの波状文を配し、指の押圧が下一重弧目まで及びゆるい波状をなす。押圧部の布目痕はやや粗い。瓦当と平瓦の接合部は粘土で補強し、強く横ナデされる。平瓦部分は凹面に布目痕、凸面には繩目痕が残り、側面の分割方法とともに平瓦（第65図、図版29）と共にしている。2は三重弧文軒平瓦の頸部に指の押圧による波状文を配し、指の押圧が下～重弧目まで及び波状をなす。押圧部分には布目痕が残る。瓦当と平瓦の接合部は粘土で補強し、強く横ナデされる。

二重弧目を刺突し波状文とする型 さらに指の押圧が下一重弧目まで及びゆるい波状をなす7・10～23と押圧が下～重弧目まで及ばない3～6・8とに分類される。

3は三重弧文軒平瓦の頸部に指の押圧によるやや右流れの波状文を配し、二重弧目を刺突し右流れの波状文とする。波の間隔は8と比べると狭く、刺突は雑である。押圧部分には布目痕はみられず、直接指で押圧したとみられる。瓦当と平瓦の接合部は粘土で厚く補強され、雑に横ナデされる。5が同型式である。4は瓦当部の文様配置は3と共通するが、瓦当と平瓦の接合部の形状が異なる。8は三重弧文軒平瓦の頸部に指の押圧によるやや右流れの波状文を配し、二重弧目を刺突し右流れの波状文とする。押圧部分には布目痕が残る。瓦当と平瓦の接合部は強く横ナデされる。瓦当部完存。6が同型式である。

10～21は三重弧文軒平瓦の頸部に指の押圧による波状文を配し、指の押圧が下～重弧目まで及び波状をなす。二重弧目を刺突し右流れの波状文とする。押圧部分には布目痕はみられず、直接指で押圧したとみられる。瓦当と平瓦の接合部は強く横ナデされる。7・23は三重弧文軒

平瓦の頭部に指の押圧による波状文を配し、指の押圧が下一重弧目まで及び波状をなす。二重弧目を刺突し左流れの波状文とする。押圧部分には布目痕が残る。24は瓦当面のほとんどを欠損している。

平瓦（第65図、図版29）

粘土板橋巻き作りによる。凹面には布目痕、両側縁からそれぞれ9.5cm、7.5cmのところに縱方向縦状の痕跡がみられる。側面は内側から3分の1のところまで鋭利なヘラ状工具を入れ乾燥した後割られている。断面形はほぼ直角である。凸面は縦目の叩打の後、粗く縱方向、次いで横方向に撫で清しているが、縱方向の縦目痕が残る。

軒丸瓦1がM844、軒丸2・軒平9がM003、軒丸3、軒平瓦1・3がM602、軒丸4がM817、軒丸5がM202、軒丸7がM495、軒平2がM816、軒平5・16・19がM624、軒平6がM647、軒平8がM387・M624、軒平10がM335、軒平11がM892、軒平18がM846、軒平21がM226、軒平22がM840、その他が包含層からの出土である。遺構は概ね12世紀中頃から後半にかけての時期のものである。

胎土はいずれも精良で、軒丸瓦3・4・7・8、軒平瓦1～3・7・9・21・22・24・25は堅板に焼成され、青灰色～灰色を呈する。軒平瓦3は特に堅板に焼成されている。他は瓦質に焼成され青灰色～灰色を呈するものが多いが、軒平瓦5・6は土師質に焼成され、明橙色を呈する。

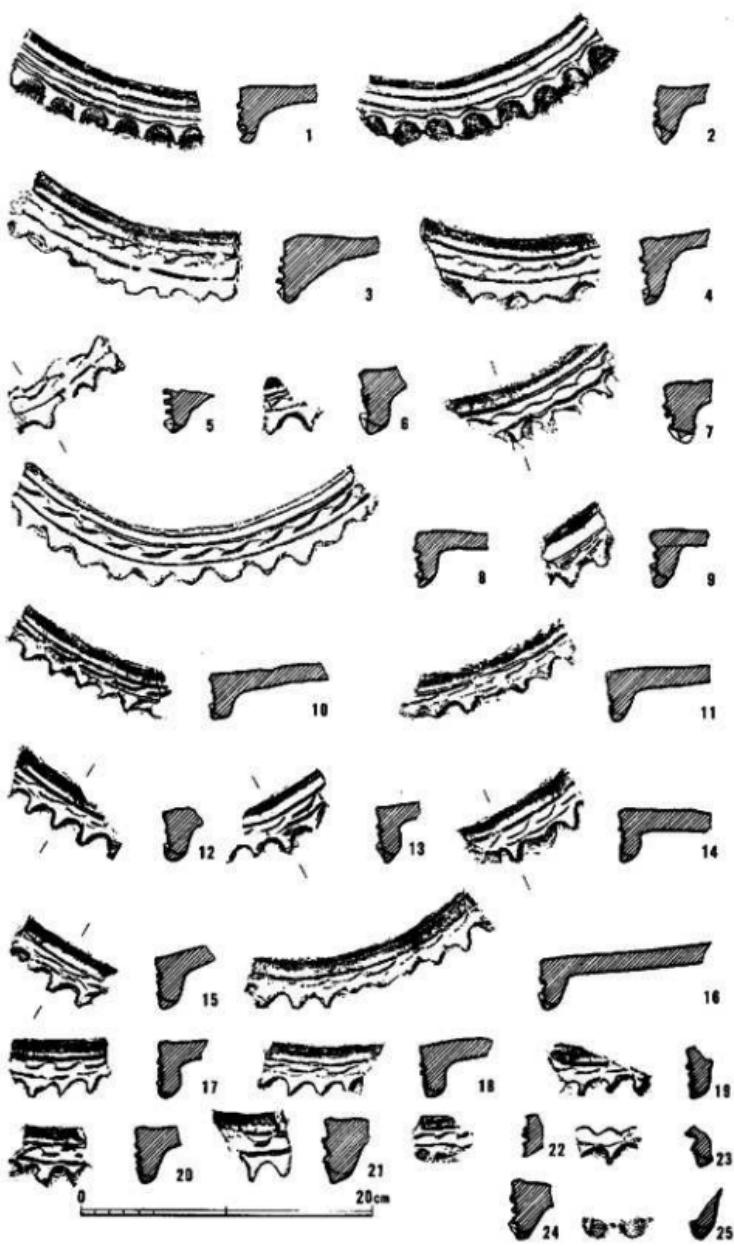
今回の調査では12世紀中頃から後半にかけての遺構、包含層から夥しい量の瓦が出土した。押圧波状文軒平瓦は博多を中心に福岡平野のはば全域に分布している。博多遺跡群の他に、柏原郡柏原町戸原麦尾遺跡、福岡市東区香椎A遺跡、箱崎遺跡、太宰府市太宰府天満宮、下山門大谷瓦窯での出土例がある。下山門大谷瓦窯出土のものは高野狐鹿氏の採集によるもので、一見して瓦窯と見なしうる遺構から出土したのか、あるいは遺物を採集した一帯に窑跡等が散布していたのかといった出土状況等詳細は不明である。花卉文軒丸瓦は博多の他、箱崎遺跡、早良区天福寺跡での出土例がある。箱崎遺跡は先の仁平の大追捕の記事にみられるように花卉文軒丸瓦・押圧波状文軒平瓦が出土する遺構の時期には博多と同様に多くの宋商人が居住していた。天福寺跡での出土のものは採集資料である。花卉文軒丸瓦・押圧波状文軒平瓦は瓦当文様が我が国において他に類を見ないものであり、出土した遺跡の性格から宋商人との関係を指摘することができよう。軒丸瓦の瓦当面に施された花卉文は、国内にその原型を求めるることは難しくむしろ中国から流入する陶磁器に施された花卉文に類似点が多く見出すことができる。宋の技術者の指導のもと博多近辺で生産されたのか、もしくは宋で生産された現物が流入したのか、工房、瓦窯等の生産遺構の実体は全くの不明である上に、瓦が葺かれたであろう建造物の遺構は未検出である。

これらの瓦が出土する遺構と同時期の中国での類例をみていくと、河南省洛陽市鞏県宋太祖

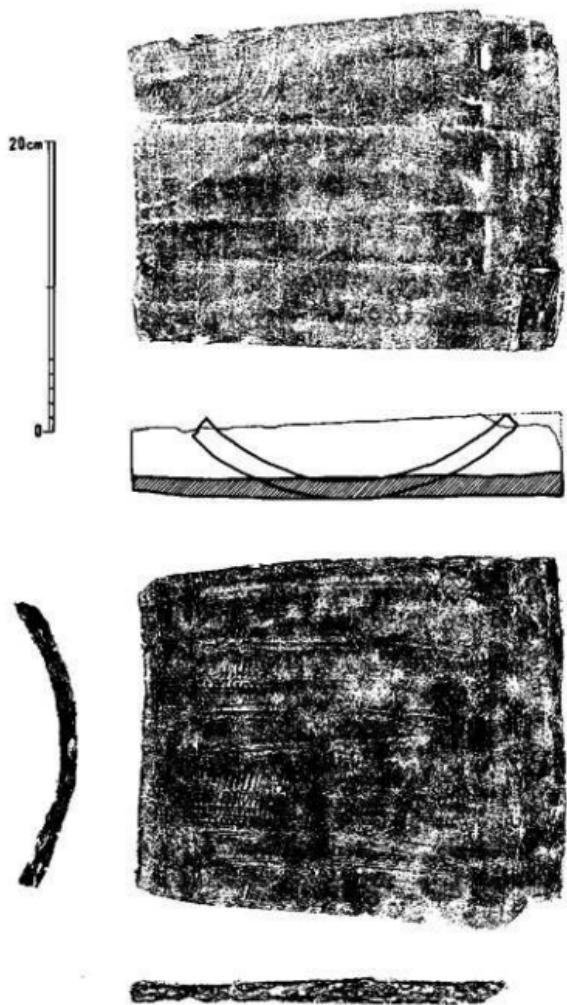


第63図 花卉文軒丸瓦実測図(1/4)

陵〔977（北宋 太平興國2年）付近、河南省登封県嵩岳寺（北宋から金代にかけて改修を受けている。）で押圧波状文瓦の出土が報告され、山西省五台県仏光寺文殊殿〔1137（金 天会15年建立）には現在もなお押圧波状文瓦が葺かれている。もっとも、博多と密接な関係をもった地域、宋商人が日本へ向けて多くの物資を積み出した寧波、泉州の背後にひかえる浙江・福建省周辺域について、瓦に関する情報はほとんど不明である。博多周辺でみられる周辺域とは全く系統を異にするこれらの瓦の出現が、現物の流入によるのか、指導的役割を持った工人の渡来によるのか、流入経路を探る上で浙江・福建省周辺域での瓦生産のあり方は非常に興味深い問題である。



第64図 拼压波状文軒平瓦実測図(1/4)



第65図 平瓦実測図(1/4)

4. その他の遺物

1) 金属製品

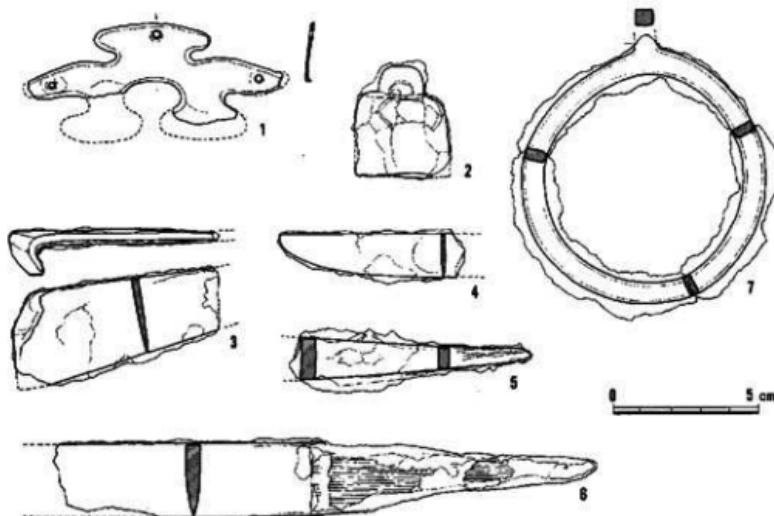
〔第66図、図版30〕

銅製品は41点出土しているが、うち35点は銅錢である。これについては後述する。煙管の吸口、棒状製品、飾り金具がある。

1は雲を形取ったものであろうが、薄手の板で作られた飾り金具である。表面には金箔が部分的に認められる。釘穴が3ヶ所にある。下の2ヶ所を欠損している。F-1区包含層3層から出土である。

鉄製品は合計で160点ほど出土しているが、そのうち140点は釘である。その他の製品には短刀、鎌、刀子などがあるが、形状から推定できないものもある。以下代表的なものを図示した。

2は鉄製の吊り鐘形の分銅（權）である。鋸が激しく、表面も腐食が激しいため、表面の模様やつまみの穴の形状がよくわからない。重量は115gである。第530号土壙から出土した。3は鍊である。先端の半分を欠損している。柄の装着部は折り返している。4は刀子の切っ先である。3とともに第3号溝からの出土である。5は用途不明の鉄製品である。やや内曲がりの断



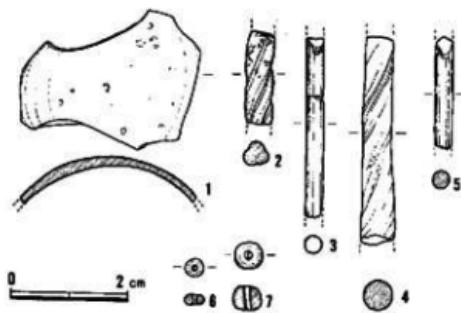
第66図 金属器実測図(1/2)

面長方形を呈する。鋸落としの際、表面に金が付着しているのが発見された。おそらく革や布などに付いていたものがそのまま鉄器自身に着いたものと考えられる。鉄器を巻くような薄い錆が付着している。第810号土壙より出土した。6は短刀である。柄には本部が付着している。先端を欠損している。第538号土壙より出土した。7は3号清から出土した環状の鉄製品である。断面形は長方形である。環に繁げられた柄？は断面が正方形に近い。環の直径は8.5cmである。

2) ガラス製品

〔第67図 1～7、図版30〕

1はコバルトブルーの容器の破片である。丸い湾曲した器壁をもつ。厚さは1～1.7mmである。気泡や不純物が混じる。479号土壙から出土した。2～5はガラス棒である。2と4はねじりが認められ、コバルトブルーに白が縞状に混じる。5はコバルトブルー、3は薄いブルー色をしている。2は第512号土壙、3は第244号土壙、4は包含層、5は809号土壙から出土した。6と7はガラス玉である。色はどちらも淡いコバルトブルーである。直徑はそれぞれ、3.1mmと4.6mmである。いずれも包含層からの出土である。

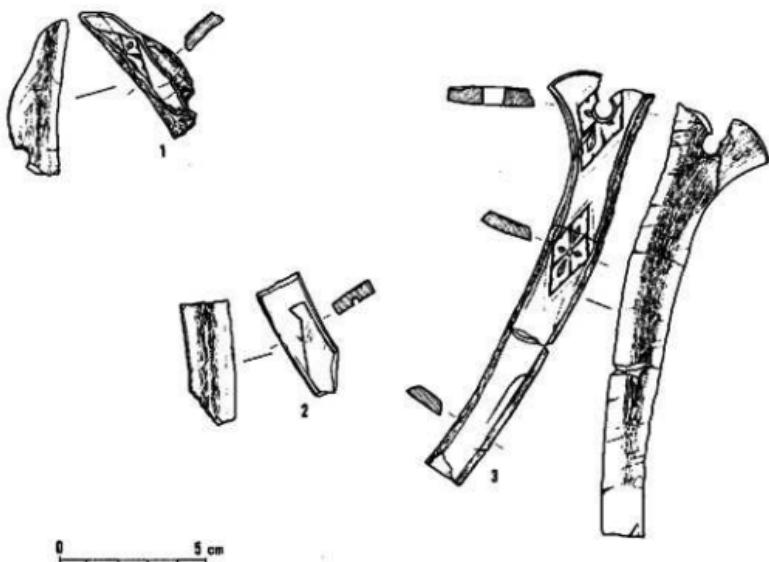


第67図 ガラス製品実測図(1/1)

3) 角製品

〔第68図 1～3、図版30〕

1～3は第2号土壙上部の炭層から出土した鹿角製の鍔形の破片である。火を受けて白色に変色し、ひびが入る。鹿角の幹から枝角へ分岐する部分を板状に切り、彫刻を施したものである。全体の形を知りうるものがないため、1と3で全体形を推定したが、1・2が別個体としても、3とはシンメトリーな装飾を施していない。装飾は花菱文で、1では先端に、3では又の部分と中央に配置されている。3は4個体に分れて出土した。根本に近づくにつれて幅と厚さともに減する。花菱は少式氏と大内氏が使用した家紋であるが、時期的には前者の時期である。実用品として使用されたかは、不明である。



第68図 鹿角製歎形実測図(1/2)

4) 土製品

〔第69図 1～3、図版30〕

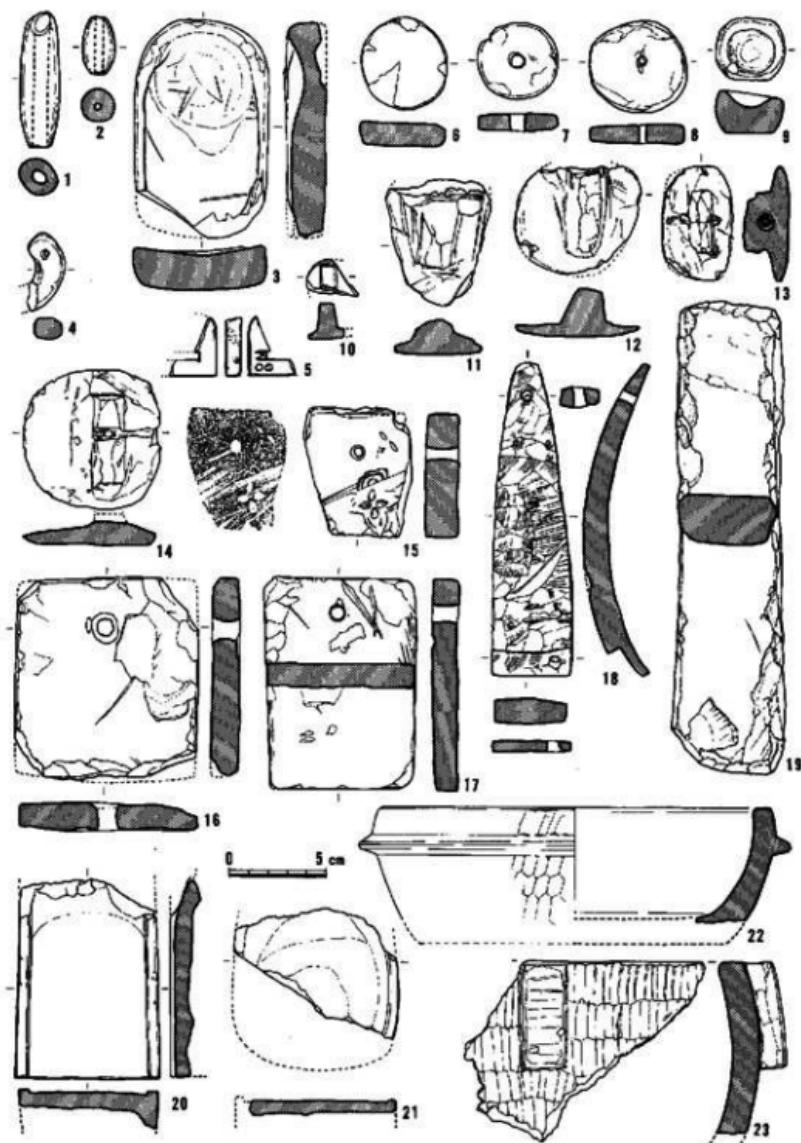
1と2は土製の環状土錘である。それぞれ8gと26gである。第300号土壙と第244号土壙から出土した。土錘はこれを合わせて3点と、極めて少ない。

3は瓦の破片を再利用したと思われる硯である。断面をみると反りがあり、硯面が瓦の裏面に相当する。海と陸は削り出しており、その際刻線で目印としている。J-5区包含層3層から出土した。

5) 石製品

〔第69図 4～23、図版30〕

4は滑石製の勾玉である。下端を破損している。第5層から出土しており、奈良から古墳時代にかけての所産であろう。5は黒色の石材を用いた丸柄である。半分以上を欠損している。中央下寄りに長方形の穴をあける。裏面には下隅に直径3.5mm、深さ2mmほどの穴を2つ穿っている。表面は磨きが丁寧で、光沢がある。H-5区包含層3層から出土した。6～8は滑石製の



第69図 土製品・石製品実測図(1/3)

紡錘車とその木製品である。6はまだ孔が穿たれていない。9は滑石製の小型容器である。6は第816号井戸から、7と8はF-4・5区の第5面で約80cmの距離をおいて出土したものである。10~14は滑石製石鍋を再利用したこて状の石製品である。いずれも把手の部分に孔を穿っているが、10と13には針金が残ったままである。10が第550号土壙、11が第379号土壙から出土した以外は包含層と擾乱からの出土である。15は滑石製の石鍋を再利用した製品であるが、中央上部より小さな孔がある。また右隅にも孔の痕跡がある。外面には花の文様を刻んでいる。温石か。包含層より出土した。16と17は温石である。一部に煤が付着した面があり、いずれも石鍋の再加工の可能性が高い。H-3区包含層3層から出土した。18は第107号土壙から出土した滑石製の石鍋を再加工した石製品である。瓦三角形の両端に孔がある。下端は段を付けて薄くしており、その形状から用途の推定は困難である。19は白黄色頁岩製の砥石である。第243号土壙から出土した。20と21は硯の破片である。いずれも赤間石（紫色凝灰岩）を使用している。20は先端がやや狭まる長方形、21は風字状の形態である。20はF-4区包含層3層、21は第626号土壙から出土した。22と23は滑石製の石鍋である。石鍋はパンコンテナ1箱ほどの量が出ているが、その大きさを復元できるのはほとんどない。このため代表的な2点を図示した。22は鰐付タイプの石鍋で、口径29.4cm、器高9cmほどに復元できる。23は把手型の支えをもつタイプで、このタイプはこれを合わせて2点のみである。22は第576号土壙、23が第816号井戸から出土した。

この他、滑石製石錠2点や埴杖球2個などが出土している。

6) 銅錢

〔第70図、図版30〕

銅錢は合計で35枚出土している。博多遺跡群における一つの調査地点の出土枚数にしては少ない方であろう。その内訳は、皇朝十二銭1枚、唐銭2枚、北宋銭20枚、江戸時代の銭2枚、明治時代の銭3枚、不明7枚で、その8割が北宋銭である。

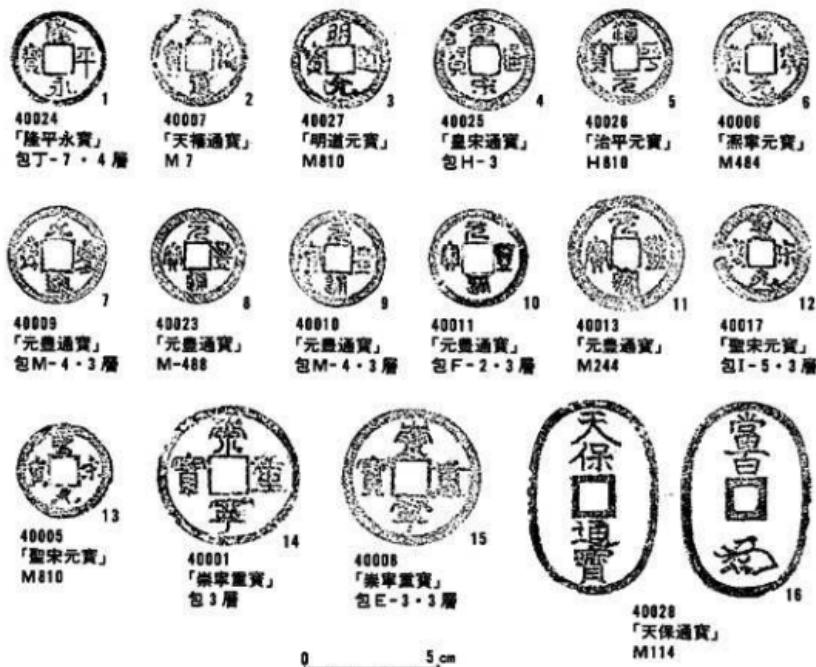
皇朝十二銭は隆平永寶（初鑄796年）で、博多では2枚目の出土例である。

唐銭はいずれも開元通寶（初鑄621年）である。

北宋銭は天禧通寶（初鑄1017年）1枚、明道元寶（初鑄1032年）1枚、皇宋通寶（初鑄1039年）2枚、治平元寶（初鑄1064年）1枚、熙寧元寶（初鑄1068年）1枚、元豐通寶（初鑄1078年）6枚、元祐通寶（初鑄1093年）2枚、大觀通寶（初鑄1107年）1枚、聖宋元寶（初鑄1101年）3枚、崇寧重寶（初鑄1104年）2枚である。うち11は折二銭、14と15は当十銭である。

江戸時代の銭は寛永通寶（初鑄1636年）1枚と天保通寶（初鑄1847年）1枚である。天保通寶の出土はきわめて珍しいことであろう。

明治の銅貨は明治13年半銭銅貨、明治7年と14年の一銭銅貨である。



第70図 出土銅錢拓影(2/3)

南宋錢と明錢の出土がまったくないことは、この調査地点の遺構の時期を反映しており、興味深い。

東桜木吉一 1992「薄多造寺群の出土銅貨」『法吹録』第1号 薄多造寺群

7) 漆製品

〔第71図、図版30〕

第71図は第20号井戸の井戸枠内から出土した漆器椀の漆膜である。生地は残っていなかった。6×7 cmほどの断片で、茶色味を帯びた黒漆の地に赤漆で地画とそこに生えた草を描いている。その時期は出土陶磁器から12世紀後半から13世紀初頭に求められる。



第71図 漆膜実測図(1/2)

5. 博多遺跡65次調査出土土器に付着した赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田 光子

706号、730号土壌出土甕の破片R1072とR1177（第12図・12）の内面に付着している赤色顔料について、その種類と状態を明らかにするために顕微鏡観察とX線分析を行った。赤色顔料の分析結果とそれにより推定される赤色顔料の種類を表に示した。

試料

土器内面に赤色が薄く残っているのだが、赤色顔料の粉が単に付着しているというではなく、磨り込まれたように密着し、光沢がある。外面には煤が厚く付着している。X線分析には土器破片をそのままで測定した。検鏡用には針先に着く程度を採取し、プレバラートを作成した。

顕微鏡観察

土器片のまま実体顕微鏡により観察した所、赤色部分の表面は摩滅した状態で、顔料の粒子は認められない。光学顕微鏡により反射光・透過光40~400倍でプレバラートを検鏡した所、朱かと思われる粒子をわずかに認めたが、大半の粒子は非常に細かいために赤色顔料の種類を判断することができなかった。R1177外面にも煤の中に赤色の微粒子が認められるが、これについてもその種類の判断はできなかった。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として次の条件で土器片内外面の測定を行った。測定は宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏による。装置：理学電機工業製蛍光X線装置、X線管球：クロム対陰極、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーションカウンター、印加電圧－印加電流：35KV-15mA、走査速度：268°/分、時定数：0.5秒

赤色の由来となる主成分元素として両者とも内面からは水銀、鉄が検出された。外面は、R1072からは鉄が、R1177からは水銀と鉄が検出された。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として胎土部分に由来するものと考えられるので表では省略した。但し鉄は胎土部分にも必ず含まれ、顔料の採取を行わない今回の分析では赤色顔料由来のものとの区別は困難である。X線強度から見て鉄は胎土に由来するものと考えられ、赤色顔料の主成分元素は水銀と推定される。なお、R1177は外面の黒色に見える部分にも水銀が含まれていると考えられる。

X線回折

赤色、黒色の由来となる鉱物成分の検出を目的として土器片の内外面を次の条件で測定を行った。装置：理学電機製文化財測定用X線回折装置、X線管球：クロム対陰極、フィルター：バナジウム、検出器：シンチレーションカウンター、印加電圧－電流：25kV-10mA、発散スリ

ット；0.34°、受光スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4 mm、走査速度；264°/分、時定数；2秒

両者とも内面からは、赤色の出来となる主成分鉱物として辰砂（赤色硫化水銀）が同定された。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として胎上部分に由来するものと考えられるので、表では省略している。R1177については土器外面から蛍光X線分析で水銀が検出されているため、黒色部分が黒色のメタ辰砂（立方晶系）によるものかどうか注意したが、今回の測定ではメタ辰砂は同定できず、赤色の辰砂が同定された。

試料	顕微鏡観察	蛍光X線分析	X線回折	赤色顔料の種類
706土壙 R1072内面	朱？	水銀・鉄	辰砂	朱
706土壙 R1072外面		鉄		
730土壙 R1177内面	朱？	水銀・鉄	辰砂	朱
730土壙 R1177外面	朱？	水銀・鉄	辰砂	朱

表 赤色顔料の分析結果と赤色顔料の種類

まとめ

以上の結果から、土器片内面（R1177は外面も）に付着している赤色顔料は主成分元素が水銀、主成分鉱物が辰砂である「朱（硫化水銀HgS）」である。

本例と同じような朱付着土器は、弥生時代後期中頃から古墳時代（4 c前半）に認められる。これらに共通する特徴は①土器内面に朱（赤色硫化水銀HgS）が残り、②赤色顔料粒子が単に付着しているというのではなく磨り込まれたように密着し光沢があり、③外面には著しく煤が付着するものが多いことである。

博多遺跡群では50次調査で、4 c前半の住居跡から朱の付着した棒状石杵と共に片口付きの内面朱付着甕が出土した。また、本調査と近接する59次調査では、鐵素材、鍛造鉄片、湯玉、石製の鏟等の鍛冶に関連すると考えられる遺物を出土する住居跡から、内面朱付着小型甕が出土している。本例R1072が出土した706号土壙も、鍛冶炉の轍の羽口や楕円形鐵滓が供伴している。

この手の朱付着土器は、単なる赤色顔料としての朱製造に用いられたものではなく、朱を主成分とした「仙薬」の製造に関わる土器と考えられる。^{*}須佐永田遺跡出土例について青銅器生産に伴う祭祀に関わる遺物と推定されている。「仙薬」の製造が祭祀行為であるかどうかは別の問題としても、少なくともそれまで主として墳墓だけから出土していた「朱」が、弥生時代後期の中頃以降は住居跡等からも出土するようになったこと、4 c前半には鐵器生産に関わる遺物と供伴することに大きな意味を認め、今後の類例に期待したい。

* 第348集の赤色顔料の項に詳述

第五章 まとめ

古代

奈良時代掘立柱建物群 今回の調査では8世紀中頃の掘立柱建物2棟検出することができた。2棟ともにはは真北に方位をとる。梁間2間、桁行4間の東西棟の707号掘立柱建物は梁間の全長4.2m、桁行の全長7.2m、柱穴の径は1m前後を測り、梁間2間、桁行4間の東西棟、総柱の739号掘立柱建物は梁間の全長3.7m、桁行の全長4.2m、柱穴の径は1m前後を測る。柱間の距離は1.8m、2.1mと一定の規格に測っている。建物の南6mでは同時期の井戸を1基を検出した。井戸からは「ト」、「匁」(人偏の文字)「隅」の墨書きをもつ須恵器が出土している。今回の調査区周辺域における古代の遺構の広がりを追ってみると、当第65次調査区域の北西120mの第36次調査区域では南北に並ぶ二個の大きな柱穴が検出され、径40cmの柱痕跡から和同開珎が出土している。第65次調査区域から西へ約300mの第63次調査区域では奈良時代の柱穴、井戸、木棺墓、10世紀代の堅穴式住居が検出されている。今回の調査区域の北側に隣接する第25次調査では11世紀前半の土壙墓が検出されている。

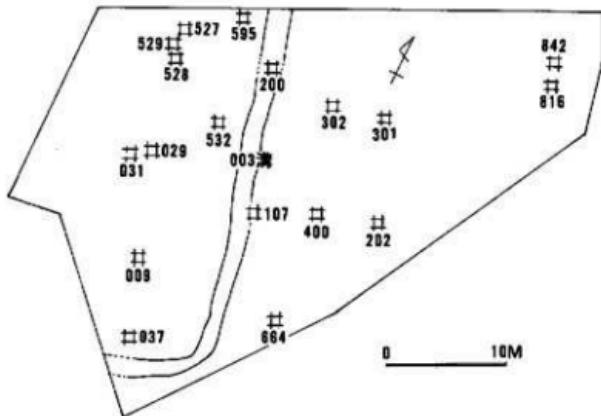
中世

12世紀中頃以降の陶磁器の変容 先に述べた通り、今回の第65次調査区周辺の博多遺跡群祇園地区では11世紀後半から12世紀前半の遺構が稀で、12世紀中頃から14世紀にかけての遺構が多くみられる。12世紀中頃から後半にかけて、白磁碗ではII・IV類にかわってV・VII・内底見込みに輪状の搔き取りがあるVIII類が多くみられるようになり、青磁では内面に畫花文を施した龍泉窯系、同安窯系の碗、皿が出現し、その比率にはそれほどの差はみられない。11世紀後半から12世紀前半においては量、質の上で他の地域を圧倒する勢いであった博多遺跡出土の輸入陶磁器であったが、12世紀中頃以降の遺構から出土する輸入陶磁器は、量、質の上で他の地域を大きく凌駕するまでには至らない。文献の上から当時の博多をみると、1151年には大宰府官人による仁平の宮崎・博多の大追捕の際、多くの宋商人の資材が收奪され、一時的な疲弊はあったとはいえ、12世紀中頃から後半にかけては平家隆盛の時代であり、続く13世紀には聖福寺、承天寺が建立されるなど、対外交渉の上では、以前にもまして隆盛の時期を迎えているはずである。博多遺跡群の発掘調査がすべて開発に伴うものであり、現在の本通り沿いに偏っていることから、今までの調査成果をもって結論づけるのは時期尚早であろう。13世紀後半以降にみられる高台先端を除いて全面に厚く施釉された龍泉窯系青磁III類は博多遺跡群では出土例が少ないところであるが、今回の調査では続く13世紀から14世紀にかけての遺構から、博多遺跡群に限らず、周辺の村落でも普遍的にみられる鎬蓮弁の龍泉窯系青磁碗、口禿の白磁などの輸入陶磁器がほとんど出土していない。001・244号土壙出土の土師器の中に丸味をもった体部から口縁部が外反し、端部が覗く仕上げられた平底の一群がみられたが、それらの一群は器形、法

量の上で口禿の白磁皿の模倣型と見なされよう。001・244号土壙は土師器小皿・杯を大量廃棄した土壙であり、都市を定義する要素の一つ「大量消費」の痕跡である。白磁皿の模倣型土師器と同様に、周辺域の村落ではほとんどみられない都市博多特有のものである。大量に破棄された土師器小皿・杯を使用した都市の住人は輸入陶磁器を日常的に用いたであろうが、例えば饗宴の後で上師器を一度使用しただけで使い捨て出来たにせよ、輸入陶磁器までは土師器同様に湯水のように大量に消費、破棄できず、その代替品として白磁皿の模倣型土師器が出現したのではないだろうか。

溝と井戸からみた町割り G・F区を南北に走り、F-11区で西に屈曲する003号溝は方位をN-15°Wにとり、延長33m検出した。底面の標高が北端で2.3m、南端で2.5mを測り、その間の距離からすれば、傾斜はないに等しい。今回の調査区域の北側に隣接する第25次調査検出のS D01溝の延長に相当する。第25次調査 S D01溝は南北7m検出され底面の標高は2.5mを測る。第25次調査検出分に今回の調査検出分、両調査区間の距離7mを加えると総延長47mに達し、底面の標高はほぼ一定している。溝の土層断面を観察する限りは、下層では砂層中に風成状の薄い層が幾重にも堆積し、水が流れた痕跡はほとんどみられない。溝から出土した遺跡を検討してみると時期差はそれほどなく、溝が開墾後ほどなくして埋没した様相を呈する。

今回の調査で検出された井戸のほとんどは、12世紀後半から13世紀前半にかけてのもので占められる。調査区の西側で検出した井戸は擾乱層直下で検出され、造構出土遺物からの所見による。造構の切り合い関係などからそれらの前後関係をつかむことができが、出土遺物を見るかぎり大きな時期差は見出しえない。第72図に12世紀後半から13世紀前半にかけての井戸の配置



第72図 井戸の分布(12世紀後半～13世紀前半)(1/500)

図を示すが、それらは003号溝と同じ方位をとってほぼ整然と配されている。井戸間の心々距離は東西4.5m、南北9.0mを取るものが多い。建物、区画を示す塀、柵等の検出はみられなかつたが、井戸の配置から東西4.5m、南北9.0mの短冊形の区画を最小単位とする町割りが想定されるのではないだろうか。

参考文献

中世の博多に関して

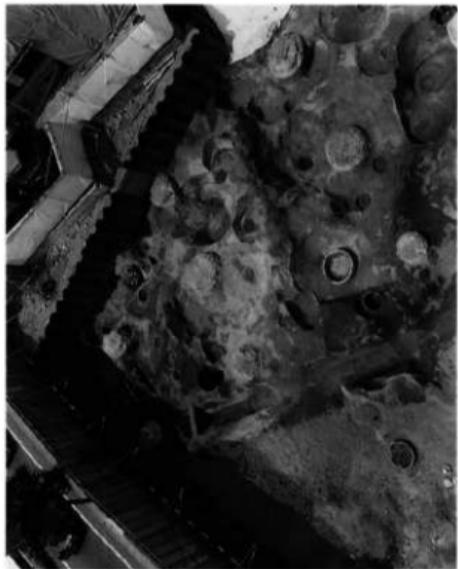
- 川添昭二著 1980 「中世九州の政治と文化」 文獻出版
- 中山平次郎著・岡崎敬校訂 1984 「古代の博多」 九州大学出版社
- 川添昭二編 1988 「よみがえる中世(1) 東アジアの国際都市博多」 平凡社
- 亀井明徳 1987 「唐・新羅商人の来航と大宰府」 土川直鎮・石井正敏編 (『平安文化の開花』
ぎょうせい)
- 朝日新聞福岡総局編 1989 「海が語る古代交流」 草書房
- 博多研究会編 1992 「法哈壁」 第1号
- 宮本雅明 1989 「空間志向の歴史」 (高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 I 空間』
東京大学出版会)

博多周辺の中世の瓦磚に関して

- 常松幹雄 1987 「造瓦技法に関する一研究、平瓦、軒平瓦における押圧技法の分布と展開」
(『東アジアの考古と歴史』上 同朋社)
- 竹岡勝也 1934 「西油山天福寺」 (『史跡名勝天然記念物調査報告書』第9輯 福岡県)
- 栗原和彦 1989 「福岡平野における中世瓦磚の需要について」 (『生産と流通の考古学』
横山浩一先生退官記念事業会)

報告書作成にあたって以上の著書・論文を主として参照した。文中の陶磁器の分類は、横田
賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」 (『九州歴史資料館研究論集
4』) に掲った。

図 版



3. I区南半(北から)



4. I区南半(東から)



1. I区全景(東から)



2. I区北半(東から)



1. II 区 I 面全景 (東から)



2. II 区注穴群 (東から)

3. II 区 II 面全景 (東から)



4. II 区 III 面全景 (東から)



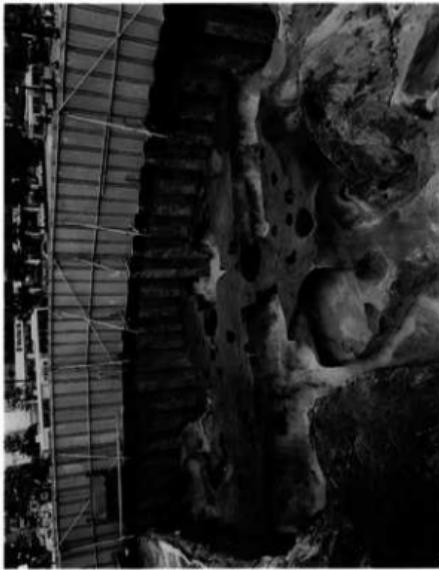
3. II区V面北半(西から)



1. II区V面全景(東から)



2. II区V面全景(西から)



1. Ⅱ区Ⅱ面全景（西から）



2. Ⅲ区Ⅲ面全景（西から）

3. Ⅲ区Ⅳ面全景（西から）



4. Ⅲ区北側Ⅲ面（西から）



3. 703号竪穴住居遺物出土状況（裏から）



703号竪穴住居（裏から）



1. 704号溝土管（北から）



704号溝土管（北から）



1. 730号方形周溝墓 (北から)



2. 769号墳 (西から)

3. 706号土塚 (西から)



4. 706号土塚輪形漆輪羽口出土状況 (西から)



1. 706号土器出土状況（北から）



2. 706号土器出土状況（西から）



3. 706号土器完掘状況（西から）

4. 731号獨立柱建物（北から）



3. 739号振立柱建物（北から）



4. 700号井戸（西から）



1. 707号振立柱建物（南から）



2. 707号振立柱建物（西から）



6. 003号溝 (北から)



5. 003号溝土層 (北から)



4. II区土層 (北から)

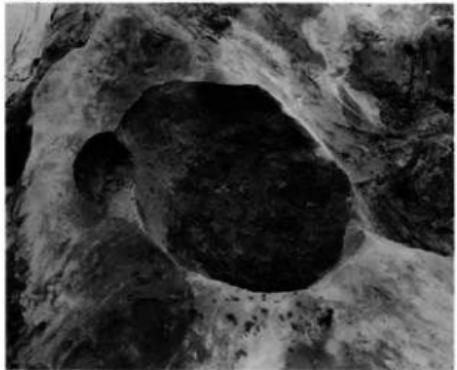
3. 003号溝 (北から)

2. 243号遺構 (北から)

1. 243号遺構 (南から)



図版10



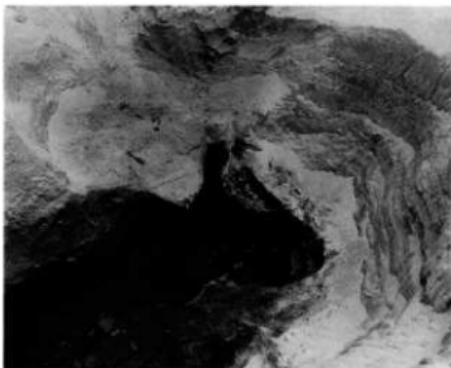
1. 004号井戸（西から）



2. 004号井戸枠（北西から）



3. 006・007・008号井戸（西から）



4. 006・007号井戸（北東から）



5. 008号井戸枠（南から）



6. 009号井戸（南東から）



1. 009号井戸枠（南から）



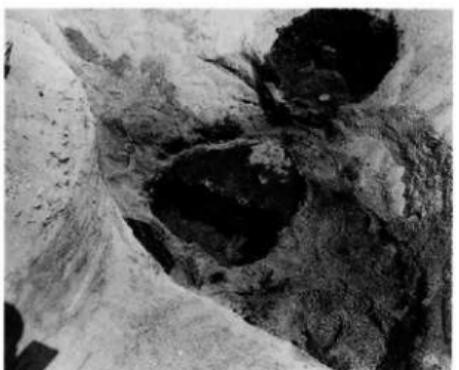
2. 010号井戸（東から）



3. 010号井戸枠（南から）



4. 012・013・014・015号井戸（北から）



5. 012号井戸枠（北西から）



6. 013・048号井戸枠（南から）

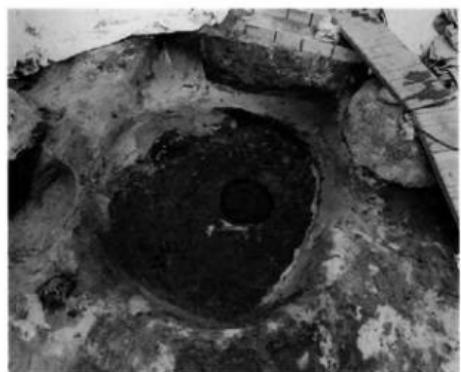
図版12



1. 014号井戸枠（西から）



2. 015号井戸枠（西から）



3. 020号井戸（東から）



4. 020・049号井戸枠（南から）



5. 025・026・028・029・030・031号井戸（北西から）



6. 025号井戸（北東から）



1. 025号井戸枠（北東から）



2. 027号井戸枠（南から）



3. 029号井戸枠（北東から）



4. 029号井戸枠遺物出土状況（北から）



5. 031号井戸枠（北から）



6. 037号井戸（西から）

図版14



1. 037号井戸枠（西から）



2. 107号井戸枠（西から）



3. 200号井戸（北から）



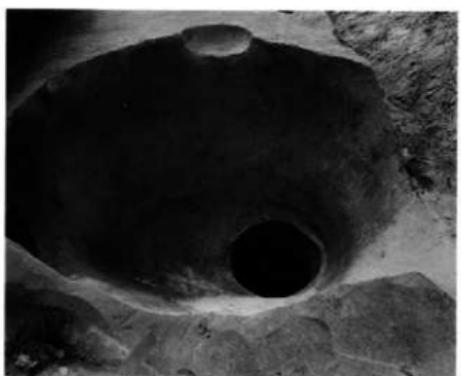
4. 200号井戸枠（西から）



5. 202号井戸（北から）



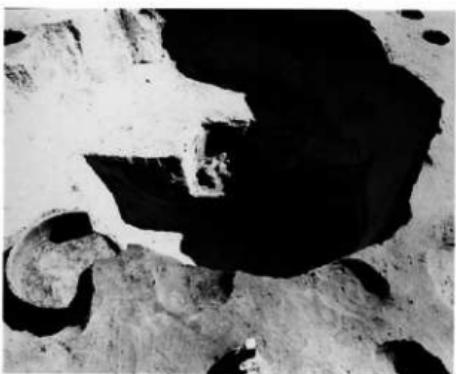
6. 301号井戸（北から）



1. 301号井戸枠（東から）



2. 400号井戸（北から）



3. 400号井戸枠（北から）



4. 527・528・529・621号井戸（西から）



5. 529号井戸枠（東から）



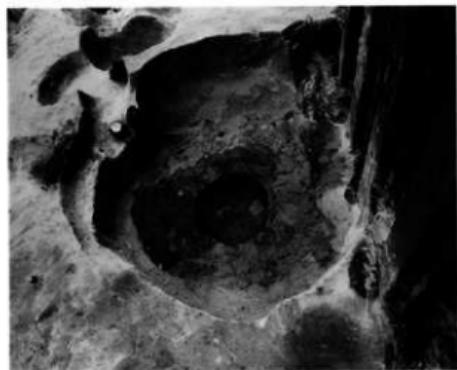
6. 527・528・529・621号井戸枠（西から）



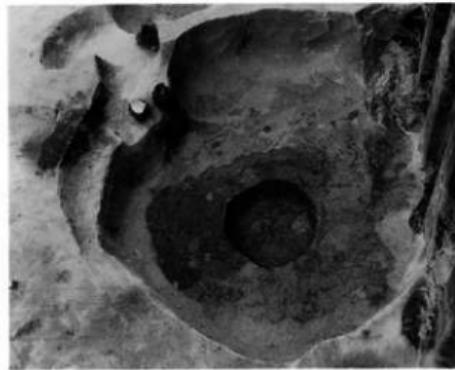
1. 527号井戸枠（南から）



2. 532号井戸（北から）



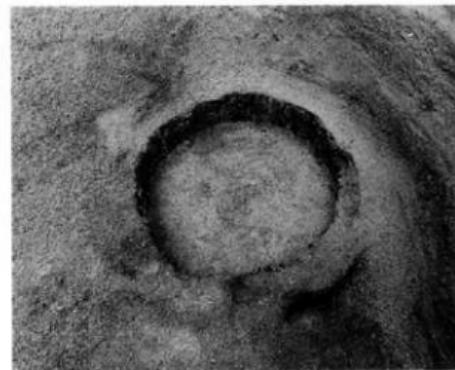
3. 595号井戸（東から）



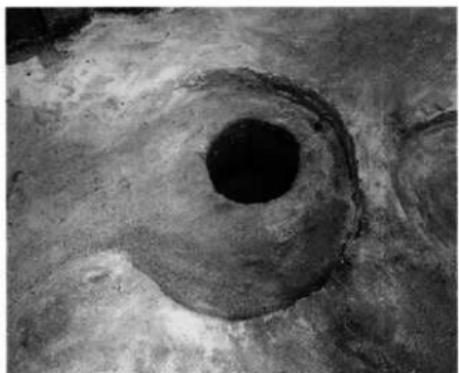
4. 595号井戸枠（南から）



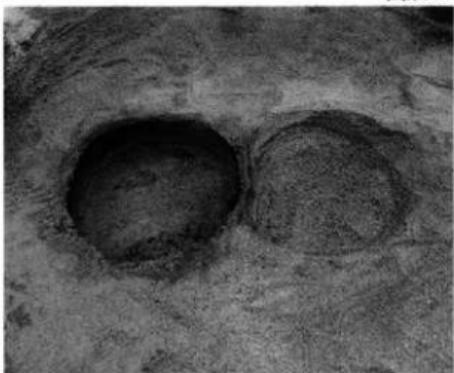
5. 621号井戸土層（西から）



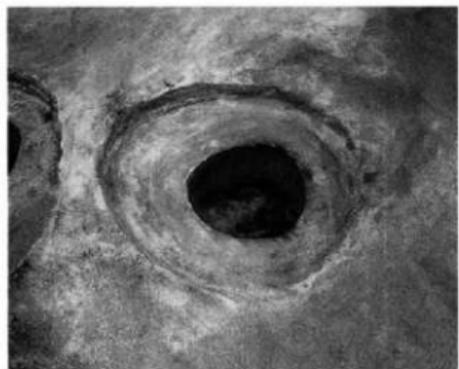
6. 621号井戸枠（西から）



1. 644号井戸（北から）



2. 660号井戸（南から）



3. 663号井戸（北から）



4. 663号井戸枠（北から）



5. 664号井戸枠（北から）



6. 842・859号井戸（南から）

図版18



1. 001号土壤（南から）



2. 017号土壤（南から）



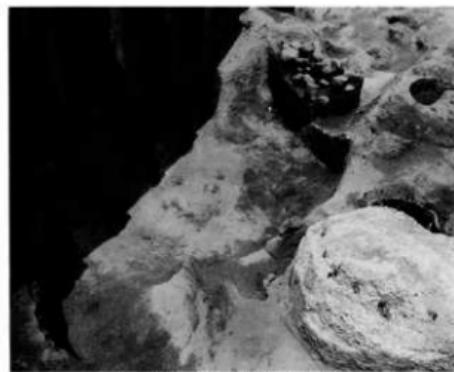
3. 018号土壤（南から）



4. 019号土壤（南から）



5. 021・022・023・024号土壤（北東から）



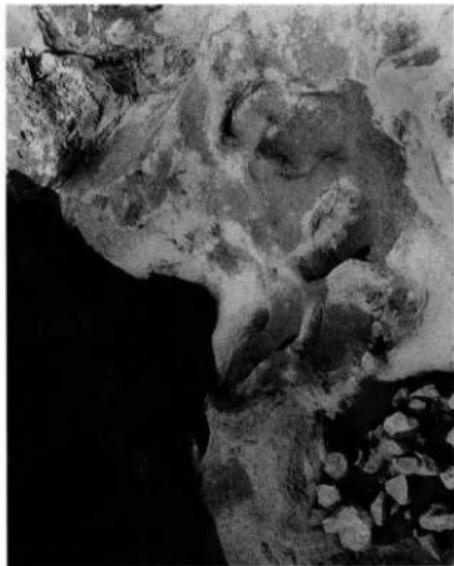
6. 002・032号土壤（南から）



3. 102号土塚土層（北から）



4. 302号土塚土層（北から）



1. 033・034・035・036号土塚（東南から）



2. 244号土塚（南から）



1. 486号土壤墓（北から）



2. 597号土壤（東から）



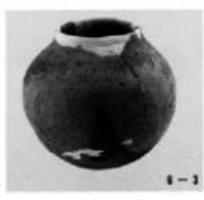
3. 478号木棺墓・597号土壤（北から）



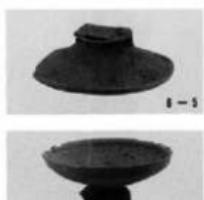
4. 810号土壤（南から）



(1) 第764号溝出土遺物



1-2



1-5



1-6

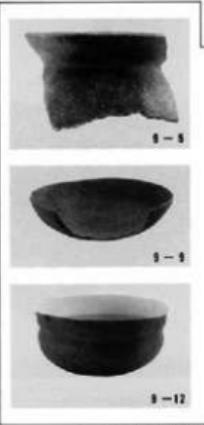


9-2

9-1

9-3

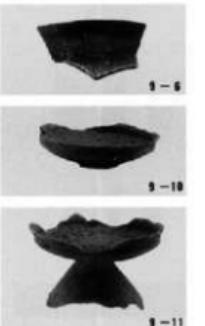
9-4



9-5

9-9

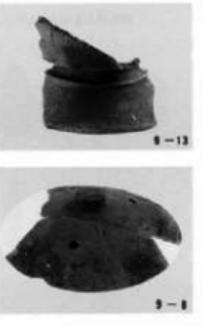
9-12



9-6

9-10

9-11

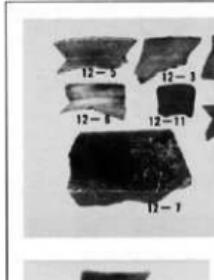


9-13

9-8

(2) 第783号住居出土遺物

(3) 第727号住居出土遺物



12-5

12-8

12-11

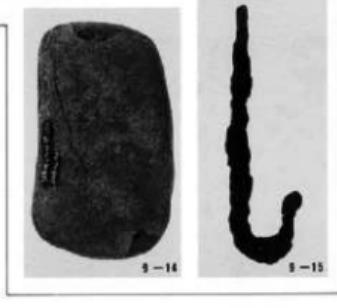
12-7

12-1

12-1

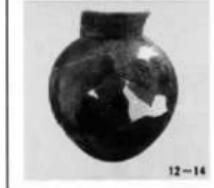


12-16

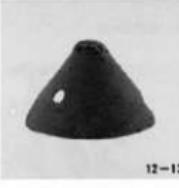


9-14

9-15



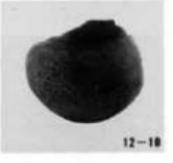
12-14



12-13



12-9

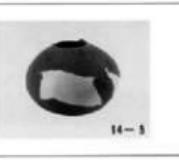


12-18

(4) 第706号土壙出土遺物



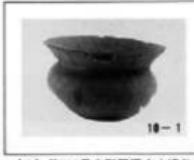
14-2



14-3



14-4



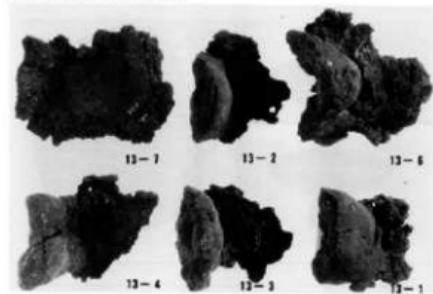
18-1

(5) その他の遺構出土遺物

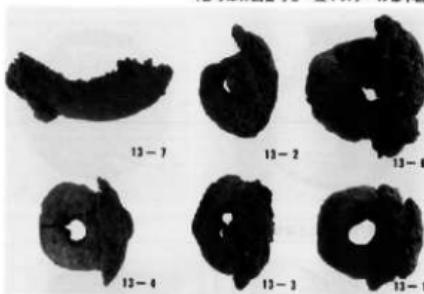
図版22

第705号土塙出土鐵冶開遺物

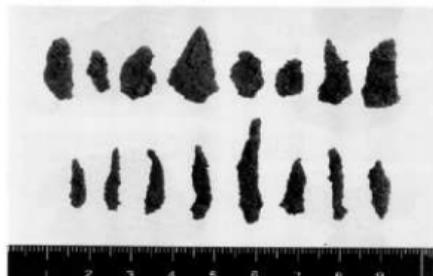
(番号は採回番号と一致: スケールは不統一)



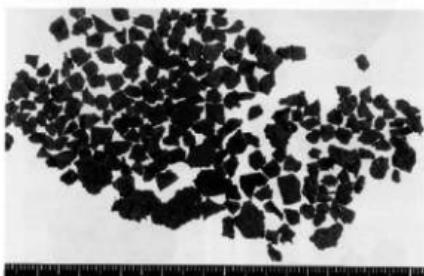
(1) 瓶形津と模羽口(上面)



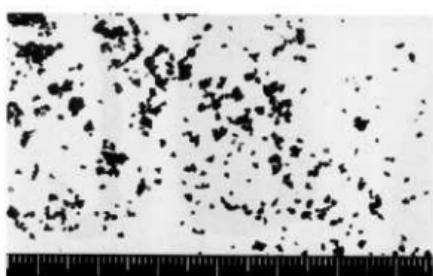
(2) 瓶型津と模羽口(正面)



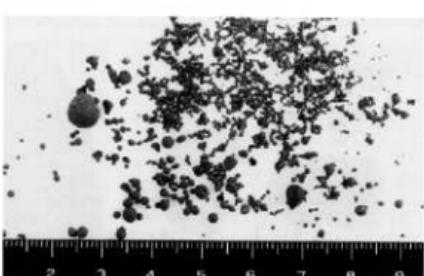
(3) 鋼練鐵造製片(大)



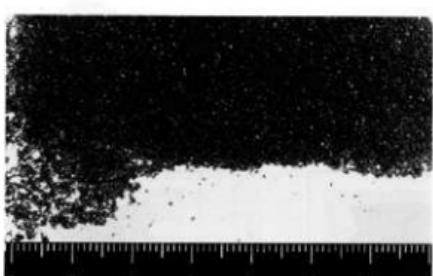
(4) 鋼練鐵造製片(中)



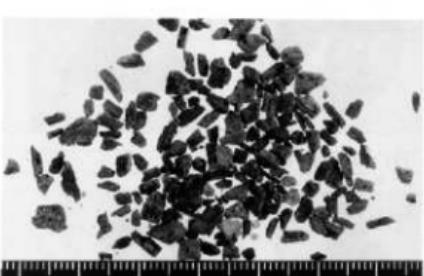
(5) 鋼練鐵造製片(小)



(6) 鋼練粒状津



(7) 沙鉄

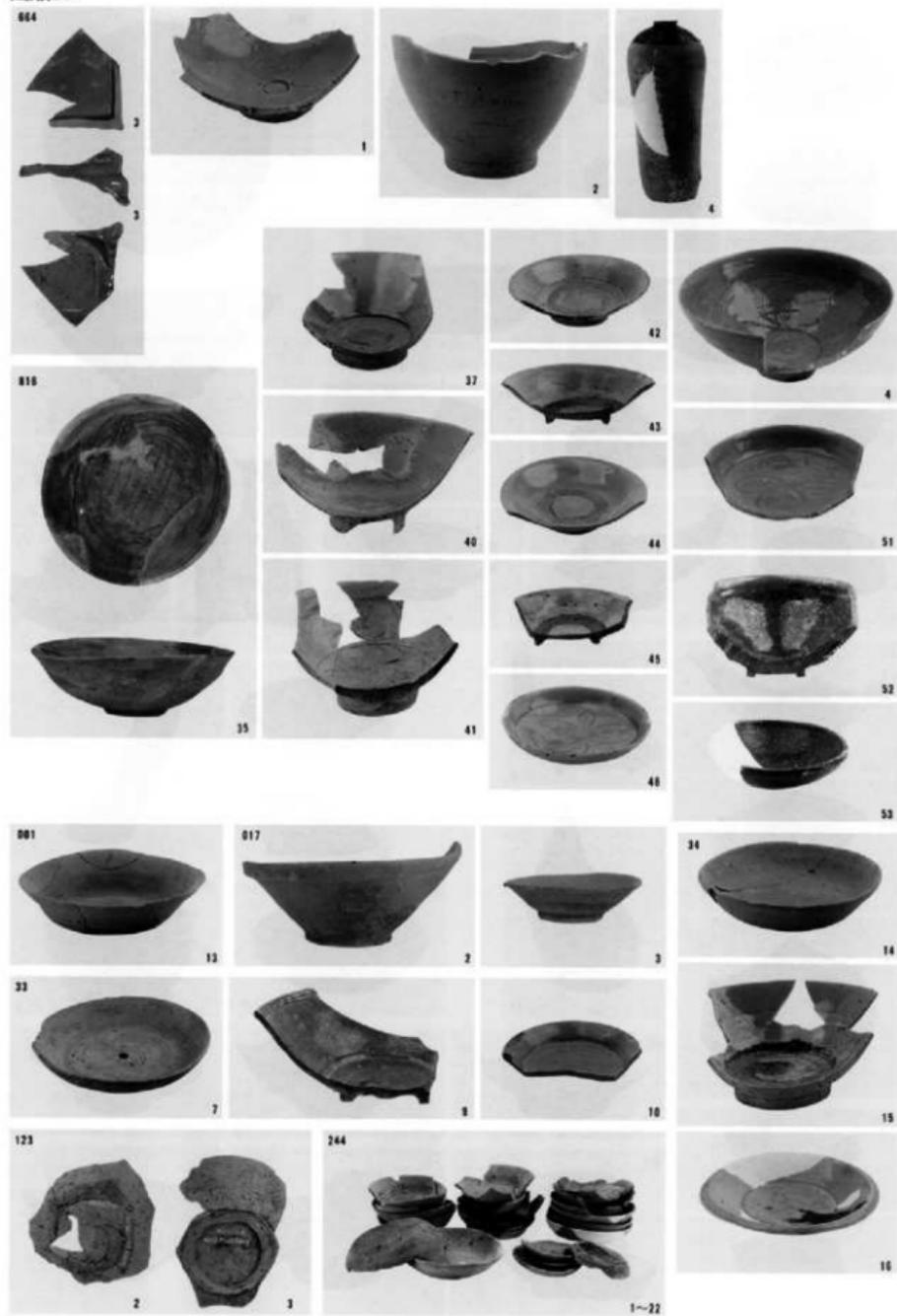


(8) 木炭片

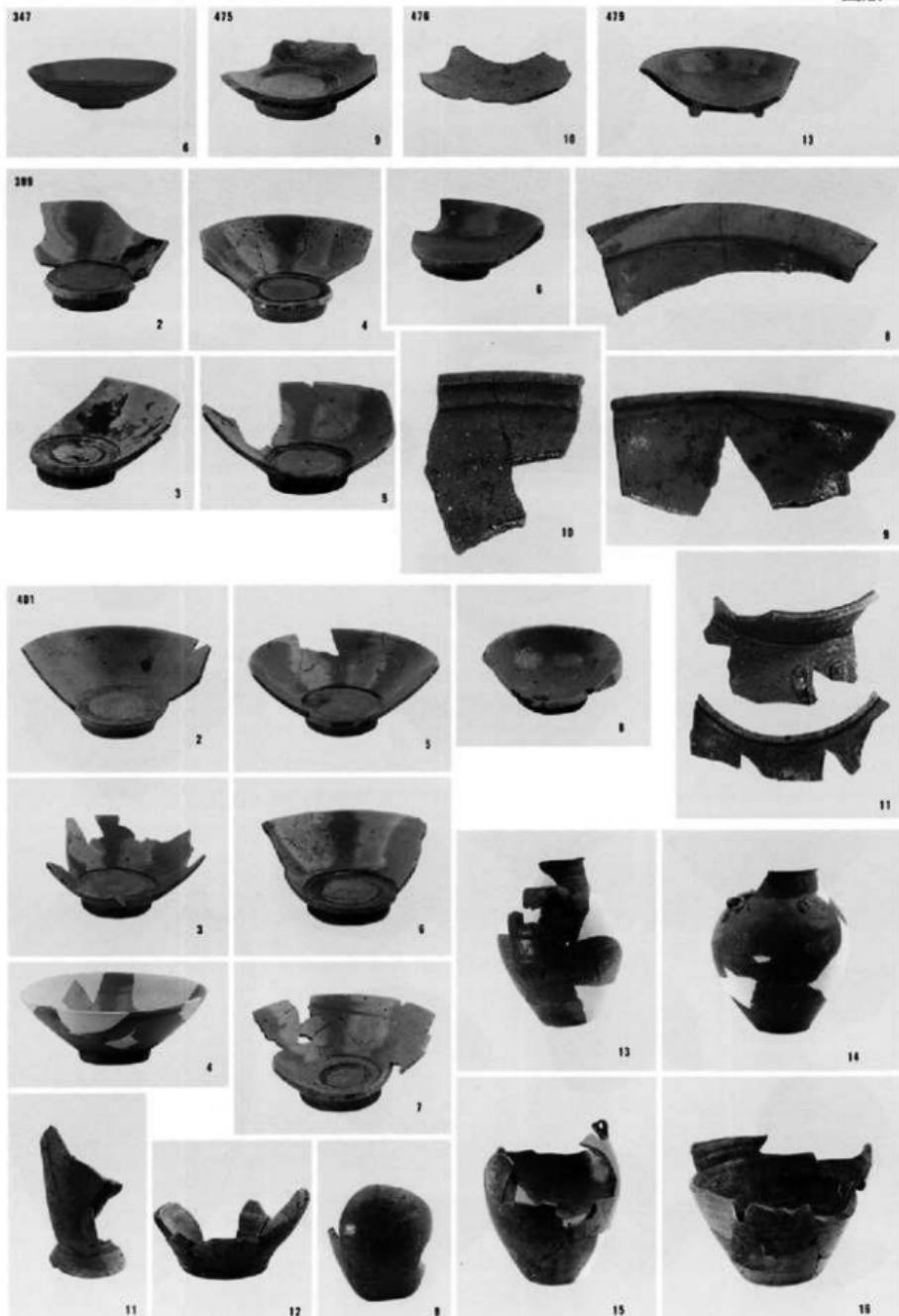


溝・井戸(1)出土遺物

図版24

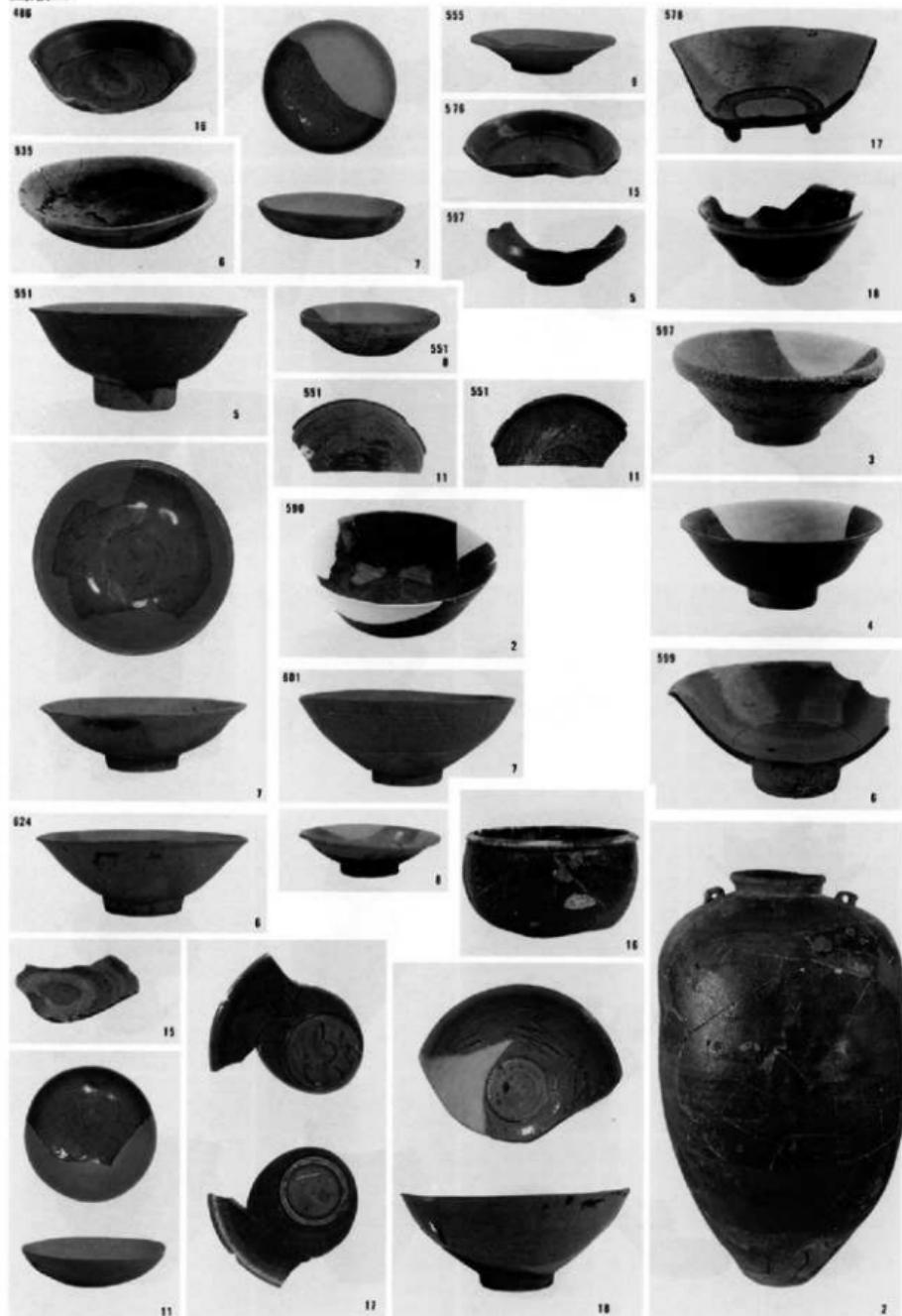


井戸(2)・土壤(1)出土遺物

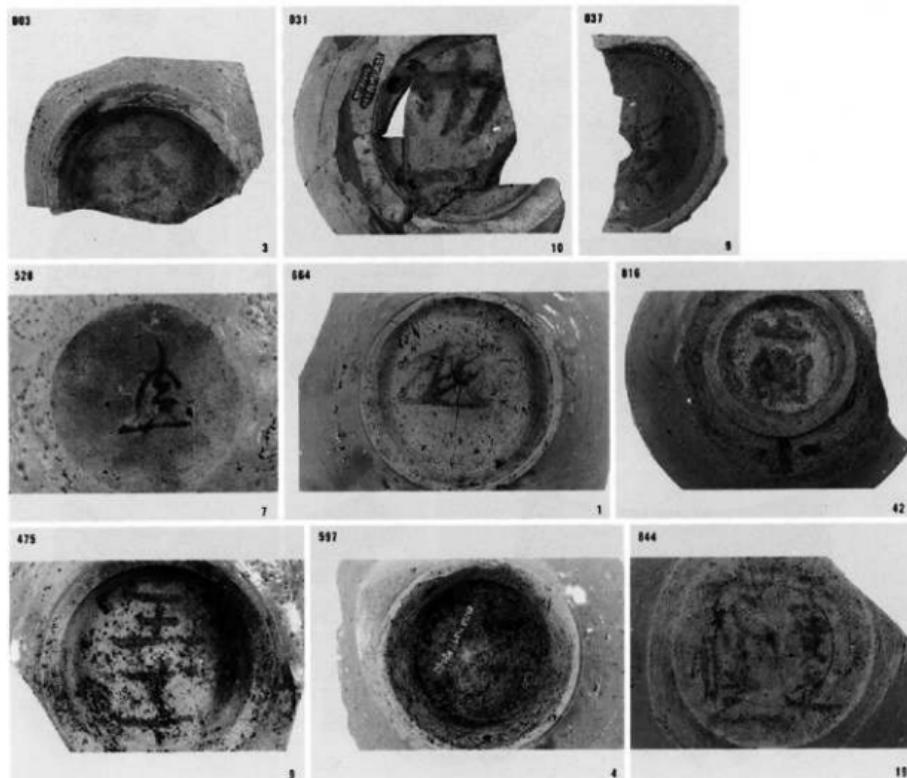
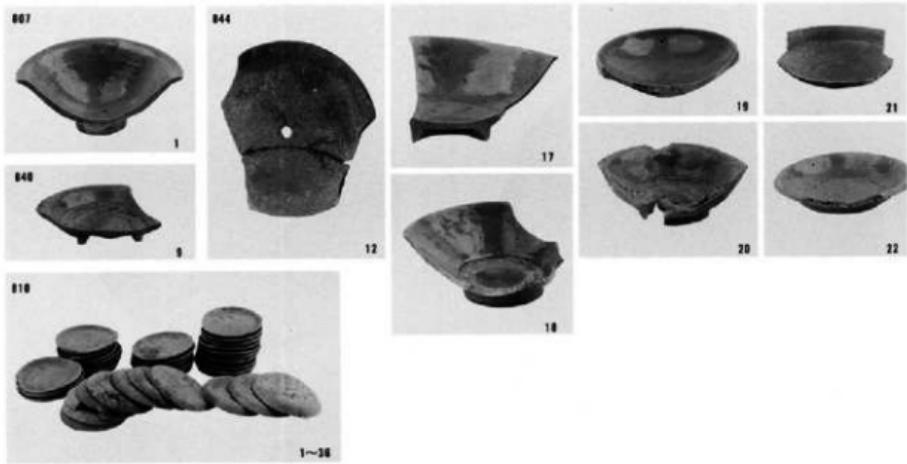


土壤(2)出土遺物

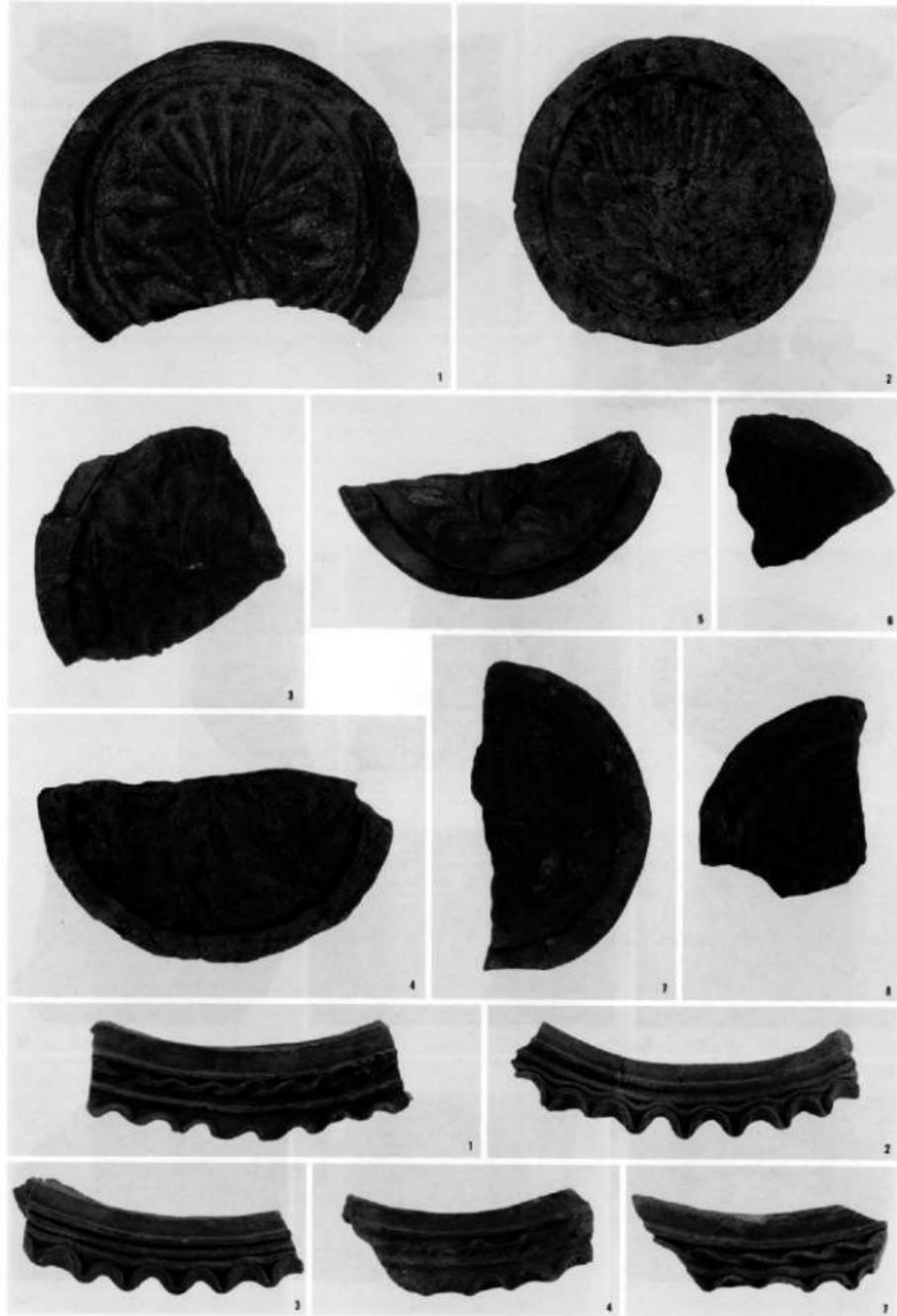
図版26



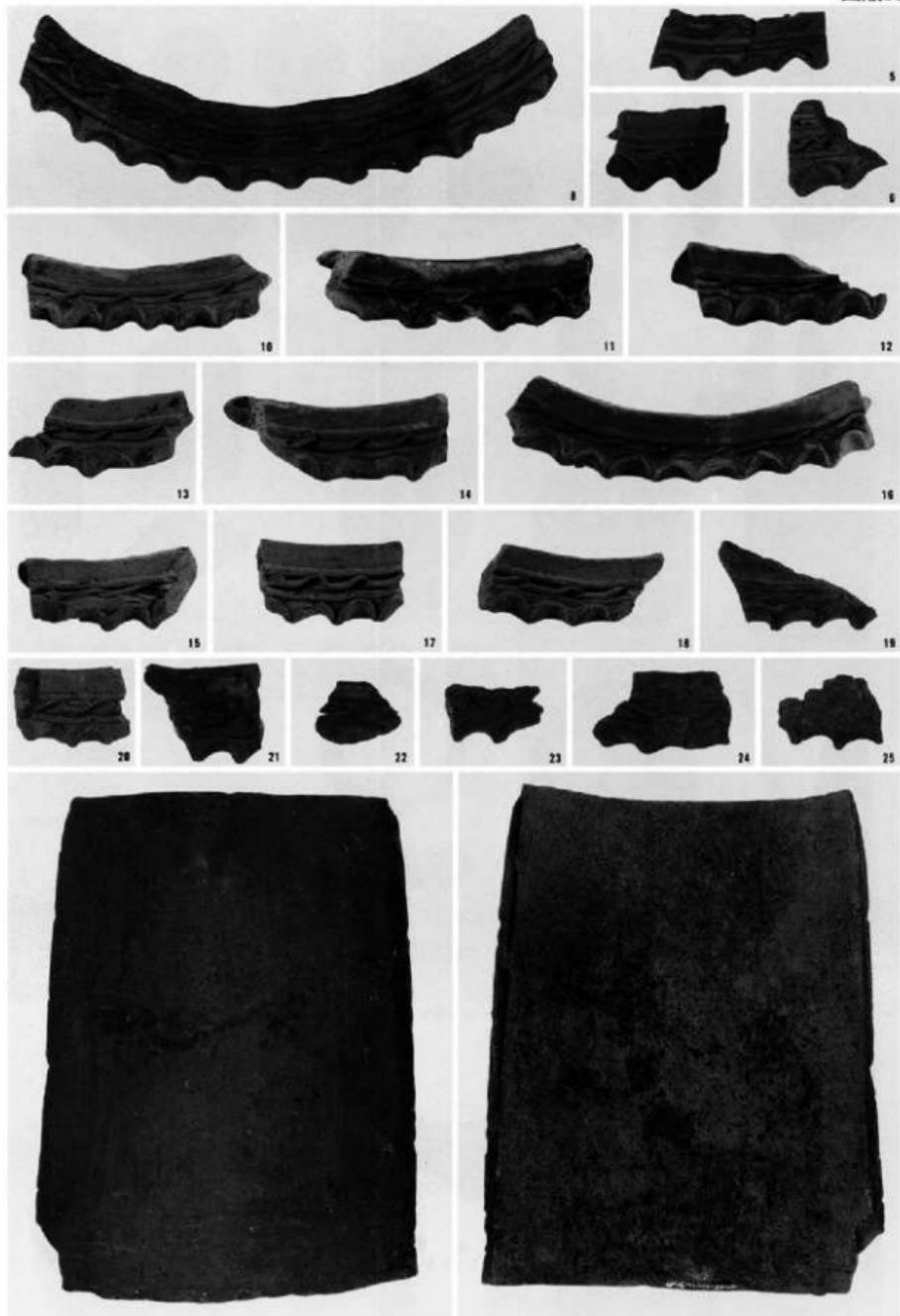
土壤(3)出土遺物



土塚(4)出土遺物・墨書き陶器



花卉文瓣丸瓦·押压波状文瓣平瓦(1)

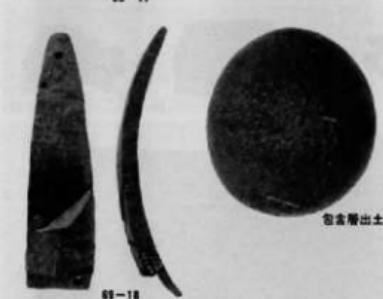
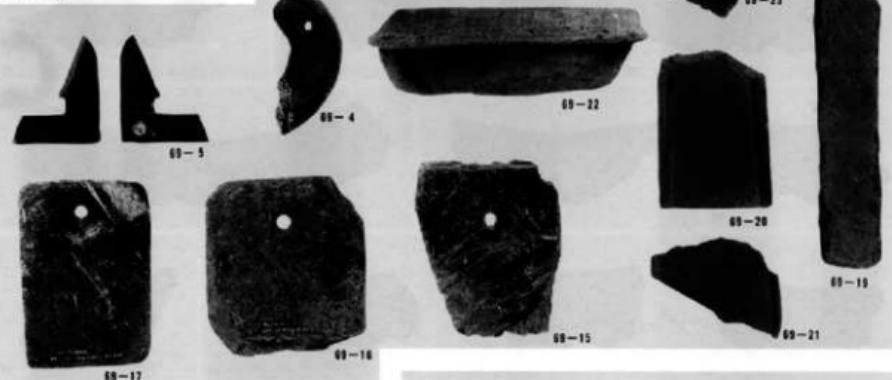


押波状文軒平瓦(2)・平瓦

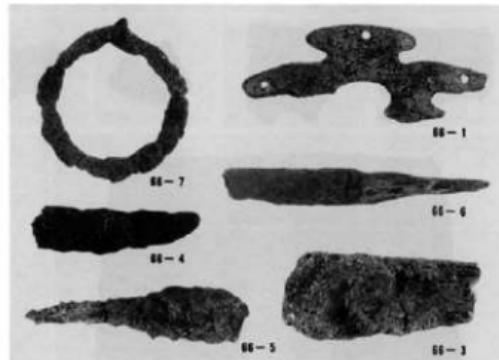
図版30



(1) 土製品



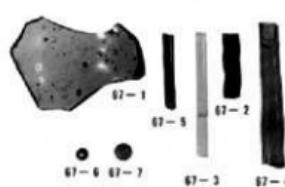
(2) 石製品



(3) 石製品



(4) 骨製品



(5) ガラス製品

その他の遺物



(6) 漆器(第71回)

博多 37

福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集

1993年（平成5年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印刷 福岡ドミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南六丁目6-1
(092)431-4061
